

---

# デュエル・マスターズDS

赤烏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

デュエル・マスターズDS

### 【Nコード】

N0165N

### 【作者名】

赤烏

### 【あらすじ】

トレーディング・カードゲーム『デュエル・マスターズ』を主軸に広がっていく物語。主人公の青森凌駕は謎の多い中学生だが、デュエルの腕はまずまず。そんな彼が、ひょんなことから出会った少年達とチームを組み、デュエルの大会へ挑む。

## VS団体戦（前書き）

この文章は実在するカードゲーム「デュエル・マスターズ」を主軸に置いた物語です。

なお、この物語はフィクションもいとこの作り話に過ぎません。それゆえ、実在する団体や地名、氏名年齢住所電番、公式大会などとは一切関係どころか縁もゆかりもございません。

## V S 団体戦

デュエル・マスターズDS デュアル・ソウル

そう、出逢いはあの大会のつい2時間前

「俺のターン！」

高らかな宣言。

少年は帽子を押さえ身構える。手札は2枚。カードは既に、この勝負の全てを語っている。自信満々な瞳がそう告げていた。

このデュエル、俺が既に「もらった」と。

その瞳に気おされるのは、シールド0枚と追い込まれた相手プレイヤー。彼はコントロール系デッキを用い、作戦に手間取っている間にシールドを0枚まで削りきられてしまったのだ。

だが、彼のバトルゾーンには《無限の精霊リーサ》が君臨している。パワー4500の無限ブロッカー《リーサ》は、敵の攻撃を死ぬまで防御し続ける。

なお、今は帽子の少年のターン。帽子の彼のクリーチャーは、パワー2000の《コーライル》とパワー1000の《斬隠テンサイ・ジャンット》が1体ずつ。この戦力では話にならない事は明白に過ぎる。相手プレイヤーはこの事実を見直して、安堵に胸をなでおろした。

それでも帽子の少年は、瞳に燃やす自信を絶やさない。  
そう、これぞデュエル・マスターズ。

カード1枚がどれほどまでに戦局を変貌させるものなのか、ここに立つ2人の決闘者は誰よりも理解している。

「マナゾーンにある6マナを全て支払い、」

マナゾーンにある6枚のカード達が横を向く。

帽子の少年の『切り札』が顔をのぞかせる瞬間、彼ら2人を取り囲む野次馬はヒートアップする。

「いくぜ、バトルゾーンのジャニットを進化！《超電磁トワイライト》をバトルゾーンへ！」

超電磁トワイライト 水文明

(6) 8000 サイバー・コマンド

進化 自分の「サイバー」と種族にあるクリーチャー1体の上に置く。

このクリーチャーをバトルゾーンに出した時、自分の「サイバー」と種族にある進化ではないクリーチャーを好きな数、バトルゾーンから手札に戻してもよい。その後、このようにして戻したクリーチャー1体につき、自分の「サイバー」と種族にある進化ではないクリーチャーを1体、手札からバトルゾーンに出してもよい。

W・ブレイカー（このクリーチャーはシールドを2枚ブレイクする）

青き電腦の巨人が、カードの姿を借りてバトルゾーンへと顕現する。

まだまだ、と帽子の少年はカードに触れる。

「トワイライトの効果によりバトルゾーンにある《コーライル》を、手札の《サイバーX・ザナドウ》と交換！ その効果により、アンタの《無限の精霊リーサ》をバトルゾーンから消し飛ばさせてもらおう！」

《サイバーX・ザナドウ》の効果で、《無限の精霊リーサ》は山札の一番下へと消えていった。

歯噛みする対戦相手。

この帽子の少年は、本当にカード1枚 いや、たった2枚の連携で、勝利への道をつむぎだした！

「 《超電磁トワイライト》で、トドメだ！」

シールド0枚、無防備な相手プレイヤーを撃ち抜く見事な攻撃。勝利条件達成。

わっと沸き立つ会場。

デュエルテーブルは歓喜に飲み込まれた。

「馬鹿な……おれの、ペテルギウスデッキが……」

うなだれる対戦相手。さぞ悔しかろう、彼はこのデッキにかなりの私財を投じ、自身の思い描く完璧なカタチへと組み上げていたのだから。

そう、己の全力を尽くし、デッキ同士がぶつかりあう。

そう、これぞデュエル・マスターズ。

「アンタ、デッキに穴多すぎだよ。レアカード積み込むのもいいけど、もっと全体見直すべきだぜっ」

帽子の少年はカードを整えると、腰のケースに落とす。

「ちょ、ちょっと待て……おまえ！」

うん？と帽子の少年は振り返る。

対戦相手の男が呼び止める声は、次にこう続いた。

「おまえ……名前は、なんていうんだ」

「俺は……ヨーヨーとかが趣味だ！」

「んな事聞いてねーし！」

「冗談だよ冗談……俺は青森<sup>あおもり</sup>凌駕<sup>リョウカ</sup>。また会ったらよろしく、ペテルギウスの先輩」

見事勝利を収めた帽子の少年、凌駕は、ある程度会場を沸かすとその場を立ち去った。

デュエル会場の脇に立っていた、知り合いと思いき巻き毛の少女と立ち話に没頭し始める。とても、白熱した一戦を終えた後とは思えない。

その様子を、憧憬あふれんばかりの瞳で見つめる影が……えっと3つほど。

「す、すい……」

「ねえリーダー、もしかしてあいつなら……」

「ああ。僕達のチームを背負ってくれるかも……しれない！」

そう、出逢いはあの大会のつい2時間前。

彼のデュエルを間近に見て、彼に惹かれた瞬間だった。

K県、とある町。

春の終わりに、この海沿いの町でデュエル・マスターズカードゲーム大会が開催される予定である。

年齢制限なし。完全なるフリーの大会。

デュエリストはそれぞれ、個人戦か団体戦でトーナメントに登録できる。参加資格はデュエル・マスターズカードを持っていけばよい。

ただし、個人戦に登録して出場した者が、同じ大会で団体戦にも出場する、ということができない。個人戦か団体戦、どちらかひとつを選ばなくてはならないのである。

「……で？ 凌駕、おまえはどっちにするつもりなのだ」

「俺はいつも通り個人で登録させてもらうよ。紫音しおんだってそうだろう？」

「ふっ。私はおまえを倒して世界へと歩む。悪いな凌駕、おまえはこの大会で果ててもらおう」

巻き毛の少女と、帽子の少年 凌駕が会話していた。

「相変わらずだなあ紫音。ドラゴン・ゾンビ戦法、拜ませてくださいよ」

「言われるまでもないな……じゃあ、本戦で逢おう………」と、そっぴいえば凌駕。もう登録は済ませたのだろうか？」

あ。



「……………おまえという奴は。さっさと行ってこい。締め切りだった、なんて事になったら笑い話にもならない」  
「キツイ言葉遣いなこつて。それ苦手だぜ……………あいよ、とっとと行って帰ってくる」

ああ、と見送る少女。

会場には人がごった返す。

まるで決闘者たちの鍋だ。これから彼らデュエリストは、テーブルという名の戦場で煮られる運命にある。

大会に出場する者も、傍観に徹する者も、等しくヒートアップさせる。デパートのフロアほどもありそうな試合会場は、そういった者達の熱気に溢れる。

人ごみに揉まれながら、なんとか受け付け会場まで辿りつく。途中に見た出場者は誰もかも、敵情視察にせいを出していた。

凌駕がいざ手続きを、というその瞬間

「凌駕さん!!」

どこかで見たような、仲良し3人組の声に呼ばれた。

だが当然会ったことも話したこともなければ、貸し借りの関係にある覚えもない。凌駕はぼかんとするだけだ。

「……………いや、誰? アンタら」

「凌駕さん、僕達、あなたのデュエルに憧れました!」

「さっきの水の戦法、スゴかったです」

「あたしなんかとても真似できません……………!!」

全く知らない学校の制服。トリオはどれも地元の中学生だった。男2人女1人の、傍から見ればどうしようもないデコボコチームという雰囲気である。

凌駕はその3人にあっけにとられつつも……軽く流してみる。

「あっそー。いやぁありがとう。じゃあ俺、手続きあるから」

と係員のほうへ向こうとした 途端がっしりと掴まれる彼の腕。

「あん？」

「ぼ、僕、チームリーダーの柳といますー!」

「おれは中堅どころの田所です!」

「あ……あたし鈴井です! えーと……一番弱いですう……」

「「お願いします、僕/おれ/あたし達のチームに入ってください  
!」「」

なんか頼まれた凌駕。

それはいいけど、腕を掴まれたまま頭下げられるもんだから引つ張られて痛いなのなんの。

「分かった分かった、ヒートアップするのもいいけど、離してくれ。腕が落ちる」

「参加してくれるんですか、凌駕さん!」

「まだそうとは言ってねー……ってコラ、すぐ掴みかかるうとすんじゃないねえ! 一旦落ち着けアンタら!」

3人は縮こまりながら、はいスミマセン、と小さな声で応答した。

「……それで。なんでチームに入ってくれなんて言い出すんだ？  
団体戦のメンバーは3人。アンタら3人で丁度足りてるじゃん。欠  
員とかじゃないなら、何が目的だったんだ？」

リーダーの柳が答える。整った顔をした中性的な男子だ。

「は、はい……実は僕達、毎年出場するのはいいけれど、毎回最初  
のほうで負けちゃうんです」

中堅どころと言っていた田所が続ける。眼鏡の生意気そうな男子  
である。

「だから、今年は誰か強い人に助っ人として参加してもらえないか  
なあって思ったんすけど……」

一番弱いと尻込みしていた鈴井が締める。小柄な女子だった。

「さっきのデュエルを見て、あなただと決めました。凌駕さん、ど  
うかお願いします！」

「やだ。」

秒殺。

スムーズに個人登録へと移行する。

「そ、そんなぁ……どうしてですか！」

「俺には俺の目的があつてこの大会出てんの。アンタらに付き合っ  
てるヒマはちよつと無いな！。っーわけで他あたってくれ」

「お、お願いします！ ほら、例の噂もあつて怖いんすよ」

びくり。

「なんだその、例の噂って」

「あやし達、さつき知ったんですけど……この大会に、毎回誰か強いメンバーをスカウトして、上位に食いこんでくるチームが出没するらしいんです……」

「正規のメンバーを使わず、他方から引き抜いて結成するチームか」

はい、と3人は頷く。

「だから、そんな強いとこと当たって勝つには、こっちも誰か強い人をお願いしようって……」

「そ、それに……その……」

鈴井が言いよどむ。

「どした？　なんか事情あんの」

「あやし達……中学2年生なんです。今年を逃したら、来年はもう受験があって……勉強で忙しくって、デュエルする時間がなくなっちゃう。だから最後の大会で……少しでもいい成績残したい……」

なるほど。うっかり涙が零れそうな話ではある。

「でもさ、俺がアンタらのチームに入ったとしても、団体戦は3人枠なんだから1人出られなくなるぜ？」

「いいんです！」

柳がうなつた。

「俺達、少しでもいいから高いところに行きたいだけなんです！　ちよっとでも勝ち進められれば満足なんですよ……」

「最後、ねえ……」

そこまで呟いて、凌駕は大事なことを思い出した。

「え？　つてか中2なの？　同い年じゃん、俺ら」

「ええええええ！？」

「ご、ごめんなさい……あんまり地元で見かけなかったもんすから、つい」

「いやまあ、いいんだけどさ。タメ口で話そうぜ、今からチームメイトなんだし」

へ？

「チームに……入ってくれるんですか！？」

「タメ口つつつたる。まあ、なんとなく見過ごせないし加担してやるぜ。俺ってわりと気まぐれだからさ」

3人はわーっと大声で騒ぎ出したところを、場所を見てとりあえず自重した。

当の凌駕は、紫音が知ったらなんて言うかなと危惧している。そうこうしているうちに、いつのまにか個人戦はスタートしている。

「お、やってるなあ……」

凌駕は思わず目を奪われる。

個人戦は団体戦とは違って、1対1のデュエルがあちこちで同時に行われる。ふと見渡すだけで、そこには多種多様な戦術がデュエリストの数だけ展開されていく。

凄まじい熱気。

手を抜く者など誰もいない。

『おーっとう！ 第3テーブル、さっそく《龍神ヘヴィ》と《龍神メタル》がG・リンク！ ヘヴィメタルのお出ましだぞおおおっ！』

実況にも熱がこもる。

これだけの広大な会場に、実況はひとりしかいないのか。春だからいいけれど、夏だと死ぬぞあの兄ちゃん。

「個人戦、何時からだっけ？」

「もうあと1時間くらいで……」

「よし、じゃあ登録しようか。誰が俺のかわりにメンバー外れるんだ？」

尋ねたところ、あらかじめ打ち合わせてあったのか、田所が一線を退くことになった。

こうして彼の中学のデュエルは幕を閉じる。彼自身は、それでも構わないという目をしている。

「うっし、じゃあ登録も済ませちゃまったことだし」

「ことだし？」

「デュエルでもして、暇潰します？」

田所が尋ねると、凌駕はいや、と答えた。

「さっきはテストのために対戦してたけど、あまり人目につく場所で手の内晒すの、よくないぜ。むしろこっちが、こっという空き時間に手の内晒しまくってる相手を敵情視察するのが妥当だな」

なるほど……と3人が同時に感嘆する。

「じ、じゃあ凌駕くん、これから敵情視察するんだね！」

と柳。

「いや俺そーいうのやらねーんだ。めんどいし」

と凌駕が一蹴。ポケットからヨーヨーを取り出すやいなや、両手の指に結んでダブルループなどキメ始めた。

右手に青、左手に緑の綺麗な楕円。2つの天体を描くような軌道はじつに美しい。

「こーいう時間は暇潰し暇潰し。リラックスしとかねーと、な」

左右それぞれ実に10回転。

「り、リラックス……ですか」

「そーそー。当たり障りない会話とかすりゃ自然と緊張も解けるだろ。なんか適当に話でもしようぜ」

はあ……と空返事の3人組。

「そ……そうは言っても、何話せば……」

「うん。とりあえず、ねえ鈴井さん。アンタ彼氏いる？」

「え……ふええええええ!？」

3人組で唯一の女子。紅一点。鈴井水子。彼氏なし。

「なるほどなるほど。ただ、訊いただけなのに殴んのやめたほうがいいぜー……」

「う、ごめんなさい……」

「よし。んで柳！」

「な、何？」

「アンタ彼女は」

「いないよ！ 何がしたいんだよ、凌駕くん！」

「だから暇潰しだってー」

3人組のチームリーダー。頭脳派？ 柳太一。彼女なし。

「よし最後。田所！ アンタは彼女は？」

「いるっすー。同じ中学にひとり……あはは」

おお。

3人組の生意気眼鏡。眼鏡。眼鏡の田所強。彼女もち。

「よし、これでアンタらのことは大体分かつ」

べしんっ！！

……雷鳴のような音が響いたかと思うと、凌駕の頭が地面に叩きつけられていた。

その後ろには、怒りと哀れみに燃える瞳の少女。特徴は巻き毛だ。

「し、紫音……」

「おまえ……いったいどういつつもりだ……！？ 個人戦会場に見かけないと思ったら、見ず知らずの輩と団体戦で出場しようとするのか、凌駕！」

「ああ、悪いけどそうだったんでよろしく」

紫音と呼ばれた少女は、かあっと頬を染める。怒りに燃え、激昂が沸点をゆうに通り越す。



「でもさあ、紫音が個人優勝、俺が団体優勝きめちゃえば、俺らどつちも世界に行けるんじゃないかな」

「……………。一緒に行こう、とでも言いたいのか」

「ああ」

少女は、まったく救いようがない、とはきすてて踵を返す。

「勝者はひとり。私たちはあの日、それを誓い合っただはずだぞ……」

凌駕

「紫音は紫音で頑張れ。俺はこのチームを、ちょいつと優勝させることに決めた」

ふん…………。

紫音という少女はいつまでも不機嫌なまま、個人戦での連勝を収め、土石流の勢いで準決勝へ駒を進めた。さも当たり前といった表情をして。

…………。大会はさらに白熱する。

紫音は個人戦にて決勝にまで手を届かせ、一方、凌駕率いるチームも、驚くべき快進撃を会場にとどろかせていた。

何せ凌駕が入るまではほぼ無名のチームだ。名無しの権兵衛どもがいきなり準決勝に名前を刻もうなどと、台風並みの衝撃である。

「つす……すごいぞ凌駕！」

そして、準決勝を難なく圧勝。

ここにいたるまでには、とうとうチームメイトも彼を呼び捨てにするようになっていた。

凌駕がチームに溶け込んだ頃。

「……………なにを、やってるんだ。青森凌駕」

遙か遠方。会場の隅から、見知らぬチームメイトに囲まれ笑顔を見せる彼を睨む、少年がひとり。

彼も紫音に並ぶ、個人戦、決勝進出者である。

『ツキターーーー！！ 団体戦にて波乱！ 無名のチーム、トーナメントナンバー36番が奇跡の快進撃！ 決勝進出を勝ち取る ……！』

「よし、後は決勝だけだな」

うーいと背伸びする凌駕。

これまでの彼らチームのデュエルは、凌駕を切り札 ストに置いた連戦だった。 つまりラ

それまでに、凌駕はチームメイトのデッキ及び彼らの実力を測ることに成功。

『ようし、それではこれから　個人戦決勝、そして団体戦決勝を同時に行うぜ！　会場みんな、ついてこれるかー!?』

「……本当に、決勝まで来たのか」

「俺は冗談はいうけどさ、決めたことは曲げるつもりないぜ」紫音

「ふん……せいぜいチームメイトとやりに、足元を掬われないようにしろ」

凌駕は無言で、個人戦決勝の舞台へ歩を進める紫音を見送った。

「あの人……凌駕さんの、彼女さんですか？」

鈴井の声。

まだ凌駕を「さん」付けで呼ぶのはこの子くらいだ。

「いや彼女じゃないなあー……ていうかなにその質問。さっきの俺への仕返し？」

「あー……そ、その、」

『さア!!　団体戦決勝戦！　その輝しき舞台に立つのはこの2チーム!!』

実況の声に遮られ、鈴井の声は届かず。

『まずは、脅威の無名チーム！　トーナメントナンバー36番らん!!』

実況の紹介で、湧き上がるスタジアム。

どこからこんなに人が沸いたんだ、と一度は思ってしまうのがデ

ユエルの会場というものだ。

『チームリーダーの柳くん率いるズッコケ3人組は、今大会がはじめての決勝進出となる！　どんなデュエルを見せてくれるのか期待はデカいぞおお！』

「な、なんか仰々しい紹介だねー……凌駕」

「うん。ていうかズッコケってなんだ、ズッコケって」

『そして片や、昨年の優勝チーム！　トーナメントナンバー2番！　磐石なその強さを見る者を圧倒するううう！！』

昨年の優勝チームとやらが舞台上がる。舞台といっても、予選より少しばかり豪華で大きなテーブルが置かれているだけだ。

いずれの3人も、デュエルに手馴れている。

凌駕は雰囲気だけでそれを読み取る。周りのチームメイト2人は会場の熱気に吞まれてそれどころではないが。

『中でも15歳の竜條君は、昨年の秋季全国大会個人戦優勝者！　だがあの頃のようなメタコントロールは今大会封印！　正々堂々殴り潰すとの宣言だああ！　会場みんな、圧倒されないように気をつけるおおおお！』

竜條連次。

ロツカーのような逆立てた金髪の、団体戦3番手。すなわち、凌駕と同じポジションである。

「……クールな御仁だね」

彼を凌駕はそう表現した。

チーム戦において、実力者が配置されやすいのは1番手と最後。1番手にチーム最強を置けば、初戦から敵を大きく掻き乱せるが、

デッキタイプが露呈し対策をとられやすい。最後に置けば、少ない試合数を確実に勝利し、また対策も練られづらい。

この2チームはどちらも、そういう意味では慎重派だったようだ。

『よっしゃあ！ それでは各チーム、ポジションについてくれ！

さあああ、デュエルスタートオオオ！！ 皆おっはじめやがれー

！！』

「 《黒騎士ザールフェルドⅠⅠ世》で攻撃！」

チームリーダー柳のデッキは、かなりマニアックだった。

「よし、これでおまえのシールドは残り3枚！ ここから《ザールフェルド》で攻め込むぞ……！！」

「ハン、いちいちうるせんだよ！」

柳のデッキは、《神々の逆流》と《ロスト・ソウル》のコンボを絡めたザールフェルドデッキ。

しかも意外や意外、そこに《ルナ・コスモビュー》を突っ込んでいる。俗に言う「逆流コスモ」をナイト化したような感じか。

一度決まれば相手は手札0にマナ0、こちらは《ザールフェルド》に加え4体の《コスモビュー》……と、かなりの制圧力を見せるのだが。

「S・トリガー《デーモン・ハンド》！ 《ザールフェルド》を破壊する」

「あッ……」

このように、キーカードがある程度絞られているので対策をとられやすい。

「俺のターンで《聖霊王アルカディアス》を召喚！」

「し、しまった！」

またもキーカード対策である。

《アルカディアス》は光以外の呪文を封じる進化クリチャー。

《神々の逆流》を封じられた柳は、クリチャー戦で勝つしかない。

「いけえ！ 《アルカディアス》でシールドをW・ブレイク！」

柳のシールドは削られる。すでに1枚へと追い込まれていた。

対戦相手の戦法は、光と火中心のロック&ビートダウン。その構成は一流とは言いがたいものの、とにかく、下準備が肝要な柳にとってはかなり苦手な相手である。

「S・トリガー、《爆獣の超人》を召喚！」

「何やったって無駄じゃねえの……」

「うるさい！ ゲームは最後まで、誰が勝つか分からない！ いくぞ、僕のターン！」

まだまだ未熟で荒削りながらも、強い信念を持ったプレイヤー。それが柳。

「《蒼狼の始祖アマテラス》を召喚！ デッキからクロスギア《イ

モーター・ブレード』をジェネレート！」

「なっ、に……！」

危機に見舞われる対戦相手。

だがその実感ももう遅い。これがデュエル・マスターズの逆転のスピードなのだから。

「バトルゾーンにある『魔光ドラム・トレボール』で『聖霊王アルカディアス』を攻撃、スレイヤー発動によって『アルカディアス』を破壊だあ——！」

「……やるじゃん、柳」

その後もしぶとくビートダウンを繰り返すことにより、逆流コスモコンボも相まって柳は見事、勝利を収めた。

「や……やったよ凌駕！ 僕、決勝で勝ったんだ……！ うおおお

おおお……もう思い残すこともないよ」

「まだ優勝したわけじゃねーだろ、柳」

悪態をつきながらも、チームリーダーの勝利を讃う凌駕。

……その端で、1番手に名乗り出て即座に負けた鈴井がうなだれる。

「……アンタも、いいデュエルだったぜ、鈴っち」

「す、鈴っちって何……」

だが、これで対戦相手のチームは最終番手の竜條を残すのみ。チ

1ムナンバー2番は、柳に2人連続で倒されたのだ。

どうやら向こうの本命は竜條ひとりで、残りは数合わせと考えるのが妥当か。思い出してみれば、去年の優勝者も竜條だけである。

「さて、柳。こっからが本番みたいだぜ」

会場が湧き上がる。

地震でも起きたのかと感じる瞬間。

最終番手 竜條が腰をあげた。

その時、会場は煉獄へとすりかわる。勝ちも負けも分からず右往左往するデュエルに、完全な『勝利』の二文字を抉り取るために歩を進める。

渦巻く会場の蒸気。誰もが思い思いにこの決勝をたたえる。そんな中、表情を崩さないのは竜條と、凌駕のみ。

「ち  どいつもこいつもヒートアップしてんなあ。呑まれんなよ、柳」

「だ……大丈夫だよ凌駕。ここまで連勝したんだ、弱小の僕だってやれるとこまでやってやる……！」

「……そうかあ？  意外と強えーぜ、アンタ」

「そ、そんな事……！」

『さあああ！！  いよいよ団体戦決勝も大詰め！  最終番手の竜條くんと、無名ながらも決勝へとチームを引っ張り上げた総大将、柳くんの一大勝負が幕をあけるああああ！！』

実況は相変わらずうるさかった。

会場内の熱気は底上げを繰り返し、健康面ではなかなか芳しくない。



そして チームリーダー柳の戦場もまた、芳しいとはいえなかった。

「《黒騎士ザールフェルドⅠⅠ世》召喚！」

柳は当初の戦法どおり、《ザールフェルド》をバトルゾーンに出す。

さらに攻撃。昨年度全国大会優勝者である竜條のシールドを、残り2枚まで削ったのが5ターン目の出来事。

「さあ竜條、きみのターンだ！」

「おおおう！ これはこれは、柳くんが竜條くんのシールドを削る削るうう！！ もしかしたらありえるかも知れない！ 昨年度優勝者を有するチームを3人抜きするという、信じがたい光景が！」

「……俺のターン」

竜條のmanaゾーンにはカードが5枚。これだけではまだ序盤も序盤だ。

だが、彼のバトルゾーンにあるクリーチャーが、彼のデッキタイプを大いに物語っている。

「3manaを使い、2体目の《コッコ・ルピア》を召喚。2体のコスト軽減能力により、2manaで《ボルシャック・大和・ドラゴン》を召喚する」

「なっ……スピードアタッカークリーチャーだっ……!?」

柳のバトルゾーンには、タップ状態の《ザールフェルド》が1体

のみ。

「《大和・ドラゴン》で《ザールフェルド》を攻撃、パワーアタッカーでパワー1000アップ。これにて相打ちとする」

流麗な声が静かに響く。

パワー7000同士のバトルにより、ザールフェルドと大和・ドラゴンの双方が破壊された。

「くっそお……」

柳のクリーチャーがゼロになる。

さらに、先出ししていた別のクリーチャーが攻撃する。……これが、竜條のデッキタイプを見事に物語る。

「《紅神龍バルガイザー》で攻撃し、シールドブレイク。さらに効果発動」

柳のシールドを4枚へ減らす。

さらにバルガイザーは攻撃時、山札の一番上を表向きにし、それがドラゴンであればバトルゾーンにノーコストで出せるという能力を持っている。

つまり

「山札の一番上は《竜星バルガイザー》。ドラゴンだ」

「何だつて……！」

柳は息を呑む。

バルガイザーは8マナのスピードアタッカー。つまり、このクリーチャーも召喚酔いなく殴ってくる！

「攻撃。シールドをW・ブレイク。  
だがシールドをブレイクする前に、《竜星バルガライザー》の攻撃時の効果を解決する。その能力は、」

その能力は、《紅神龍バルガレイザー》とほぼ同じ。

山札の一番上を表向きにし、ドラゴンであればバトルゾーンに出す事ができる。そして竜條のカードは

「山札から《インフィニティ・ドラゴン》をバトルゾーンへ！」

ざわっ……！

周囲の空気が一気にすりかわる。

「さて、シールドをブレイクする」

「くっ……《バルガライザー》に破られたシールドのS・トリガー  
《デーモン・ハンド》で、《竜星バルガライザー》を破壊する！」

「その時の能力発動。インフィニティ・ドラゴン山札の一番上を墓地に置き、それがドラゴン  
またはファイアー・バードなら、破壊を無効にする！」

不死の竜と呼ばれる《インフィニティ・ドラゴン》の特殊能力。

味方ドラゴンがバトルゾーンを離れる時、運任せで生き延びることが  
ができるのだ。

「山札の一番上は《リップ・ウオッピー》。ファイアー・バードだ。  
よって《バルガライザー》は破壊されず、バトルゾーンに留まる」  
「くそっ！……だが、まだまだ！ 負けたわけじゃない、僕のタ  
ーン！」

ドロー、そしてマナチャージ。

そう、まだ負けたわけではない。勝負は最後まで分からない。だが戦況の優勢劣勢は、誰が見ても分かる。

柳はマナゾーンにカードが7枚。シールド2枚、クリーチャー0。竜條はマナゾーンにカードが5枚。シールド2枚、クリーチャーは《コッコ・ルピア》2体に《紅神龍バルガゲイザー》、《竜星バルガライザー》、《インフィニティ・ドラゴン》。しかも《バルガゲイザー》と《バルガライザー》は、生かしておくだけで次のドラゴンを呼んでしまう。たとえ、竜條の手札が0であっても。

そう　竜條のデッキタイプは、ここに来て明白である。その名も連ドラ。

重量級種族であるドラゴンを連続して召喚することをコンセプトにした、パワーデッキである。

「な……なんだよ、これえ……勝てないじゃないか、どうやっても！」

柳は絶叫する。

しかし、竜條はその姿をしんと見守っているだけだ。

彼はただ待っている。柳の行動を。

無駄なあがきを。

そして自分のターンが回った時、一気に勝負を決めるその瞬間を待っている。

「くっそおお……」

ここに、勝敗は決定である。

だが柳は勝てないことを理解しながらも、このデュエルを投げ出さない。

「《カラフル・ダンス》を発動、マナゾーンに《コスモビュー》を

溜める！」

あくまで最後まで自分のデュエルを続けたい、と彼の魂がうなる。

「さらに《デイメンジョン・ゲート》発動！ 山札から手札へ《黒騎士ザールフェルドIEI世》を加え、そして残りのマナで《魔弾バレット・バイス》！」

竜條の手札を1枚、捨てさせる。ただし選ぶのは竜條だ。

これは柳の、いわば無駄なあがきだった。

不要な一発。

不必要なハンデス。

これがさらに、彼を絶望させる。

「では、手札から《翔竜提督ザークピッチ》を捨てる。……マッドネス効果、発動。ザークピッチは手札から捨てられるとき、バトルゾーンへ出す事ができる！」

これで、ドラゴン4体目。

柳に、これを防ぐ手段はない。

「僕の……負け、です」

負ける瞬間になって、当初の意気込みを思い出す。

これが最後の大会だから……せめて、いけるところまで行きたい。

「俺のターン。《竜星バルガイザー》でシールドをW・ブレイク」

柳、シールド。

「ターン終了」

柳のターン。

「……………え？」

……………どよめく会場。

ざわつく。

今、あの男はなんと言ったのだと。

『お、おおっとう？ これはどうしたことかつ、竜條くんが自分のターンを放棄！ ターン終了を宣言したあ！』

「ど……………どういう事なんだよ！」

「……………オマエ、《ルナ・コスモビュー》を出したいんだろ……………？  
なら出せよ」

「は……………は……………？」

「せっかく初めての決勝なんだから、自分の戦術を見せ付けなければい。会場にはこれだけの人が見に来てくれている。自分のデッキを見てもらいたいとは思わないか？」 『柳』

ぞくり、とする。

『な、な、なんとおっ、竜條くんは柳くんの好きにさせたいのだという！ 決勝という晴れ舞台に、その姿を残していけと！ これは竜條くんなりのスポーツマンシップ、いやデュエリストシップなのかー！？』

スポーツマンシップ。

デュエリストシップ。

それって思いやりか？



『柳くんはここで棄権。それもそのはず！ 竜條くんの圧倒的ドラゴン展開を、とめられるものなどいるのかー！』

「……柳、安心しろ」

「りよ、凌駕……ありがとう。僕……どうなっていたか」

「今はそこに座ってる。………………す」

「え？ 凌駕……今なんて、」

周囲の応援よりも、よりはっきりと聴こえる宣言。

「竜條は俺が 潰す」

『さあ！ そうこうしてる間に個人戦決勝者が決定ー！ 優勝者はエントリーナンバー22番、その名も楽絵紫音！！ 彼女も今大会は初参加のようー ……』

「紫音、勝ったのか……」

まあそりゃそうだな、と凌駕は内心で毒づく。

今の自分のやるべきは、目の前の強豪をつまみ出すこと。

竜條、連次。

「……よお、竜條サン。アンタが薄汚れた奴だったの、十分わかったぜ」



「……さて。デュエルマスターズというものは弱者の拠り所であるべきではないと、俺は思うんだが」

何？ と凌駕は発音しようとするが、それを実況に阻まれた。

「 という風に、今回は新参者が暴れまわるダークホース大会と化しているぞ！ さあさあお次は団体戦決勝、大将戦だああ！」

もう、言葉は要らぬ。

周囲の声を掻き消すように。

余計な音を聞き入れぬように。両者は同時に、シールドを展開した。

「《幻緑の双月》を召喚！ 1マナ加速だぜ！」

ドリーミング・ムーンナイフによって、手札からマナを1枚増やすことができる。

「さらに《海底鬼面城》によって増やした手札で、《マリン・フラワー》召喚！ ターンエンドだ、竜條！」

「す…すこいや凌駕、たった2ターンであの展開力…！」

「柳さん、あーいうのって鬼面城ビートっていうんだっけ？」

「そうだな、田所……。手札を増やす《海底鬼面城》をベースにしたビートダウンか……」

凌駕のデッキは水・自然のビートダウンだと気づいたのは、トーナメントで2回ほど戦ってからだった。

凌駕の初手は《海底鬼面城》。

次に《幻緑の双月》を出してマナブーストし、同じターンに《マリン・フラワー》。

低コストクリーチャーを操る、マナ加速+中速ビートダウンデッキだ。

「ねえ柳くん、あれってすごいのか……?」

「なかなかだよ、鈴井。水のドロで増やした手札をマナブーストに使うから、手札切れを起こさず加速できる。それに、通常のマナ加速と違って必要なカードをマナに落とす心配がない……」

そう。

凌駕の切り札《超電磁トワイライト》を守るために。

さらにデュエルは進行する。

「《コッコ・ルピア》を召喚。ターンエンド」

「それだけでいいのか? せっかく手札ふえてるんだろ。まあいいけどさ俺のターン!」

凌駕はデッキからカードを引き抜く。

「いくぜ、アストラル・リーフ進化獣召喚! これでカードを3枚ドロ! さらに2マナで《スパイラル・ゲート》! ルピアを手札に戻してもらっぜ、竜條!」

「ちっ……」

「いけ、《アストラル・リーフ》! 竜條のシールドをブレイク!」

「S・トリガー《地獄スクラッパー》。ムーンナイフとリーフの2体を破壊！」

「ああ、凌駕のクリーチャーが0に……！」

「しかも、このターンで竜條はさらに展開してくるっすね」

「俺のターン。《コッコ・ルピア》召喚、さらにコスト軽減で《アンビシャス・ドラゴン》を召喚する」

竜條の展開は速い。

なぜなら、凌駕の《海底鬼面城》によって竜條もカードを増やしているからだ。

「おまえの戦術が仇となる。なかなか面白い最期だな、『凌駕』」  
「はっ！ 一応言っとくけどな、そんならいのスピードで勝った気になられちゃあ、俺の気が収まんないね。《幻緑の双月》、《マリオン・フラワー》召喚！ さらにフラワーを《アストラル・ラッシュ》に進化……！」

ラッシュの効果で、アンビシャスが手札に帰る。

そして攻撃。竜條のシールドは3枚になった。

「ふ……」

竜條は少し笑みを浮かべたかと思うと、

「俺のターン。2体目の《コッコ・ルピア》召喚、さらにコスト軽減で《竜星バルガイザー》を召喚！」

このプレイングに、会場は沸きあがる。

「出た、バルガライザー！」

「あの相手の帽子野郎、終わったな……」

「ママー、トイレどこ？」

竜條の切り札ともいえるドラゴン、《竜星バルガライザー》。

しかもそのスペックは、攻撃すればドラゴンを呼べるスピードアタッカー！

「凌駕のシールドを2枚ブレイク。これによって《海底鬼面城》を墓地へ。……さらに攻撃時、山札の一番上がドラゴンであれば、バトルゾーンに出す事ができる！」

「ま、まずいよ凌駕！ はやくそのバルガライザーを除去しないと！」

だが、柳の声は届かない。

届く前に、会場の歓声にかき消された。

「……ヒットだ。《紅神龍バルガライザー》をバトルゾーンへ！」

「やるじゃねえか、竜條。コンセプトカード2連発とはね……だが、俺もいまブレイクされたS・トリガーを発動！ 《デイメンション・ゲート》で山札から《超電磁トワイライト》を手札に加え、《サイバー・ブレイン》でカードを3枚ドロップ！」

『なんとおお、竜條くんのドラゴン2連発に対抗し、青森凌駕くんはS・トリガー2連発で反撃だああ！！』

「すげえ、なんだこのデュエル！」

「今のところは竜條が圧倒的だよな？ けどなんでこんなに、先が分からないんだ！」

「ママー、トイレないのー？」

デュエル・マスターズのスピードだ。

カード1枚の出現が、一時の優勢や劣勢など、瞬時に真逆のものへと変えてしまう。

「さあさあああ！ 俺のターンだぜ竜條！ マナチャージだ。見せてやる、俺のお家芸をなあっ！ 2マナで《電磁封魔ロッキオ》召喚！」

『まだまだ勝負は分からないぞおお、凌駕くんはどんな展開を見せてくれるのかっ！？』

「OK、期待しな。ひっくり返す！ さらに2体目の《電磁封魔ロッキオ》を召喚！ そしてここで、魅せてやるぜ竜條！」

凌駕が挑発する。

竜條は黙ったままだ……まるで、哀れむかのように。

「手札から《母なる星域》を発動！」

だがその目に気づくものは、誰一人としていなかった。

「星域の効果でバトルゾーンの《幻緑の双月》と、マナゾーンの《超電磁トワイライト》を交換！ そのまま《アストラル・ラッシュ》を進化させ、《トワイライト》降臨だあああー！」

「出た、凌駕の切り札！」

柳の確信は、勝利の確信だ。

「これはいける、いけるよ、凌駕！！」

「《トワイライト》の効果で、バトルゾーンにある2体の《電磁封魔ロッキオ》を手札に。そして手札から、《サイバーX・ザナドゥ》と《パクリオ》をバトルゾーンへ！」

『でたああ、凌駕さんの必殺コンボ！ その効果は　　！』

「《サイバーX・ザナドゥ》の能力で、《竜星バルガイザー》を山札の一番下へ！ そして《パクリオ》の能力！ 竜條の手札から《インフィニティ・ドラゴン》を選んでシールドに封印する！ どうだああ竜條お！」

「く」

「まだまだ！ 《トワイライト》でシールドをW・ブレイク！」

竜條のシールドが2枚に減る。

会場がさらなる熱気を増す！

この凌駕という男は何かが違うのだと、皆が揃って認識した！

《パクリオ》で《インフィニティ・ドラゴン》を封じるのを計算の上で、《海底鬼面城》でひたすらドローさせていたことや、

切り札の《竜星バルガイザー》が出るのを見計らって、あえて《コッコ・ルピア》を除去しなかったことに気づく！

「《インフィニティ・ドラゴン》は制限カード……デッキに1枚しか入れられない。これで、アンタの不死身ドラゴンは崩れたぜ！」

「……………そうか。なら、こうすればいい」

「何？」

「俺のターンで、《シナプス・キューブ》を発動。山札の上4枚の順番を、好きなように入れ替える。」

さらに《チツタ・ペロル》を召喚。味方ドラゴンは全て、タップされていないクリーチャーを攻撃できる……。そして！」

着々と準備を進める竜條。

何を始めるのか、凌駕にも予想がついた。

「我がデッキ2体目の《竜星バルガライザー》召喚！」

『おおおお！ また現れたぞ、《バルガライザー》……！』

さらに、《バルガライザー》はスピードアタッカーを持っている。

「まずは《紅神龍バルガレイザー》で《パクリオ》を攻撃。さらに攻撃時に山札の一番上のドラゴンをバトルゾーンへ！ 出でよ、《インフィニティ・刃隠・ドラゴン》！」

どよめく。

会場は混沌の渦に巻き込まれる！

さつき、凌駕が形勢逆転を決めたばかり。だがそれはまやかしだったのだ。竜條は少しも、自分の展開を阻害されてなどいなかった！

「《シナプス・キューブ》で仕込んでやがったか……」

「妥当な戦術だろう。いくぞ凌駕。《バルガライザー》で《サイバーク・ザナドウ》を攻撃し、相打ち！」

パワー7000同士の戦闘だ。

両方のクリーチャーがバトルゾーンから消える。

「攻撃時に、《バルガライザー》の能力発動。山札の一番上から《

光神龍セブンス』を出し、全てのドラゴンをブロッカーに」

攻めが一流なら、守りも磐石。

「まだ終わらない。《サイバーX・ザナドゥ》がバトルゾーンを離れたことにより、山札の一番下の《竜星バルガイザー》がバトルゾーンに復活する。さらに、最初に相打ちした《バルガイザー》が破壊されたことにより、《インフィニティ・刃隠・ドラゴン》の能力発動。山札の一番上から《アルティメット・ドラゴン》をバトルゾーンに！」

……これは、どこの世界の地獄絵図だろう。

凌駕のバトルゾーンは、《超電磁トワイライト》が1体。

対する竜條のバトルゾーンには、《紅神龍バルガイザー》《竜星バルガイザー》《インフィニティ・刃隠・ドラゴン》《光神龍セブンス》《アルティメット・ドラゴン》、《コッコ・ルピア》が2体と《チッタ・ペロル》。

しかもこのターン、まだ《竜星バルガイザー》と《コッコ・ルピア》2体は、攻撃できる。

凌駕のシールドは3枚。

「……さて。終わりだ、凌駕」

「なあ、竜條。……アンタがさっき言ってたこと、もう一度教えろよ」

「？」

竜條は首をかしげる。

自覚のない失敗を咎められる子供のようだ。

「……ああ、あれのことか。思ったことを言っただけだ。弱者には、



そもそもカードを手取る権利すらない。あの柳とかいう男が、たんに俺の眼鏡にかなわなかっただけだ」

「冷めた目えして、キツイ事いうじゃねーか」

「間違っている自覚が俺にはない。俺は俺を間違っているとは思わない。弱者がたむろしてつまらないゲームを見せびらかすから、デュエルの質は落ちる。奴らの不甲斐ない実力のせい、デュエルという世界が汚されるのだ。だから、俺がこのデュエルの世界を作り変えてやろうと思っただけ」

「作りかえるだあ？ なんだアレか、弱者を排除して、自分がデュエルを統括するみたいな物言いだな」

「……まあ、その通りだな。優勝者たる俺が、デュエルとは本来なものであるかを誇示する。そして弱者を統制することにより、デュエルの世界はより美しく、高度な領域へと変化する」

「……そんなに、弱い奴が嫌いか」

「淘汰されてこそ弱者だ」

これ以上の問答には興味が無い。

そう言いたげに、竜條は攻撃宣言を開始する。

「《竜星バルガイザー》で凌駕のシールドをW・ブレイク！」

凌駕のシールドが1枚まで削られる。しかもまさかの、S・トリガー不発！

「さらに《コッコ・ルピア》で最後のシールドをブレイク！」

凌駕のシールドが0枚になる。S・トリガー、なし。

「凌駕あー！」

「もう、駄目だ……！」

「凌駕さん……！」

チームメイトがわめく。

その声よりも、凌駕は待っている。

竜條の最終攻撃宣言。あのトドメの一息を。

「さらに」

ああ……終わった。

チームメイトが肩を落とす。柳などは涙を浮かべ始める。この竜條に一矢報いきれなかったことが、なによりも、今になって悔しい。

「2体目の《コッコ・ルピア》で、トドメだ！」

『り、竜條くん、ここでチェックメイト』

「《斬隠テンサイ・ジャニット》召喚……！」

1枚のカードが《コッコ・ルピア》を切り伏せた。

「え……？」

会場の歓声も一瞬停止し。

次の瞬間、現実を取り戻して再び湧き上がる！

「さ……最後の、最後で　　！！」

「帽子くん、やってくれるなあ」

「すげえ、奇跡だああー！！」

「ママー、トイレ終わったー」

《斬隠テンサイ・ジャニット》の能力「ニンジャ・ストライク」で、《ココ・ルピア》の攻撃中に召喚された。

そして、能力によって《ルピア》は竜條の手札に戻ったのだ！

「……………弱者が、息を保ったか」

「言っとくぜ。デュエマを好きな奴に、弱い奴はいねえって。俺のターン！」

最後のターン。

「ドローー！」

竜條は言う。弱者はすべて淘汰されるべき存在であり、つまりは不要であると。

「マナチャージをし、《マリン・フラワー》と《電磁王機ピッコリ・コイルンガー》を合計3マナで召喚！」

だが、凌駕はそれに対し、胸を張って言うだろう。

「そして手札から《母なる星域》を発動！　　《マリン・フラワ―》とマナゾーンの《超電磁トワイライト》を交換！」

カードは全てが可能性で、

デュエリストも全員が可能性。

「バトルゾーンに出ている《超電磁トワイライト》にそのまま重ねて《超電磁トワイライト》を召喚！そして能力発動！」

それらは誰もが等しく秘めており、紐解かれていない可能性たちは、これから輝きを増す原石だ。

「バトルゾーンにある《電磁王機ピッコリ・コイルンガー》と、手札の《サイバー・A・アイアンズ》を交換！効果発動、カードを5枚ドロウする！」

全てのものが、全く同じ可能性を秘めている。  
それは凌駕も、柳も、竜條も同じだけの可能性。

「さらに、ドロウしたカードから《母なる紋章》を発動！」

デュエマを好きな者に、弱い者などいない。

なぜなら、強さという名の可能性を、皆、等しく秘めるのがカードゲームなのだから。

「《サイバー・A・アイアンズ》と、マナゾーンの《サイバー・G・ホーガン》を交換！」

……会場が、沸きあがる。

今、目の前で繰り広げられているのは、本当にカードゲームなのだろうか。

普通のカードゲームは、ここまで激しくカードを動かすだろうか。まるで、カードたちそのものが、このデュエルフィールドで暴れたいと欲しているかのよう。

「《サイバー・G・ホーガン》の効果、激流連鎖発動！ 山札の上から2枚をめくるぜ　　よっしゃいけえええ！！ 3体目の《超電磁トワイライト》をバトルゾーンへ！ 《トワイライト》から進化だあ！」

チームメイトは、もはや息をする事も、まばたきをする事も忘れ、そのデュエルに見入る。

凌駕のバトルゾーンで躍動するカードたち。溢れ出る情熱と、凌駕の　心から楽しそうな笑顔。

「トワイライト　の効果で、バトルゾーンの《サイバー・G・ホーガン》と手札の《サイバーX・ザナドウ》を交換！　ザナドウの効果で、竜條の《光神龍セブンス》を山札の一番下へ強制送還！」

「くうっ……！？」

竜條は、自分の置かれている状況が把握できないでいた。

いま、凌駕のバトルゾーンにあるのは《超電磁トワイライト》と《サイバーX・ザナドウ》。

そして、自分の《光神龍セブンス》が除去されたことで、どうなるか……？

「竜條、これでアンタのドラゴンはブロッカーを失った。アンタを守るものはもう残されてないぜ！」

そう。

この時竜條は、自分のシールド2枚を晒すことになったのだ。防御も万全、だったはずが、いつの間にかこのようになったのか。

凌駕は、この最後の瞬間に帽子をかぶり直した。

「いくぜラスト1枚、ラスト1マナ！ 《サイバーX・ザナドウ》を《エンペラー・ティナ》に進化！ これで召喚酔いは消えたああ！」

会場は、このデュエルがここで決着すると理解し、より一層

そのけたたましい調和を激しい音へと変換した。

「《トワイライト》でW・ブレイク！ 《エンペラー・ティナ》で  
トドメだ  
！！！」

「……凌駕」

「うっし！ 約束どおり勝ってやったぜえ」

あのズッコケ3人組は、出会った当初のようなはちゃめちやな雰囲気とは、かなり違っていた。

「凌駕……僕たち、現実を知ったよ」

凌駕は疑問そうな顔をする。

「やっぱり、僕たちなんか名乗り出ていい世界じゃないんだね……デュエルって。今日の勝負を見ていて、つくづくそう思ったよ……」

「柳……」

凌駕は 何か、わずかに表情を向きかえる。  
それは、疑惑が確信に変わったような顔。

「やっぱり、アンタらだったんだな」

「そうだよ……僕たちが、」

正規のメンバーを使わず、他方から引き抜いて結成するチーム。

その噂は、知るところでは知られている与太話だ。

その連中は、カード大会などの会場で、余興デュエルに勤しむプレイヤーの中から強豪と思しき人物に声をかけ、チームに引き込むのだという。

ターゲットとなるのはあまり名の知られていないデュエリスト。

大会に初見で参加する者たちの中から、自分たちの力になってくれそうな人物を選び出し、チームに引き入れてしまう他力本願主義者たち。

「僕たち……本当にデュエルが弱くて」

「最初これを思いついたの、去年あたりなんです」

「あたしが最初に、一緒に組んでくださいってお願いにいったら……その、うまくいっちゃって」

「諦めるのか」

「え……」

凌駕の放った一言。

それが空気をとめた。

「そうじゃないだろ。アンタら、諦めてなんかないはずだ。強くなるのをやめてなんかないはずだぜ」

凌駕はポケットから丸いおもちゃを取り出す。

ヨーヨーだ。よどみなく指に糸を通す。

「コスモビュウのコンボ、すごかったぜ。あんなの、公式大会で決める奴、俺はそんなに見かけない」

ぎゅんっ、とヨーヨーを地面に放り投げる。糸に引かれ、空中で回転を始めた。

「デッキを練ったはずだ。あのデッキを使い込んだはずだぜ、柳。でなきゃ、思い切ったプレイなんてできない」

すぐにヨーヨーを引き上げたかと思うと、今度は軌道をかえ、ループを始める。

ループ・ザ・ループ。高度な技法かつ、ループ技の基本といわれている。

「カードは可能性、デュエリストも可能性だって言っただろ？」

「……ごめん、聴こえてなかった」

「じゃあ今言う。デュエルを好きになった奴には、全員等しく可能性が与えられる」

ループは速度を増し、やがて複雑な軌道を描く別のトリックへ移行する。

「……等しくなんか、あるわけないよ、凌駕」

「なんでそう思う、柳」



ヨーヨーは、もう常人が理解できる動きの範疇を超えていた。

「だって、カードにはやはり、天才がいる。逆に凡才もいるんだ。僕たちはその凡才にカテゴライズされる。だからいつまでたっても強くなれない」

「それは強くなりたいと思ってないからだ」

「じゃあ！ どうやれば強くなれるっていうんだよ」

「野球のコーチはさ、選手のこと1人1人をよく分かっているけど、適切な指導ができない」

次第に、トリックのスピードがゆっくりになる。

「デュエマも同じさ。カード1枚1枚がいったいどんなヤツなのかって事を、自分で分かってやらなきゃ、強いデッキなんか組めるわけがないだろ」

「あ」

「それに、可能性はみんな同じなんだ。アンタの好きなカードがさ……《ルナ・コスモビュー》がさ、アンタ以外の人間が手にしたからって、別の効果に変わったりはしないだろ？」

やがて、ヨーヨートリックの連携は終盤を迎える。

「それが、可能性はみんな同じって言った意味。結局、カードの力を引き出すのはデュエリスト自身。だったら」

ヨーヨーを勢いづけたかと思うと、凌駕は糸から指を抜き、高く空へと放り投げた。

このトリックをロケットという。ヨーヨーは空に吸い込まれるように、夜空に消えるロケットのように、高く高く。

「どうせなら、もっと高く！ カードたちの力を引き出してやりたいじゃねーか！」

ヨーヨーは上昇をやめ、凌駕の元へと落ちていく。  
トリックの通り、最後はそれをポケットの中へしっかりと落とし  
た。

「俺の言いたいことはそれだけ。じゃあな、皆」

「……え？ 凌駕！？」

「後はアンタたち次第だ！。アンタら3人で、全国相手にデュエル  
してみろー、いい経験になると思うぜ」

じゃあなー、と、凌駕がさわやかに締めかけた瞬間

「じほっ！！？」

正面から飛んできた飛び膝蹴りが凌駕の顔面を捉えた。

「よし。見事だ、斧山」

「光栄でございます、お嬢様」

凌駕を蹴り飛ばした黒服の老執事が、紫音と一緒に立っていた。

「し……」

「凌駕……おまえそれはどういうつもり？」

「な、なんだよ……どうかしたか」

「あのチーム抜けて！ 日本制覇の道を自分で閉ざすっていうのか

と訊いている！ 凌駕！」

後ろのほうで、うわーあの巻き毛の子だー、とチームメイトが縮こまっておびえている。

「おまえは、やがて世界を目指すデュエリストになって……あいつと、犬養軌跡いぬかいキセキと共に立つのではないのか！」

「……まあ。そりゃ、そうだけど」

「だったら四の五の言わず、さつさとさっきのチームに戻れ凌駕」

「いや、だって聞いてくれよ！ 俺たつた今、あいつらとさわやかに鮮烈に別れてきたばっかだぜ！？ なのに戻って」

「いいから戻れ！ 貴様のカードの束がこの海でふやけてゴミになるかどうかは、今や私の一存だ！」

「そりゃねーだる紫音！」

「うるさい！ 私はおまえと共に、世界を相手に立ちたいのだ！」

……カー、カー。

鳥がいい感じに鳴いている。もしギャグマンガなら、ここは都合よくアホウドリが登場しただろう。

「……へー。いやあ、まさか紫音から、そんなどストレートなアプローチが来るとは」

「あ……い、違、いや今のは、言葉のアヤだ。そう妄言の類だな」

「まあ紫音にそこまで言われちゃあ」

「さつさと連中のところに戻れ青森凌駕……斧山にもう一発イかせろぞ」

イエスユアマジエステイ、とか言い出さんばりの執事がアップを始めている。

蹴られないうちに、凌駕はすたこらとチームの元へ

「……凌駕。ほんとうに、あんな奴らについていくのか」

「まあな……個人的に、面白い奴らばかりだぜ？」

「早く行け。また　どこかで会おう」

あいよ。

凌駕は小さくそっくり残し、たった2時間を闘いあった仲間の下へと走った。

## V S 団体戦（後書き）

どうも初めまして、赤烏、読みは「せきう」でございます・  
私の趣味、デュエル・マスターズを題材にして文章を書きました。  
デュエリストとして未熟ながらも、カードの効果などには気をつけ  
たつもりです。が……ひよっとしたらどこかミスが……あるかもね！  
でもそれに気づけたあなたは、すでになかなかかつわもののデュエリ  
ストだと思えますよ。

## VS旧友「1」（前書き）

この文章は実在するカードゲーム「デュエル・マスターズ」を主軸に置いた物語です。

なお、この物語はフィクションもいとこの作り話に過ぎません。それゆえ、実在する団体や地名、氏名年齢住所電番、公式大会などとは一切関係どころか縁もゆかりもございません。

## VS旧友「1」

デュエル・マスターズDS デュアル・ソウル

「K県大会はほんの序章。それを理解しているんだろう？ 凌駕」  
「ああ、まあな。この後は関東大会で東日本代表に入り、お次は全国大会で西日本代表メンバーに勝ち、日本代表入りを果たす。んで、やっと世界を相手に構えることができるようになるわけだ」

道のりは長いぜ、と……言葉上ではやれやれといった雰囲気。  
だがそれを語る帽子の少年 あおもりリョウガ 青森凌駕は、内心ちつとも困ったものだとは感じていない。彼にとって全ての障害は楽しむべき遊技だ。それがデュエル・マスターズという競技である限り。  
電話越しにそれを感じ取ったのか、は、とため息をつく巻き毛の少女。男勝りというかプライドの高い口調で、顔を見なければ幼い少年が意地を張っているようにしか聴こえないであろう。

「暢気な男だな」

「急いてはなんとかをなんとかしゃん、って言うだろ」

「もっとちゃんと覚えとけ、意味が分からんぞ」

急いては事を仕損じる。

急ぐな。焦るな。目標があるならば、近道など探さず堅実に歩め。

焦ったところで、おまえの実力が褪せるだけ。

焦っても、褪せるだけだ。

「目標があるんなら、カツカしててもしよーがねえよ。俺は今を少しずつ楽しみたいね」

「ああ、それがおまえの性分だ。そんな事は理解してる。だから今晚、わざわざ電話で忠告してやっているんだ」

時刻は午後10時。星もくつきり見えるほどの澄み切った夜。

自室でヨーヨーのトリック集を読み耽りながら、気がついたら爆睡しており、そこを会話相手の少女　紫音しおんに電話で叩き起こされたのがコトの始まりである。

「いいか、おまえは少なくとも次の大会までに、今のデッキを見直せ。アメリカから、高月たかつきが帰国している」

「へ？……そりやまた、性急な話だこつて」

「真面目に聞け。高月の狙いは、間違いなくおまえと同じ場所だ。おまえの日本代表入りを、この関東大会で瓦解させるつもりだぞ」

「……みんなヒマだねえ。何だつて俺にそう構うんだろうな。人気者はつらいつてホントだったのか」

「さつきも言ったように、K県大会はほんの序章。気を引き締める。さもないと、ただの序章で転ぶことになるぞ、おまえは」

「OK、心配かけて悪かったな」

「……高月なんかには負けたら、私が許さないからな」

そして、受話器の向こうは待機音だけになった。

紫音の電話のシメはいつもこうであり、彼女は何か一言残すという方向的に通話をシャットするのが癖らしい。

「高月か。マジ懐かしー」

中学1年以來。



高月という少年は去年、家庭の事情という名目で日本を去り、アメリカへと旅立った。凌駕とはデュエル仲間であり、先を譲れぬライバルでもあった。

彼がどんな理由で日本を訪れるのであれば、もう一度会えるという事実は、共に競い合った仲間としてはやはり嬉しいのだ。

凌駕はヨーヨーの本を閉じ、ベッドの上に自分のデッキを広げる。デッキとは日々変わるもの。デュエルを繰り返し、新たな欠点を見つける度、磨き上げてより一層完成度を上げていく。

デュエリストと同じだ。カードは使用者と共に、日々研磨されていく。

そして研磨の果てに、完璧などという言葉は存在しない。芸術と同じだ。完璧なものなど無いが故、新たな発見、新たな分野が広がってゆく。無数の星のごとく漂うその輝きは、まるで宇宙のように

……それにしても。

眠っていて気づかなかったが、今日の夜空はほんとうに、星がくつきりと見える空だった。

K県大会から一週間。

晴れてK県を代表するチームになったメンバー、例のズッコケ3人組は、今日も変わらぬ日々を邁進する。

……いや、わずかに異なっているか。

地元の公立校の制服、いわば学ランに身を包んだ3人は、学校帰りに地元のカード・ショップを訪れるのが日課となっている。その店はデュエル・スペースを開設しており、客を集めて無料で貸し出

しているのだ。

正しくは日課ではない。3人はこれを「部活」と称し、共にデュエルに参加してくれる仲間を募ったのだ。その結果、集まったのは4人。かつてのズッコケ3人組は、合計7人もの団員でデュエルに興じるようになっていた。

「《黒騎士ザールフェルドⅠⅠ世》の効果発動！ 《神々の逆流》を唱えたことにより、手札に加わったコスト7の《ロスト・ソウル》をノーコストで発動だ！」

「うわあ、やべっ！」

「続けて《デーモン・ハンド》！ さらに《魔弾オープン・ブレイン》、《魔弾パンダフル・ライフ》、《ディメンション・ゲート》を連続発動！」

3人でも文殊の知恵と云われるのだから、7人が思い思いにデッキを持ち寄った際のバリエーションは際限が無い。K県代表メンバー、特に柳という少年は、この一週間でデッキに磨きをかけた。チームリーダーとして、恥ずかしくないデュエルをするために。

「はい　ちょっといいかなー？」

陽気な声が不吉を届ける。

柳は思わず、デュエルを運ぶ手をとめた。

「な、何ですか？」

知らない学校の服を着て、狐のようにとがった目をした男だ。年上のように見えるが、学生服についている組証を見るに、同じ中学2年であることがわかる。

「K県代表チームの皆さん、まずは大会制覇オメデトー！ぱちぱち」

「はぁ……どうも」

柳は狐につままれたような顔で返す。

見ると、店の奥にもこちらを見つめる少年が立っている。おそらくはこの狐男の仲間だろう。

「まあ、そんなのはどうでもいいよね。ところで大会制覇の諸君、みんなに聞きたいことがあるんだ」

「何ですか？」

「人探し」　ボクたち、青森凌駕を探してるんだけど、所在しらないかな？」

……………。

青森凌駕。

「い、いや……知らない」

「嘘おつしゃい、同じチームメイトでしょ？　学校は違ってても、連絡先くらい教えてもらってるんじゃない？」

狐男は非常に勘の鋭い輩だと、柳は瞬時に感じた。

凌駕がチームの中でひとりだけ違う学校に通っている事や、おそらくは、自分達が少し前まで噂になっていた他力本願の小ずるいチームだとも読まれているだろう。

もちろん、柳は凌駕の連絡先を知っている。

「お前、凌駕の何なんだよ！」

だが目の前の狐男には、それを晒してはいけない気がする。なん

となくだが、柳の人間としての本能がそう告げるとしかいいようがない。

「ボク？ 凌駕クンの友達以上宿敵未満な男の子、彼女はいますん」

言動は奇怪さを増すばかり。

「そうだ、ボクも君もデュエリストだしさ、こういつ分かりやすいのはどお？」

「何だよ……」

「難しいコトない！ ボクがデュエルでキミに勝ったら、凌駕クンの居場所を教えてよー。ね、簡単でしょ」

デュエル・マスターズカードを取り出す狐目の男。狐のイラストが描かれたキャラクタースリーブに填めてある。

「なんで僕がそんなこと……！」

「あれー？ 県大会覇者が、もしかして逃げるとかー？ そんなわけないよね チャンピオンだもん。大ー丈ー夫！」

……実質、彼らをチャンピオンへと導いたのは、当の青森凌駕なのだが。

柳は、途中だったデュエルを中断し、デッキを片付ける。

そしてシャッフル。……どうやらその表情は、意志を決めたようだ。

「分かった、デュエルを受けるよ………けど！ お前が負けたら、凌駕を探すのをやめてもらうー！」

「ひつどいなー、ボクはただの友達以上宿敵未満だって言ってるの

に  
「  
「シールドON!!」」

同時に5枚のシールドを展開する、柳と狐目の男。  
先攻の柳がマナを置いて、そのデュエルは開幕した。

「……左近<sup>サコウ</sup>。戯れなら早めに済ませろ」

ショップの端から見つめていた少年が、いつのまにか狐目の少年  
左近の傍に立っている。

「分かってるよー あ、聖夜<sup>せいや</sup>くんはそっちのこをお願い!」  
「ああ……… あいつか」

聖夜と呼ばれた少年は、もうひとりのK県代表メンバー、鈴井を  
視界に捉える。

「っ………!!」  
「お前達のリーダーが巻き込まれているんだ。団員が付き合わなく  
てどうする? …… 勝敗時の条件は奴が言っていたのと同じ。受け  
るか逃げるか、今決めろ」

聖夜は、一言で表すなら銀色に身を包んだ少年だ。  
ピアスに始まり、首や腕のアクセサリも全て銀。そのどれもが、  
獲物を萎縮させる虎の眼光のように輝き、鈴井を抑圧する。

「……青森凌駕が大事じゃないのか」  
「……。……戦つ、あたしも………!」

鈴井は決意の目を向ける。

「……嘘だろ、あの鈴井が」

「ああ、鈴井が自主的に勝負するなんて……」

驚きをあらわにするのは「部活」のメンバーだ。

鈴井は普段、積極性のないおとなしめな少女でしかない。そんな彼女を動かす何かが、やはり青森凌駕には在るのだろうか。

なんにせよ。

健全なデュエル・スペースで繰り広げるにはあまりにも、混沌とした2つの勝負が始まった。

K県大会以前よりも、デュエルの「目」に磨きが掛かった柳。彼は対戦相手である左近のデッキタイプを、「黒緑・墓地進化速攻」であると一見で見抜くことに成功した。

「僕のターン。《魔光ドラム・トレボール》の効果でコストを1つ減らし、《魔弾パンダフル・ライフ》を発動だ！」

《パンダフル・ライフ》によって山札の上から1枚目をマナゾーンへ。

さらに、この呪文は「ナイト・マジック」によってもう1枚を加速できる。柳は開始数ターンにて、マナゾーンに6枚ものカードを溜めることができたのだ。

そう。

次の柳のターン、早くも《黒騎士ザールフェルドII世》がバトルゾーンに現れることとなる。

「おお、すごいね！ 正直憧れちゃうなあ」

左近のターンを迎える。

マナゾーンにはカードが3枚。バトルゾーンにあるのは《ねじれる者ボーン・スライム》のみ。墓地進化速攻を扱うデッキにしては、少し遅めの初動となった。

「問題ないし！ 2マナで《ダンディ・ナスオ》を召喚！ 山札からマナゾーンへ闇クリーチャーを移動し、マナゾーンから墓地へカードを移動！」

墓地操作、またはマナ操作。

もしくはその両方を狙って使われる《ダンディ・ナスオ》。黒緑を基調とした墓地進化デッキでは重宝するクリーチャーのひとつだ。

「ふふふ、そしてそして……今のプレイングで、タップしたマナを墓地へ送ったからマナがひとつ増えましたー ところで2マナを支払い《鬼面妖蟲ワーム・ゴウルスキー》を召喚、墓地進化！」

そして、召喚酔いの影響なくシールドをブレイク。柳のシールドを4枚に。

「まだまだあ、《ねじれる者ボーン・スライム》でシールドブレイク！ 同時に《ボーン・スライム》は自爆効果で墓地行きさ 新たな墓地進化のタネになるんだよ」

シールドを3枚に減らされる柳 だが。

「S・トリガー《ディメンション・ゲート》！ 山札から《斬隠テ  
ンサイ・ジャニット》を手札に！」

「うひゃあー!?」

左近も感嘆する。

このタイミングで この墓地進化速攻というデッキに対して、  
最も有効なカードのひとつを柳が選択した。

「よし、これで次にお前が攻撃した時、ニンジャ・ストライクでそ  
のクリーチャーを手札に返すことができる。しかも破壊ではなく手  
札返し！ 墓地にタネを残すことはできないぞ！」

凌駕のデュエルから学んだ、ニンジャ・ストライクというギミック。  
ク。

ここでも、柳は明確に成長を示していた。

「やるねえ、柳くん。ね、太一くんって呼んでもいい？」

「しっ……知るか、僕のターン！」

惑わされるな。

相手はふざけた言動でペースを乱そうとしているだけだ。

そう自らに言い聞かせる柳。

事実、彼のデュエルペースは乱れを知らない。柳のターン。マナ  
ゾーンには実に7枚のカード。

このターンで このデュエルは転回点を迎える事になる。

「バトルゾーンの《魔光ドラム・トレボール》を進化！ いくぞ

《黒騎士ザールフェルドII世》を召喚だあー！」



主役、光臨。

わつと沸き立つ仲間達。柳は躊躇いなく、左近のクリーチャーに狙いを定める。

「いけ、ザールフェルドで《鬼面妖蟲ワーム・ゴワルスキー》を攻撃だ！」

「うひゃー、やるね。破壊された時、《ゴワルスキー》の効果発動！ 相手の手札をランダムに1枚選んで捨てさせるのさ！」

これで、先程手札に加えた《斬隠テンサイ・ジャニット》を墓地に落とせば儲けものだ。だが。

運は柳を応援するのか、左近が墓地に落としたのはなんら関係のないカード。

「ありや、ジャニットは外したかー」

「よし！ 今日の僕はツイてる……………このデュエル、勝てるぞ！」

「ザール1匹でいい気にならないーい　ボクのターンで、《カラフル・ダンス》を発動！　これで墓地にクリーチャーを落としまくってあげるよー」

結局左近は、《カラフル・ダンス》でマナを全入れ替えることになった。

墓地に大量のクリーチャーを溜め込む戦術。これは、墓地進化速攻において最もポピュラーともいえる光景。

「さらに、」

さらに言えば、今から何かが起こるタイミングに等しい。

「手札から《死神術士デスマーチ》2体と、《鬼面妖蟲ワーム・ゴ

ワルスキー』を召喚、墓地進化！ 3体の進化獣が出揃ったよ！」

柳はわずかに後ずさる。

柳のシールドは3枚。

対して、左近のバトルゾーンには《ダンディ・ナスオ》《鬼面妖蟲ワーム・ゴワルスキー》に加え《死神術士デスマーチ》2体という、攻撃可能な4体のクリーチャー。

柳の手札にある《テンサイ・ジャンット》を効果で出せば、1体は手札に返すことができる。だがそれでも柳のシールドは0枚まで減らされてしまい、速攻を相手にするには心もとなない枚数となってしまう。

「くっ  
」

だが。

「そして、ボクはターン終了さ 太一クンのターンだよ」

「な……、な？」

ターン終了？

今こそ殴りかかるべきタイミング。

速攻デッキならば、決して見逃すべきでないタイミングだ。

確かに、左近のシールドは5枚と無傷。余裕はあるだろう。だがあくまで速攻デッキとは、デュエルが長引くほどパワー不足が露呈し不利になる。

既に柳のmanaゾーンにはカードが7枚。コントロールと中速を得意とする柳にとっては、これから仕掛ける転回点。

すなわち。速攻デッキにおいて、とつくに攻めきっていないか？ ならない時期だ。

「どしたの〜？ 早くしなよー」

「くっ ぼ、僕のターン！ ドロー」

このターンで、柳のmanaは8枚。

バトルゾーンには《黒騎士ザールフェルドII世》が1体。さっきのターン、相手が攻撃してこなかった……この隙を生かさない手はない。

「《魔光ドラム・トレボール》召喚！ そして《魔弾オープン・ブレイン》！ カードを4枚ドローする！」

柳が行動を開始する。

「そして、《黒騎士ザールフェルドII世》の効果発動！ 手札からコスト4の《カラフル・ダンス》を0manaで発動だ！ これでマナゾーンに《ルナ・コスモビュー》をストック！」

「太一くんもカラダン使うんだ！。ボクたち気が合うんだね〜」

とりあえず聞き流すことにした。

「そして！ 再び0manaで、コスト2の《スパイラル・ゲート》を発動！ 《鬼面妖蟲ワーム・ゴワルスキー》を左近の手札へと強制送還する！」

左近のクリーチャーは2体に減った。

「さらに このターン、呪文を唱えたことにより、手札の《魔光騎聖ブラッディ・シャドウ》をグラビティ・ゼロで召喚！」

……見事といえる。

バトルゾーンには《黒騎士ザールフェルドⅠⅠ世》を筆頭に、《魔光ドラム・トレポール》と《魔光騎聖ブラッディ・シャドウ》という布陣。

マナゾーンにはすでに3枚の《ルナ・コスモビュー》。加えて、先程の《魔弾オープン・ブレイン》によって柳の手札の《斬隠テンサイ・ジャニット》が2枚に増えた。これは左近も知らない事実。意表をつけるに違いない、と柳は防御の万全さに気がほころぶ。

「これで僕のターンは終了だ！ さあ、お前の番だぞ！」  
「ふー。すごいねー太一くん。うん、『なかなかよくやったほうだ』と思うよ」

左近のターン。

不吉な韻を残しながら、マナゾーンに5枚のカードが揃う。  
バトルゾーンには《デスマーチ》が2体と《ナスオ》のみ。このどちらも、柳が手札に潜ませる《斬隠テンサイ・ジャニット》の有効範囲だ。

だが 左近の狐目は、常に、常に、

「さつき手札に戻された《鬼面妖蟲ワーム・ゴウルスキー》を召喚、墓地進化」

笑っている。

「残りの3マナで、手札から《母なる紋章》を発動さ  
「つ、紋章」  
「バトルゾーンの《鬼面妖蟲ワーム・ゴウルスキー》と、マナゾーンの《魔光蟲ヴィルジニア卿》を交換！」

さらに《ヴィルジニア》の効果で、墓地にある進化パラサイトワ

ームをバトルゾーンへ！」

それは、デスマーチ2体を進化元として、取り込んだ。  
これこそが左近の狙い。

このために、左近は進化クリーチャーを多く使う「墓地進化速攻」  
をセレクトしたのだ。

死神の魔龍虫ビヤハ 闇文明

(8) 9000 パラサイトワーム/ドラゴン・ゾンビ

進化V 自分の闇のクリーチャー2体の上に置く。

自分の他のクリーチャーが破壊された時、そのクリーチャーを墓  
地に置くかわりにこのクリーチャーの下に置いてよい。

メテオバーン このクリーチャーが攻撃する時、このクリーチャ  
ーの下にあるカードを4枚選び墓地に置いてよい。そうした場合、  
相手は自身のクリーチャーを4体選んで破壊し、その後、自身の手  
札を4枚選んで捨てる。

W・ブレイカー

「《死神の魔龍虫ビヤハ》へ進化V。《死神術士デスマーチ》2体  
からの進化によって、メテオバーンの弾4枚を補充完了！」

「なッ……!!」

《デスマーチ》を2体飲み込む。メテオバーンの弾を悠長に用意  
することなく、瞬時にチャージする戦法！

死を操る魔の虫。

4を司る龍の虫。

「《ビヤハ》で攻撃、そしてメテオバーン！ 柳クンのクリーチャ

「4体と、手札4枚を墓地へ!!」

……一瞬の恐怖。

柳の3体のクリーチャーは全て消滅し、《斬隠テンサイ・ジャニツト》を含む手札も全て墓地へと叩き落されてしまった!

戦術も何もあつたものではない。

手札も、バトルゾーンも。デュエルに必要な要素を一瞬で、全て剥奪されてしまった!

「くっ……そお」

「W・ブレイク!!」

柳のシールドが1枚へ削られる。

「まだまだ 《ダンディ・ナスオ》で最後のシールドをブレイク!  
! これでシールド0!!」

……手札は3枚に増えた。

だからなんだ。

クリーチャー0、シールド0。

身を守る要素が、ここまで欠落している。しかも墓地進化「速攻」相手にだ。反面、左近のシールドは全開の5枚。

柳の手札に加わつた《神々の逆流》が空しい。

「うおおおお、僕のターン!!」

「え、まだやるの? 諦めなつて 時間の無駄無駄」

「黙れ! 手札から《魔光蟲ウィルジア卿》を召喚! その効果で、墓地にある《黒騎士ザールフェルドIII世》を0マナでバトルゾーンへ!!」

悪あがきを続ける柳を、左近は狐のような目で見つめる。

「最後に、……最後に一矢報いてやる！ 左近のシールドをW・ブレイク！」

「……S・トリガー、《フェアリー・ライフ》で1マナ加速。……ねえ、何やってんの？ 柳くん。デュエル終わったでしょ？」

「……確かに、無駄なことだけど。でもデュエルは途中で投げ出したくない……！」

これが、柳の情熱。

たとえ負けても、負けが決定している場面を見せられても、投げ出すことはしない。

負けるときは正々堂々、前を向いて負ける。そうすれば、心は負けない！

これが、柳の情熱、そして信念である。

「ハア。もう……なんか、ボク萎えちゃった。もういや、ボクの勝ち。これで終わりね」

左近は突然テーブルを離れ、カードも回収せずに聖夜の元へ。タップすらされていないビヤハ。

柳の敗戦シーンだけが残され、このデュエルはあっさりと終了した。

「聖夜くん〜、終わった？」  
「……だいぶ前に」

聖夜は鈴井に勝利するや否や、さっさとカードを回収してしまっていた。

後に柳は、鈴井から聖夜のデッキタイプを耳にするのだが、それに関して彼が最初に述べる感想は、そんなに速く勝てるはずが無い、だ。

決して、高速で勝利することを目的としていないデッキタイプ。だが事実、聖夜は墓地進化速攻を扱う左近よりも速くデュエルを終えた。

速く、確実に。

自分のターンをただ当たり前のように済ませ。  
相手のターンにはただ『何もさせず』。

「改めまして、ボクの名前は九尾左近きゅうびさこんだよ。覚えといってもある程度損はしないんじゃないかな！」

デュエルスペースに奇天烈な声が響く。

「そしてこっちは聖夜くんだねー。K県代表のキミ達、今日はデュエルに付き合ってくれてありがとう！わりとつまんなかったよ！  
アハハ」

左近は、柳の前に立つ。

「ねえ柳くん。キミどうして諦めなかったの？」  
「……僕は、投げ出すことだけはしたくない。それが……」  
「信念ってヤツだから？」



柳は静かにうなずく。  
どんなに絶望的な状況でも。  
すでに負け戦と決まっただけでも。  
ただひたすら自分のデュエルを続けよう。  
デュエルが好きだから。

「柳くんさあ、どうでもいいけどキミ馬鹿じゃない？」  
「は、……………」  
「自分のデュエルがやりたい、負けを途中で投げ出さたくないってのは分かるんだけどね？ あおさ、そういうのってさ、戦ってる相手からすればただ鬱陶しい信念が分かってるのキミ？ ほんと」「どうということだよ！」

柳が激昂する。  
当然だ。

自分の信念を否定されることは、自分のデュエルそのものの否定だ。デュエルを愛するものにとって、許せる行為では断じてない。でも左近はそんなことは知らない。構わない。

「最後まで戦い続けたい。ああ分かってるよそんなの。けどさ、それはまだ勝利に希望がある奴が言うことであって、もう誰がどう見ても負けちゃってる敗戦者が声高に言うことじゃないじゃん？  
戦局的にはとつくに勝ってる。けど負けたにもかかわらず、相手はまだ見苦しく手札見ながら何か唸ってる。コレさ、勝者からすればかなり鬱陶いよ？ 四方八方を鬼に囲まれて逃げ場0なのに、ひたすらタイムかけまくる小学生くらい鬱陶いね」

「ッ……………」  
「悔しい？ 悔しかったら強くなりなよ。そうだ、今日はこれを言いに来るのが目的でもあったんだっただよね」

これ？

柳は一瞬、言葉の真意が分からなかった。

「柳くん。今すぐ凌駕クンとのチームを解体してほしい」

キミ達は青森凌駕を縛り付けている。

本来なら個人戦で優勝してK県代表になるべきだった彼が、なんの因果か、キミ達と出会ってしまい、団体戦選手としてエントリースることになってしまった。

そう、彼の道を狂わせたのはキミ達なんだ。

彼は本来、ボク達と一緒に日本代表の座をめぐって競い合うべき個人要塞なんだ。

それが見知らぬ誰かと手を組んで、拳句の果てに、チームメイトはこんな弱小メンバー？

何それ。凌駕くんがかわいそうじゃないむしろ？

K県大会だけなら何とかなかっただろうけど、この先色々あったりして、キミ達に足を引っ張られることも多々あるだろうね。

けどキミ達はそれを何とかできる？ できないでしょ。

キミ達はチームという理由で、凌駕クンを縛り付けていただけ。たとえ本心はそうでなかつても、結果として束縛するだけ。

ねえ、それならもうチームなんて解体しちゃってよ。

そのほうが凌駕くんにとってプラスになる。

さつさと身を引いてよ、何まだ未練があるのかな一時でも彼みたいなデュエリストと時を共有できただけでも光栄に思っべきなのにこれだからまったく

「おい、黙れ左近」

「あ」

携帯電話を耳に当てた、青森凌駕がそこにいた。息を切らせ。

左手には既にデッキが握られている。両目には炎が宿っている。

「あれえ？ ひっさしぶりー！ そして、どーしてここが分かったの凌駕くん？」

狐目の男が喋る。その細目には微塵も笑顔など含まれていない。凌駕は質問には答えず、左近すらも通り過ぎ、

「田所、サンキュな」

「リーダーがボロカス言われてるのに、動かない仲間いないっしょ」

意外にも、田所に礼を告げる。

田所の手には携帯電話。

「俺の知り合いっばい、ヤバそうな連中が来てるって聞いたからよー…… やっぱりアンタか、左近。変わってねーな」  
「なんだよう。久々に再開したんだから、皆でばーっと遊ぼ」

左近はきゃあきゃあとはしゃぎ出す。

誰が気づこう。……この時の表情が、今日この場で、本心から溢れた唯一の笑顔だと。

「……アンタも久しぶりだな」

「リョウガ……」

感情の希薄な聖夜の目に、初めての感情が宿る。それは、友との再会による望郷の念。

「けど、生憎俺は左近みたいに歡喜狂乱してる余裕あ無え。……おい、『高月聖夜』。アンタは何の目的があつて、左近と一緒に居るんだよ？」

「……何も、無い。ただリョウガ、お前が僕達の元に帰ってくる事を望んでの行動だ」

聖夜の瞳は微塵も濁らない。

……彼は純粹な少年だ。

クールながらも、常に心からの言葉を口にする。ゆえに、その瞳や言動には一点の汚濁も混入しない。

それが、逆に恐怖を招く。

「俺はアンタらみたいに、強い奴を特別扱いしたがるような集団には加わるつもりねーよ」

「もう、相変わらず頑固だなあ凌駕クン 戻ってきなよ、キミが戦いたくなるような、強いデュエリストが目白押し！ 少なくともそこでへこんでるチームメイトちゃん達とは比べ物にならない」

「左近！！」

「……怒らないでよ。あ、そーだ！ ねえ聞いてよ凌駕クン、さっきボクら、ここで賭けデュエルをやってたんだ」

だからどうした。

と、凌駕が眼光だけでそれを伝える。

「だからさー、今からデュエルで決めようよ！ ボクが勝ったら凌駕クン、キミはボクらの元へ戻ってくる。どお？」

……。

凌駕は奥歯を噛む。

ここには左近と高月聖夜の2人がいる。

という事は、どうせ左近に勝ったところで、もう一度同じような条件をつきつけてくるであろう聖夜とも勝負しなければならぬ。つまりは。

この2人相手に2連続で勝つ自信はない、というのが凌駕の本心である。

「ふん。2人揃っているのか、丁度いい」

……とても傲慢な声が聞こえた。

それは全員の耳に、澄んだ鈴のような音となって届く。男勝りというかプライドの高い口調で、顔を見なければ若い少年が意地を張っているようにしか聴こえないであろう。

かつ、と床を踏みしめる足音。腕を組み、自信に満ちた瞳が左近を睨みつける。

「いい機会だ。私がおまえを撃破してやろう、左近」

「あらら〜…… 何でいるのさ、紫音ちゃん」

少女は、凌駕と左近の間に割って立つ。

「紫音……!!」

「チームメイトを侮辱されて意趣返しに燃えているところ悪いが、この狐の首は私が貰う。凌駕、おまえは 高月とケリをつける」

指名されてか。

高月の足が動く。

まっすぐと凌駕の元へ。かつての友の元へ。

「……………リヨウガ」

「久々に会って早々悪りいけど、もう一度聞く。アンタも左近と同じか？ 聖夜！」

「リヨウガ。お前はこんな所で燻るべきじゃない。僕と共に、戻ろう」

あくまで優しく。

聖夜の声はどこまでも優しい。

なぜなら、聖夜はいま、友人と会話をしているのだから。

「ああそうかよ、なら迷わねえ！ もう迷ってやらねえ！ アンタが勝ったら俺は何でも言うことに従ってやる。だから俺が勝ったらよ、もう俺達に構うんじゃないよ！」

「リヨウガ……………お前は、愚かな奴だ」

「紫音ちゃんも、条件は同じでいいかな？」

「ああ。私が負けたら、文句無く凌駕をおまえたちに引き渡す」

「それだけじゃないよ、どうせだから紫音ちゃんも、ボクらにいついてきてもらおう！ で、また昔みたいに皆でデュエルを楽しもう。イエー！」

「いいだろう。だから、おまえが負けたら二度と凌駕と関わるな！」

> i10498 | 1477 <

t o b e c o n t i n u e d .

## VS旧友「1」(後書き)

とりあえず、次回で2つの勝負は決着します。

## VS旧友「2」(前書き)

この文章は実在するカードゲーム「デュエル・マスターズ」を主軸に置いた物語です。

なお、この物語はフィクションもいとこの作り話に過ぎません。それゆえ、実在する団体や地名、氏名年齢住所電番、公式大会などとは一切関係どころか縁もゆかりもございません。



## VS旧友「2」

「……その狐ヅラを、また拝むことになるとはな」

「明るつくいかなきやダメだよ紫音ちゃん、そんなしかめっ面じやデュエマは楽しめないよ？」

けらけらと道化のような振る舞いをする狐男、左近。

彼らが対峙するのは何度目になるだろう。少なくとも、過去に交えあつてきた戦跡は数多に上る。

だが幾度となく、“左近は紫音に負けてきた”。そんな彼がこのように余裕を持ち、強者たる紫音を刺激している。

彼の強みは、いったい何処までが本領なのか一切掴めないところにあるといえよう。

「狐。これが条件付の勝負……何かを賭けてそれを奪い合う試合である以上、私は全力でおまえを潰しにかかる。下手な道化ごっこはやめにしておけ」

「怖い怖しい。それK県個人代表たる者の視線？ 強者の視線つてヤツ？ 調子に乗ってんじゃないの？」

「違うな。これから負ける事になる、敗者への勧告だ！」

/

「凌駕。おまえは、デュエマを楽しんでいるか」

「おまえらよりはな」。おまえがもし、デュエマを楽しむ俺を見

て未練を思い出すんなら、今すぐ左近とは離れるべきだぜ、聖夜。  
おまえは真面目すぎるから、あいつらの放つ至極に尤まっとうもな理屈を受  
け入れちまうんだ」

「……僕は理屈で、奴らに着いている訳じゃない」

眼鏡を正し、自分のデッキを確認する高月聖夜。

これは彼の癖だ。デュエルの前に自分のデッキの中身の確認、枚  
数の確認。彼がこれを欠かしたことは一度とて無く、彼が凌駕と分  
かれてからも変わっていないことを思い出させる。

……変わってないな、おまえ。と。

口に出しかけて、とどめる。

「おまえは変わったぜ聖夜。おまえは滅多に笑わない奴で、感情に  
も乏しい奴だ。けど、おまえとデュエルをする時はいつも、俺は楽  
しかった。デュエルが始まる前から、おまえとのデュエルはワクワク  
クさせられた！……けどよ、何故かよ……今から、楽しいことが  
起こるなんて予感がしねえんだ、聖夜」

「……おそらくは、おまえの描く予感がそうさせるのだろう」

デッキの確認を完了。

即座に、テーブルには山札と5枚のシールドが並んだ。

「……故に。この勝負、僕が勝とう」

「だったら、俺の仕掛けるトリックを破って見せる！」

「ボクのターン、《ダンディ・ナスオ》を召喚し、山札から《死神の魔龍虫ビヤハ》を墓地に置くよ。」

デュエル開始早々、左近は布石を打ってきた。

黒緑墓地進化“速攻”？ 否、彼の戦術は中速、もしくはコントロールに近い。

左近は確かに墓地進化クリチャーを用いるが、その目的の大半はバトルゾーンコントロール、いわば制圧にある。

安全に《魔光蟲ヴィルジニア卿》を出すため、そして相手のクリチャーを足止めさせるため。

「私のターンで《リーフストーム・トラップ》を発動。おまえの《ダンディ・ナスオ》をマナゾーンに送る。」

「わお！ デッキがバランスよく回転してるねえ紫音ちゃん」  
「黙れ」

彼女も同様といえる。

このデュエルを観劇する柳や田所、鈴井には、このふたりのデッキの色……文明が“同じ”であることが早々に予想できたのだ。

マナブーストのための自然。切り札の布石である闇。

そしておそらくは。

どの段階でか、かならず「水」を出してくる事も。

「《エナジー・ライト》！」

「《エナジー・ライト》！」

そして、何ターンか後、ふたりが同じタイミングで手札を補充した。

いくらかのターンのやりとりで、観劇者が理解できたように。

当事者ふたりもまた理解していた。

いや。この決闘者たちは、もう最初のターンから、ある1つの事柄しか頭にないか。

「動かないのか？ おまえのデッキに入っている《デスマーチ》は、ただ立つだけの木偶だったのか」

「分かつてるくせにー　これは布石なんだよ、フ・セ・キ」

相手を己が戦術にて喰らい尽くせ。

ふたりの頭には最初からそれしかない。文明が同じ、戦術が同類、これらの事実を決闘者2名に告げたとして、その2名ともに「だからどうした」と足蹴にされるのがオチなのだ。

「呆けているなら　私が動かしてやろう」

左近のクリーチャー《鬼面妖蟲ワーム・ゴウルスキー》2体、加えて《死神術士デスマーチ》1体は、どれも全くと言っていいほど動かない。

紫音も理解している。

柳のデュエルを見てはいなくとも　左近の墓地、そしてバトルゾーン。これらの光景を一見すれば何のつもりかなど手に取れる。ならば、速く勝つが道理！

「《幻槍の双月》進化！　《大勇者「ふたつ牙」<sup>デュアル・ファンゲ</sup>》を召喚し2マナ加速だ！！」

6マナにしてパワー8000の巨大クリーチャー「デュアル・ファンゲ」。

紫音は即座にこれを攻撃させる。左近をW・ブレイカーで貫くため！

「いけ、《「ふたつ牙」》で攻撃！」

「甘甘ああ！ 手札から《威牙忍ヤミカゼ・ドラグーン》をニンジヤ・ストライクで召喚！ ブロッカーである《死神術士デスマーチ》をスレイヤーにし、デュアル・ファングの攻撃をブロックする！  
！」

まさかのノーコストによるスレイヤー・ブロッカー！

強力な殴り手であるデュアル・ファングを、わずか1ターンで失った紫音。

「ならば《鎧亜の深淵パラドックス》でシールドをW・ブレイク！」

ブロッカーを持たない《ゴワルスキー》のみのバトルゾーンを駆け抜け、豪快に左近のシールドを2枚奪った紫音。

先手は紫音である。

……前述したが、紫音はいつも左近に勝利してきた。

理由は簡単だ。紫音はしっかりと強固に構築されたデュエルをする。徹頭徹尾において計算されたデュエルをやりこなす彼女の姿は、想像に難くない。

比べ、左近のデュエルは流れに任せすぎている。クリーチャーを出し、相手を除去し、なるようになれと勝負を展開させるのが左近の癖、いわゆるデュエルの方針である。

だが、左近は月日を越え、その流れを自発的に手にする事のできる実力というものを手に入れていた。

左近のシールドは、5枚のうち2枚をブレイクされ残り3枚。

ブレイクされたシールドを手札に加える。

ぼつりと、2文字だけ呟く。

「きた」

水・自然というスタイルは凌駕が昔から愛用する戦術なのだろう。彼にとって最も長く付き合いがあり、最も磨いてきた戦術であり。彼と関わってきた者にとってみれば、それほど読みやすいものはない。凌駕が初手に《海底鬼面城》を張ることすら、聖夜は想定の内。

「僕のターン。《ローズ・キャッスル》を要塞化する」

聖夜は光・闇・自然のデッキに対抗策を投入している。

凌駕の、パワー1000以下のクリーチャーを封印しにかかってきたのだ。

「これにより《クラゲン》が破壊される。……殴り手を失ったな、凌駕」

「はっ、俺には《パラダイス・アロマ》が1匹いればなんとかなるんだよ。俺のターンのドロで……こいつが手札に加わるしな！」

凌駕はドローカードを聖夜に見せる。

見るまでもなく分かっているが、それは《超電磁トワイライト》だった。

何も難しい仕掛けではない。《クラゲン》の能力で山札の中の《トワイライト》をデッキトップへ移動していただけのこと。

確かに、この《トワイライト》が凌駕のデッキの軸であることは変わりがない。だが……、

「それが、おまえの言う『トリック』なのか？」

「ああ。けどまだまだ序の口も序の口、ヨーヨーで言やあまだロングスリーパーで遊んでるあたりだぜ。俺のターンで《マリン・フラワー》と《アストラル・リーフ》を召喚、進化速攻！」

《フラワー》を召喚した凌駕は、そのまま《フラワー》の上に《アストラル・リーフ》を重ねる。

これを進化速攻といい、クリーチャーの召喚酔いを進化によって打ち消すテクニクだ。

凌駕は《アストラル・リーフ》の攻撃でシールドを狙う。ターゲットは当然、

「《ローズ・キャッスル》を崩落させてやるぜ、聖夜！」

「……承知した」

聖夜は《ローズ・キャッスル》を墓地へ置く。

シールドを3枚に削られる聖夜。

そんな彼は、まだ《ローズ・キャッスル》《フェアリー・ライフ》《しか、カードを出してはいない。》

「……凌駕、圧してるな」

柳が呟く。

「……つづん、圧してなんかないよ、柳くん」

「……？」

反論の声。

「な、……………なんでそんな事言っただ、鈴井」  
「圧してない……………遅いくらいなの」

未知に満ちすぎている、聖夜の手の内。

「僕のターン。《無限の精霊リーサ》召喚」  
「なッ……………！」

この瞬間、……………凌駕の攻勢が止まった。  
絶望。

という、二文字があるのだが。  
それは誰に当てはまるのか？ と問われれば、間違いなくその  
帽子の少年だと、誰もが解答するだろう。

「凌駕……………まさかとは思いが。おまえのトリックとやらは、こ  
こで終わりとは言わないな」

……………例えるならば、糸が切れたと言えるだろうか。  
ヨーヨーと指を連結させ、動きをヨーヨーに伝える役割を持つ、  
糸。

それがあるからトリックは成功するのであり、それが切れてしま  
えば、……………それはヨーヨーではなく、ただの丸いおもちゃなのだ。

「おまえのクリーチャー、手札。それがすべて、糸を切られたただ  
の紙切れとは言わないな」

「ちッ……………俺のターン、《マリン・フラワー》と《クウリヤン》を  
召喚！！ 聖夜、おまえだってプロッカード出しただけで気取ってん  
じゃねえぜ！ 俺の攻勢をッ、全部止められると思ったら大間違い



だ

「……事実、止めているのは僕だ」

そう。水・自然は展開力にものをいわせるデッキ。

豊潤なる手札、豊潤なるマナを基盤として、小型のクリーチャーを大量展開し数で押し切る。

だが。だが。そのクリーチャーが”攻撃すら許されない”となつては？

《無限の精霊リーサ》はパワー4500の『無限ブロッカー』。つまり1ターンの内、何度でもブロックすることができる。いわば死ぬまで。

パワー4500以下のクリーチャーを殴り手として使うデッキに対しては、まさに必殺ともいえる脅威。

そして凌駕は、その必殺される側の人間である。ならば、

「僕のターン。《神令の精霊ウルテミス》召喚。そして《ダイヤモンド・ゲート》を発動する」

解答は簡単。凌駕というデュエリストは、指をくわえて負けるのを待つのみ。

「手札に………《聖霊王エルレヴァイン》を加える」

「な………あつ、」

まさに”召喚させたら終わり”。そんなカードが今、聖夜の手札に加わり。そして次のターン、確実に出現するところまで迫っている。

「俺のターン!!! 《海底鬼面城》の効果で追加ドロ、そして手札入れ替え発動!

《テンペスト・ベビー》、《ワンダリング・スフィア》を召喚！

「……《エルレヴァイン》はクリーチャーのコストを、4、重くする。それを逃れたいと大量展開するのはいいが、“息切れしているぞ”、凌駕」

「うるせえ、おまえのターンだろ。早くしやがれ！」

語尾を強め、凌駕はターン終了を叫ぶ。

そして移る、聖夜のターン。

《エルレヴァイン》は宣言どおり、《神令の精霊ウルテミス》を進化元に、光臨するだろう。

……このような幕切れがあるだろうか。デュエリストたちが目を疑う。

次のターン。凌駕は手札からなんとか《マリン・フラワー》を召喚するだろう。

そして次のターンに、なんとか《ワンダリング・スフィア》を。

だが次のターンは。いや、それ以降デュエルが終了を迎えるまで。

それ以降、凌駕はクリーチャーを……1度たりとも……召喚する事は無かった。

/

「紫音ちゃん、展開ご苦労様」  
「……む」

紫音のバトルゾーンには、《ブラッディ・イヤリング》と《鎧亜の深淵パラドックス》。ビートダウンをしていくにはもう最適といえるほどにバランスのいい陣形である。

対し、左近のバトルゾーンには《鬼面妖蟲ワーム・ゴワルスキー》が2体。パワーが若干低いだけの墓地進化クリーチャーなのだが、先ほどの柳との一戦を目にしていたものなら、この光景がどれだけ恐ろしいか想像に難くは無い。

それを踏まえると、紫音のバトルゾーンが手薄に見えるだろう。

パワー6000のW・ブレイカーと、パワー4000のブロッカーだけ、である。

もう“揃っている”というのに。

「ケド、もう少し頑張ってもよかったかな？ 例えば手札破壊とか手札破壊とか手札破壊とか手札破壊とか」

要するに、シールド2枚を削られた身でありながら、左近は余裕ぶってこう言うのだ。

さつさと“手札を捨てさせていればよかったね”と。

「意味わかんない？ 意味わかんなくてももう遅いよね 《魔光蟲ヴェルジニア郷》召喚！！」

左近は計画が運ぶ詐欺師のような目で紫音を一瞥した後、即座に墓地からクリーチャーを引っ張り出す。

これは完全なる予定調和。そして、予定調和を許した時点で紫音が窮地に追いやられるのは、

「進化V！！ 《死神の魔龍虫ビヤハ》をバトルゾーンへええつつひいやっはあああ！！ ビヤハあああー！！」

必須！

ビヤハの出現によって紫音のカードが飛び散る、砕け散る！

「そして攻撃、メテオバーン発動！ 紫音ちゃんのクリーチャーを全破壊！！ 紫音ちゃんの手札を全破壊いい！！ きゃつはああこの瞬間が一番イイよね

いけえ勢いをなくすなビヤハ、シールドをW・ブレイカーああああ！！」

そしてシールドまでもが舞い散る！

なんとしてもシールド・トリガーを引き当て反撃に応じたいところだが、愛顧むなくトリガーは不発。

「天にも見放されてそーだね紫音ちゃん。反撃はきついんじゃない？  
い？」

……………けれど、さほどトリガーを気にするところではない。

彼女は紫音なのだから。

「凌駕ほどではないが……………私も、トリックというやつは嫌いではないな」

「んー何言って……………ん？ 紫音ちゃん、いつのまにそんな手札……………あつ、」

紫音の手札は、割られたシールド分の2枚。

ただではなく……………いま紫音は6枚ものカードを握っている。

「《ビヤハ》を呼んで得するのは、おまえだけじゃなかったな。《鎧亜の深淵パラドックス》の効果は、破壊された時の4枚の手札補

充」

「へえ！ まあ大丈夫か！ どうせ紫音ちゃん、今から反撃しようにも間に合わないでしょ。」

「私のターン。《幻槍の双月》を召喚し  
《大勇者「ふたつ牙」》へ進化！！ 2マナ加速だ！」

これは……さすがと言うべきか。

ビヤハによつてすべてを蹴散らされた焼け野原から、一気にパワー8000VSPパワー9000の大型クリチャー同士の戦いへと持ち込んだ！

「そして、《「ふたつ牙」》で左近のシールドを割らせてもらう！  
W・ブレイカー！！！」

左近のシールドが2枚消える。

左近は残りシールドを1枚まで追い詰められ、後がない。が

「だが天は我に味方せり、つてね S・トリガー《サイバー・ブレイン》発動！ カードを3枚引かせてもらうよ！」

「……………ふん。天がおまえに振り向くなら、天の首をへし折つて私に跪かせるまでだ」

「言つてれば？ 《鬼面妖蟲ワーム・ゴワルスキー》召喚！  
そして《死神の魔龍虫ビヤハ》で攻撃、《大勇者「ふたつ牙」》を破壊！！！」

……………まだまだ。まだまだ。

紫音ちゃんには地獄を見てもらってから、しっかりボクらの仲間に戻ってきてもらおうか。

「僕のターン。《神令の精霊ウルテミス》から進化、 《聖霊王エルレヴァイン》を召喚する。

シールド・フォース発動。《エルレヴァイン》がバトルゾーンにある限り……………凌駕、おまえの召喚するクリーチャーのコストは4、重くなる」

予定調和。

戦術は成った。

聖夜のデュエルは、聖霊王と呼ばれる進化エンジェル・コマンドによる早期ロックを指す、というものだ。

そして、4コストの重圧は非常に重い。

「おまえなら、分かるだろう。凌駕」

凌駕は手札を見る。

エルレヴァインの能力は、手札にあるクリーチャーのコストの数字すべてに、4が足されるようなものだ。

たとえば。《マリン・フラワー》ならば、5マナを支払ってたかがパワー2000のブロッカーを出すに等しい。

その損失は大きすぎる。

しかも相手には《無限の精霊リーサ》があり、召喚できない以前に“攻撃すら許されない”。

「とはいえ、《リーサ》はパワー4500程度のブロッカーにすぎ

ない。凌駕、おまえの《超電磁トワイライト》ならば優に潰せるクリーチャーだろう。……召喚できるのなら、の話だが」「んな事はわかってんだよ……」

だが。どうやって6マナの進化クリーチャーを出せというのか。今や《トワイライト》の召喚コストは、膨れ上がって10マナだ。

それをどうしろというのか  
6マナしかない凌駕に？

「俺は5マナで《マリン・フラワー》を召喚するぜ」

凌駕のクリーチャーは5体。

そう、手数では凌駕は聖夜を凌ぐ。

だが非力。どれも《無限の精霊リーサ》が阻む。

そして、《聖霊王エルレヴァイン》が召喚を阻む。

「僕のターンだ。……なるほど。凌駕、おまえはこう考えているな……《超電磁トワイライト》を、《母なる星域》によって出せば、戦闘に持ち込めると」  
「……………」

そう。

それは道理にかなった攻略法だ。

コストを使う「召喚」は封じられた。だがコストを支払わずに「バトルゾーンに出す」事はまだ、封じられてはいない……！

「凌駕。おまえはそこに光明を見出そうとしている」

「さあね。その予言があてずっぽじゃねえって祈るぜ」

「《新星の精霊アルシア》召喚、墓地にある《ディメンジョン・ゲ

「ト」を手札に回収。……しばらく待て。待っているだけで、おまえはこのデュエルを終わらせることができる」

「うるせーな。俺はデュエルを楽しませてもらうぜ……？俺のターン、2枚目の《海底鬼面城》を張り、6マナで《ワンダリング・スファイア》召喚」

「負ける気がないのなら………覇気を取り戻せ、凌駕！！」

常に冷静な聖夜が叩きつける、あまりにも無情な叱咤。

いや、この叱咤は友としての友情から生じたものだ。

だが、こんな八方塞がりな状況を作り出し、凌駕を追い詰めるのもまた、彼。そんな聖夜が送る叱咤激励は、はつきりいつて無情でしかない……。

「いくぞ凌駕。《アルシア》より進化！さらなる聖霊王！《聖霊王エルフェウス》を召喚ッッ！！」

2体目の聖霊王の光臨！

聖夜のクリーチャーはこれで3体。《聖霊王エルレヴァイン》《聖霊王エルフェウス》《無限の精霊リーサ》という、どうにもならない3つの巨頭！

「エルフェウスの能力により、おまえのクリーチャーはすべてタップされた状態でバトルゾーンに出される。わかるか、凌駕、この状況が！！」

凌駕のクリーチャーは5体。

だが、それ以上のクリーチャーを出そうとも、コストが4上乗りする。それだけでなく、エルフェウスによってタップされ、次のターンには聖霊王の攻撃によって破壊される。

これがどういうことか！



すなわち凌駕は何をバトルゾーンに出すことも許されず、誰を攻撃することもできないということ！

「……凌駕。僕のデュエルを見てきた君なら、次のターンに僕が出すカードが分かるはずだ」

異様な雰囲気宣言をし、聖夜は自ら、手札の2枚を明かす。

「《無敵城 シルヴァー・グローリー》……………僕のクリーチャーはすべてのバトルに勝利する。同時に、僕の勝利も約束されるわけだ」

聖夜のクリーチャーは、リーサに加え2体の聖霊王。

凌駕のクリーチャーは5体。そのどれもが取るに足らないちっぽけな者たち。凌駕の手札で眠っている《サイバー・G・ホーガン》は、もうこのデュエルでは目覚めの時は迎えないだろう。

このデュエルを見ている柳は、ようやく鈴井の言葉の意味に気づく。

「早く勝てるわけがない」。

いや、早く勝てる。これなら。

相手が何もできない以上、このデュエルには“相手のターンがないようなものだ”。

「……………」

凌駕は顔を伏せ、カードを引く。

凌駕のターン。

「……………ドローカードは《斬隠オロチ》か」

「自分で自分のドローカードを宣告するとは。凌駕、負けを認める

態度にしても、もっと上等なものがあるだろう

「さて。聖夜、“トリックは完成したぜ”」  
「……………。……………何？」

凌駕の表情が切り替わる。

「《「ふたつ牙」》を失った紫音に、戦えるクリーチャーはもういない。

「くそう！」

「唸ったって変わらないのがデュエルだよ　さあ紫音ちゃんのターン！」

「分かっている！！　《ブラッディ・イヤリング》、そして《邪眼皇ロマノフI世》を召喚！！　《ロマノフ》によって、山札の中の闇のカードを1枚墓地へ落とすことができる！」

「…………おっと、予想外のクリーチャーを出してきたね。いや、紫音ちゃんは『ドラゴン・ゾンビ』使いだっただけ」

闇文明の誇るナイト・クリーチャー、《ロマノフ》。

その力は、攻撃時に墓地にある闇の呪文を唱えられるというもの。勝負は次のターンである。

「いや、次のターンとか言ってる時点で遅いから　《死神竜凰ドルゲドス》を墓地進化で召喚。そして、まさかまさかの《魔光蟲ヴ

イルジニア卿《召喚ーん！！》

「……………」

「そう！ 紫音ちゃんの想像通りの事態になるよ！！ 出てこい出てこい、2体目の《死神の魔龍虫ビヤハ》、ビヤツハハハアアアアアアアア！！」

左近の宣言どおり、まさかまさかの事態と呼ぶべき状況。

反撃の手筈を整えた紫音は、次の瞬間、いったいどういうルートで足を踏み外したか……地獄に落ちたようなものだ。

その地獄には、2体の《ビヤハ》がおり……暢気に「次のターン」を待つデュエリストを、速攻で食い殺す！

「《パラドックス》で増えた手札も、もうイミないねええ！ いけ《ビヤハ》、攻撃&メテオバーン！！ 紫音ちゃんの《ブラッディ・イヤリング》と《ロマノフ》を破壊、そして手札を全破壊ッ！！ まあたすっからかんに戻る紫音ちゃん！ そこへ打ち込め、W・ブレイカー！！！！」

紫音は、残りシールド1枚まで追い込まれる。

「S・トリガー《デーモン・ハンド》！ 2匹目のビヤハを破壊する！ さらに《サイバー・ブレイン》でカードを3枚ドロー！」  
「お、急にツキが回ってきたかな？ でもまだ、それじゃ遅いよ！」

そう、《ビヤハ》はまだ1体健在している。

しかも、もう一方の《ビヤハ》を墓地に送ったことは結局何の解決にもなっていない。左近のデッキによれば、《ビヤハ》は墓地から出してこそそのクリーチャーなのだから。

「……………さあ。手札なし……………いや、手札4枚でクリーチャー0の紫音ちゃん。そろそろデュエルの終わりも近くない？」

「……………ハ。シールド1枚のおまえが言っな」

「紫音ちゃんもシールド1枚だけだね！ 仲間だ仲間だ かけっぶち仲間！」

「……………その口を閉じろ」

紫音は手札を切る。

マナがタップされる。

「《黒神龍ギランド》召喚。……………死ね左近。《母なる星域》発動！」

母なる星域。バトルゾーンと、マナゾーンにある進化クリーチャーを入れ替える呪文。凌駕も切り札として扱う強力カードだ。

『ドラゴン・ゾンビ』使いたる紫音の本領を、いま左近は目の当たりにする事となる。

「紫音ちゃん、《ギランド》と交換しても進化元がない」

いや。

「“マナ進化GV”……！ マナゾーンにある闇のクリーチャーを3体重ね、その上に置いてバトルゾーンに出す！ 《超神星DEATH・ドラゲリオン》をバトルゾーンへ……！」

「デッ……………デスドラあああ！？ ……………」

《超神星DEATH・ドラゲリオン》。マナ進化GVによりバトルゾーンに君臨するフェニックスノドラゴン・ゾンビ。

その能力は、ビヤハも得意とする「メテオバーン」。

「左近。息の根を保つことを諦める。

《DEATH・ドラゲリオン》で攻撃！　そしてメテオバーン！  
！　バトルゾーンにあるすべてのクリーチャーのパワーを9000  
下げるッ！！！」

全クリーチャーに対する、パワーマイナス9000補正。

そして、パワーが0になるクリーチャーは破壊される。

そして？

左近の操るクリーチャー、ビヤハのパワーは9000だ。

「《死神の魔龍虫ビヤハ》破壊！！　そしてW・ブレイカーを叩き  
込む！　左近のシールドを2枚弾き飛ばし、これで0枚だッ！！」  
「そっ……それが何だったの！　S・トリガー《ファントム・バイ  
ツ》！！　このパワーマイナス2000補正を、紫音ちゃんの《D  
EATH・ドラゲリオン》に撃つ！」

紫音につきつけられる。あまりにもピンポイントなS・トリガー！

「分かるよね！　《超神星DEATH・ドラゲリオン》のメテオバ  
ーンは“自分自身のパワーまで9000下げてしまう”！　これで  
《DEATH・ドラゲリオン》のパワーは2000になり、そこへ  
マイナス2000を撃ち込むことで、《DEATH・ドラゲリオン  
》のパワーも0になり、」

破壊ッッ！！

「残念、また紫音ちゃんのクリーチャーは0に」

「舐めるな、左近ツ！ 私は『ドラゴン・ゾンビ』使いだ！ 墓地より効果発動！！ メテオバーンで墓地に置いた分も合わせて、4体ツ、《黒神龍グールジエネレイド》を一気にバトルゾーンへ！！」

死竜使いは、ここへきてパワー6000のクリーチャーを4体出現させる。

すべてがパワー6000、すべてが強靱なるドラゴンのカード。  
4体の死竜は今度こそ左近を喰らい尽くすか！？

「死なないなあああ！！ ボクのターンで《死神術士デスマーチ》を2体召喚し、《インフェルノ・サイン》を発動！！ 墓地から《魔光蟲ヴィルジニア卿》を復活！ また復活！ 何度でも何度でも復活させてやるよ！！」

《ヴィルジニア》の効果発動！！ 《デスマーチ》2体を進化元に、《死神の魔龍虫ビヤハ》をバトルゾーンへ出す！！ これで何度目か忘れたけどさ！ 何度目かの正直！ メテオバーンを発動するツツ！！」

4体くらいでは足りない 死神の魔龍虫は、ここへきてまでも少女のしもべを消し去っていく！

「《黒神龍グールジエネレイド》をすべて抹殺ツ！！ 紫音ちゃん  
のシールドもこれでゼロ！！ さあ、勝負は次のターンで決まるよ  
だツ！！ 私のターンで《魔光蟲ヴィルジニア卿》を召喚！！」

このデュエルで幾度と無く出現する《ヴィルジニア》。  
あと何度その姿を見ることになるだろう いや、これ

が“最後”だ。これが最後の《ヴィルジニア》。騎士蟲が、最後にデュエリストたちの白黒を分つ。

「《ヴィルジニア》の効果発動！ 左近、《ロマノフ》で墓地に落としたカードを覚えているか！！」

「なっ、何を」

「墓地進化GVツ！！ 3体の進化元を墓地から選び、《大邪眼<sup>ヒギニング</sup>B・ロマノフ》をバトルゾーンへ！！」

シールド0枚の相手に対し、墓地から現れる巨大クリーチャー《大邪眼B・ロマノフ》。

互いにシールド0、次のターンで勝負が決まるという局面で紫音が打った、最後の手。

それは進化速攻。進化クリーチャーは召喚酔いすることなく、即座に攻撃を行うことができる！

「ちょちょちょ、ちょっと待ってくれない紫音ちゃん、ちょっとボク腹痛と頭痛が併発」

「丁度いい、負けたらさっさと薬局行け！！ 《B・ロマノフ》でトドメだ  
！！」

/

「……トリックが完成した？」

「ああ」

2体の聖霊王、そして1体の無限ブロッカーに阻まれ、行動にロツクをかけられてしまった凌駕。

「このロツクを、覆すのか」

「それがトリツクって奴さ。へへ、まあ見てな？」

張り詰めた表情を、凌駕はわずかに崩し、笑う。

……少し、場を俯瞰してみよう。

確かに、凌駕の行動はロツクされている。

5体ものクリーチャーをバトルゾーンに有していながら、攻撃すら許されない。

たった3体のクリーチャーでここまでの抑止を果たしてしまう聖夜は、確かに高度なプレイヤーなのだろう。

だが。

だが？

凌駕のクリーチャーは確かに動きを止められている。だが客観的に考えると、聖夜は、“5体もの敵クリーチャーを野放しにする”ようには見えないだろうか。

さらに言おう。

行動にロツクをかけている上に、聖夜にはまだ奥の手がある。

それはつまりこのロツクがまだ“完璧でなく”、しかもその“完璧でない内からわずか3体のクリーチャーを置いただけで安心しきっている”。

……。

これを俯瞰の視点という。

しかも、聖夜はシールドを1枚ブレイクされてしまっている。

この状況をもう一度俯瞰しよう。

観客になった気で、このデュエルを俯瞰しよう。



「ここで、観客のひとりには『いま、ピンチなのは青森凌駕なんだよ』と告げるとしよう。」

そうすれば、その観客はごく自然な、当たり前前の返答をよこすだろう。

「どこがピンチなの?」と。

「俺のターン」

凌駕はカードを引く。聖夜はいつ気づいただろうか。《海底鬼面城》で引くべき2枚目のカードを、凌駕がワザと引いていなかった事に。

「呪文、《母なる星域》!」

出た。凌駕の策のひとつとして疑われてきた、マナゾーンからのコスト踏み倒しが実行される。

そう。マナゾーンから出すのなら《エレヴァイン》によるコスト負担は行われず、バトルゾーンに出す事ができる。

「いくぜ、さあさあいこうか俺の真骨頂! バトルゾーンの《マリオン・フラワー》と、マナゾーンにある《超電磁トワイライト》を交換! 《アストラル・リーフ》から進化だぜ!」

「来た! 凌駕の切り札!」

歓声を上げるのは柳。

だが鈴井が否定的な声を上げる。

「だめ、タップされる

!」

「《聖霊王エルフェウス》の効果発動。《超電磁トワイライト》はタップされてバトルゾーンに出され、このターン攻撃はできない」「知ってるぜ。俺が狙うのは最初から、《トワイライト》の効果なんだよ。効果発動！バトルゾーンにある3体の『サイバー』クリーチャーを手札へ！そして手札の『サイバー』クリーチャー3体と交換！」

「何を出そうが無駄だ、すべて《エルフェウス》がタップする！」「やってみやがれ」！3体のクリーチャーをバトルゾーンへ！《クラゲン》！《斬隠オロチ》！そして出て来い《サイバー》・G・ホーガン》！！！」

ついにそろい踏みする、凌駕の切り札クラスクリーチャー。召喚できない、という状況から、ここまでのクリーチャー操作を披露した！

「無駄だ。すべてタップされる！」

「ああ、タップは了解してるぜ聖夜！けどな」

聖夜はそこで初めて気づく。

凌駕が……ロックによって追い詰められ、憔悴していた凌駕が……笑っているのだ。今、とても楽しそうに。

「タップ状態のまま、能力だけは使えるんだよ！この3体が勝負を分ける！！いくぜ、まずは《斬隠オロチ》の効果発動！！！」

……あの顔を、聖夜は見たことがある。

そう、あれはもつと昔か。恐らく、ふたりがデュエマというものを始める前の頃だったかもしれない。

凌駕はある時になると決まって、とても華やかで楽しげな笑顔を

見せるのだ。

それは、そう。確か、練習していたヨーヨーの“トリックが決まる”、そんな瞬間……。今の凌駕の笑顔が、とてもそれによく似ている。

「オロチの効果で、今バトルゾーンに出した《超電磁トワイライト》を山札の一番下へ送還。そして次に、山札の上からクリーチャーが出るまでめくり、それをバトルゾーンに出す事ができる！」

「……擬似、《転生プログラム》か……！」

「ただの『転プロ』じゃないぜ。クリーチャー以外が出た場合、墓地に置かれずに山札の一番下に戻せるんだからな。いくぜ、山札の上からクリーチャーが出るまでめくり　　まずは《クウリヤン》をバトルゾーンへ！」

わざわざ出したばかりの《超電磁トワイライト》を山札に沈め、出てきたのはたかが《クウリヤン》。

しかも、こうやって出されたクリーチャーたちはすべて、タップされているのだ。今、凌駕の間ではタップされたクリーチャーが右往左往しているにすぎない。

攻撃もできず、一体何をするつもりなのか。

「まだだ。《クウリヤン》1匹出して終わりじゃないぜ」

「……？」

「まだ残ってたんだよ、《クラゲン》の効果発動！　山札の中から進化クリーチャーを探し、山札の一番上に置く！　もちろん、さっき山札の一番下に置いた《超電磁トワイライト》を山札の一番上に置くぜ……！」

次のターンも《トワイライト》を召喚する気か……？

「ま・っ・た・く・違う！」　「今から出すのさ」！　最後に《サイバー・G・ホーガン》の効果、激流連鎖を発動！　山札の上から2枚を見て、コストが8より小さいクリーチャーを好きな数バトルゾーンに出す事ができる。それがたとえ進化クリーチャーでもな！！」  
「……………ッ、なるほどな」  
「つうわけで、さつきオロチの効果でバトルゾーンに出した《クウリヤン》から進化し、《超電磁トワイライト》をバトルゾーンへ！　まだ終わらないぜ、激流連鎖は2枚見れるんだからな！　もう1枚は《マリリン・フラワー》だ。こいつもバトルゾーンへ！」

凌駕のバトルゾーンを見てみよう。

《超電磁トワイライト》。《クラゲン》。《斬隠オロチ》。《サイバー・G・ホーガン》。そして《マリリン・フラワー》。

分かるように、《トワイライト》の効果を使う前よりも1体、クリーチャーが増えている。

これが、凌駕の言うトリックか。  
だが。

「だが増えたその1体も《マリリン・フラワー》とはな……………しかも、やはりタップされてバトルゾーンに出る。ブロッカーとしてすら使えない」

「いや、まだ終わりじゃないさ」

「……………すべてのクリーチャーの効果処理は、終わったはずだ」

「終わってないぜ、聖夜。だって今、《超電磁トワイライト》をバトルゾーンに出したじゃねえか」

「……………。」

表情と、空気が、強張る。

緩んでいるのは凌駕の表情だけだ。

それ以外はまるで岩のような、重苦しい空気だけ。嫌な予感がす

る。“凌駕だけが喜び、他は誰も歓喜しえない”何かが起こる予感がする。

「いくぜ、再開だ。《超電磁トワイライト》の効果発動！！《トワイライト》を除く、4体のクリーチャーをすべて手札に戻すぜ！そして手札にある4体のクリーチャーと交換！」

「まさか

」

「そうさ、《クラゲン》《斬隠オロチ》《サイバー・G・ホーガン》、そして《コーライル》をバトルゾーンへ！」

凌駕は《トワイライト》を使い、《クラゲン》《斬隠オロチ》《サイバー・G・ホーガン》の3体を“手札に戻してそのまま出し直した”のだ。そして、《マリン・フラワー》と手札の《コーライル》を交換した。

「まずは《コーライル》の効果を発動する。うざってえ《聖霊王エルフェウス》を山札の一番上に強制送還してやるぜ！これでタップ能力を使うことはできない！！」

「しまった、バウンスだと……！！」

「水の得意芸だ、忘れたとは言わせねえ。そして！さっきのアレを繰り返してやるうじゃねえか！」

《斬隠オロチ》の効果発動！《超電磁トワイライト》を山札の一番下に置き、山札の上からクリーチャーが出るまでめくる。…よし、《クウリヤン》をバトルゾーンへ出す！《オロチ》が終わった次は《クラゲン》だ！山札の一番下に沈めた《超電磁トワイライト》を山札の一番上に……！！」

ここまでくると

この先を予想できない者はいなかった。

いや、ここまでの光景も、そしてこの凌駕という男が今から何をしようとしているのかも。

「お待ちかねだぜ、《サイバー・G・ホーガン》の効果発動！！  
山札の上から2枚をめくる『激流連鎖』だ！ これによって《トワイライト》を、バトルゾーンにあるさっき出した《クウリヤン》の上に重ねて進化！！ さらに激流連鎖によるもう1匹は《ワンダリング・スフィア》！！ こいつもバトルゾーンに！」  
「凌駕、おまえ……」

いま、凌駕のクリーチャーは《トワイライト》、《クラゲン》、《オロチ》、《ホーガン》。そして《コーライル》、《ワンダリング・スフィア》。

……そう。徐々に増えている。

「まだまだあ！！ いま《超電磁トワイライト》をバトルゾーンに出したことにより、効果発動！ 《トワイライト》以外の5体のクリーチャーを手札に戻す！ そしてまた《クラゲン》《斬隠オロチ》《サイバー・G・ホーガン》、それとさっきの《コーライル》《ワンダリング・スフィア》をバトルゾーンへ！！ 《コーライル》の効果で、聖夜の《聖霊王エルレヴァイン》を山札の一番上へ強制送還ッ！！

《斬隠オロチ》の効果で《トワイライト》を山札の一番下に戻り、山札の上から 《エンペラー・マルコ》をバトルゾーンに！ 《ワンダリング・スフィア》から進化だぜ！

続いて《クラゲン》の効果発動、山札の一番下にあった《超電磁トワイライト》を山札の一番上へ！

そしてその《トワイライト》を、《サイバー・G・ホーガン》の激流連鎖でバトルゾーンへ！！ 《コーライル》から進化！ おまけに激流連鎖でもう1匹をバトルゾーンへ！！ これですべて無限の精霊リーサを山札の一番上に強制送還！！

そしてまた最初に戻る。《超電磁トワイライト》の効果発動！

「！」

……これは、『無限ループ』だ。  
ひとつの動きを繰り返して行われる現象。それを無限ループという。

まず、《超電磁トワイライト》で《クラゲン》《斬隠オロチ》  
《サイバー・G・ホーガン》をバトルゾーンに。

《オロチ》の効果で、《トワイライト》はデッキに戻り、かわりにクリーチャーが1体出てくる。

そして《クラゲン》で山札の中の《トワイライト》を、山札の一番上に置く。

そしてその《トワイライト》を、《ホーガン》の激流連鎖で出す。その進化元は、“オロチの効果で出したクリーチャー”だ。

そして《トワイライト》が出たことで、この流れは最初に戻る。《トワイライト》の効果で《クラゲン》《斬隠オロチ》《サイバー・G・ホーガン》を手札に戻し、また《クラゲン》《斬隠オロチ》《サイバー・G・ホーガン》をそのままバトルゾーンに出せばループが始まる。

つまり。

ずっと終わらない。

「しかも、終わらないだけじゃねえぜ？ 激流連鎖で、クリーチャーを1体追加で呼べるんだ。つまりコンボを繰り返すたびに、バトルゾーンにクリーチャーが1体増えるのさ」

「じゃあ、激流連鎖で《トワイライト》しか出せない時は……どうするんだ」

「そのときは普通に、《オロチ》で出したクリーチャーを重ねて進化。《トワイライト》の効果発動で、もっかいやり直し！ そうすりゃ、激流連鎖でクリーチャーが出せるまで、やり直せるだろ？」

「ッ……、そうか……その通りだ。……待て、凌駕。じゃあ、このループが終わるのは、」  
「ああ。“俺のデッキの中のクリーチャーが、全部出るまで終わらないのさ”。……いや、全部出し切ったって、《クラゲン》《斬隠オロチ》《サイバー・G・ホーガン》を使ったループだけは終わらない。しかもさ、これは無意味じゃないんだぜ？ このループで、《コーライル》を出し入れし続けたらどうなるか……」

そう。無限にループが行われるということは、無限回、クリーチャーの効果が使えるということ。

《コーライル》は、バトルゾーンに出た時、相手のクリーチャー1体を山札の一番上に強制送還する能力を持っている。

それを無限回放つということは、つまり。

相手のクリーチャーが何体いようが、それらをすべて山札の一番上に戻してしまえるッ！！

「さあっ、コンボの仕組みも分かったところで続行だ！ しばらくは俺のクリーチャーたちを見物してもらおうことになるぜえ聖夜あああ！！ いくぜ、《クラゲン》《斬隠オロチ》《サイバー・G・ホーガン》をバトルゾーンへ！！」

タップされていたクリーチャーを手札に戻し、また出すことにより、アンタップ状態に戻すことができる。

エルフェウスがいらない今、凌駕のクリーチャーの動きを止めるものは何もない。

何もいない、聖夜の場。

聖霊王、及び精霊は山札に眠る。

そして……



3体にまで増えた《超電磁トワイライト》を筆頭として、その横に並ぶ《クラゲン》《斬隠オロチ》《サイバー・G・ホーガン》。《コーライル》もいれば《エンペラー・マルコ》が2体、その他、様々なクリーチャーが揃っている。

凌駕の場には、本当に、デッキの中のクリーチャーがすべて揃っているのだ。

出されていないクリーチャーといえば、シールドの中に埋まっている何体かだろう。

「《トワイライト》で出したクリーチャーも、《ホーガン》の激流連鎖で出したクリーチャーも、召喚酔いはしちまう。けど進化クリーチャーだけは、このターンに攻撃ができる」

「……………。凌駕。これは……………僕の負けだろうな」

聖夜は、眼を閉じる。

それは己の敗北を悟る儀式であると同時に

「……………おい、聖夜」

目の前の勝負に、なんの興味も示さないという儀式でもある。

聖夜の中での勝負は終わった。彼はなすすべがなく、シールドをすべて破られ敗北するだろう。

「勝手にやめてんじゃねーよ。最後まで付き合え」

「その必要はない。デュエルは終わった。……………約束どおり、僕はこの町を去り。そして、おまえには会わない事にしよう」

「だから待てっつーの。まだお前にはシールドが4枚もあるだろ。

S・トリガーが出るとか考えないのか」

「《デーモン・ハンド》、《スパー・スパーク》。S・トリガー

は確かに投入している。だが今出たところで勝ち目などない。足止めにはかならず、ターンを無為に消費するだけだ。これは誰がどう見ても、凌駕、おまえの勝ちだ。誰がどう見ても、どのように俯瞰しても、この事実が変わらない」

「まだ決着がついてねえって事実も変わらねえだろ……！ それにな、何もかも俯瞰の視点が正しいってわけじゃないぜ。デュエリストが諦めない限りデュエルに終わりはない。諦めた奴の負けなんだ」  
「……僕の負けだ。僕は負けるから諦める。このデュエルは僕の負け」

「デュエルの話なんかしてねえッ。諦めた奴はよう、そこまで追い詰めた相手にだって、追い詰められた自分にだって勝ってねえ！！分かるか、追い詰められて負けに瀕してる自分をよ、それでも奮い立たせることができれば、少なくともそれは自分を乗り越えたってことだ！

「ただど追い詰められてる自分が諦めかけてて、それをそのまま受け入れちゃったら、そうやって諦めようとしてる自分とすら戦ってねえんだよ！！ おまえは自分を奮い立たせられなかった！ 諦める自分とは戦わずに逃げた！

「そんなおまえは、何にも勝ってねえ！！ 相手にだって負けたし、自分との勝負は避けやがったッ！ 勝負の場に立ってるのに、いったい誰と戦ってたっていうんだおまえはよおおお、聖夜あああ！！！」

「……気づいた時には、涙。」

「聖夜のものではない。」

友人に檄を飛ばしながら。友人を責めながら、凌駕の頬を伝う、涙。

おまえは、本当に変わったんだな。聖夜。

「そんな奴だったかよ……？ 聖夜……。おまえを変えたのは、」

何』だ？」

「……………僕は、何も……………変わってはいない。凌駕、僕は僕だ。僕は高月聖夜……………」

「……………。ますます、おまえらの事が気に食わねえよ……………。左近も、おまえも」

「変わってなどいない。燻っていた思いを、開かされただけ」

「『誰に』だ」

「『あの人に』だ」

そうかよ。

その一言だけ言い残し、凌駕は聖夜のシールドをすべて叩き割る。容赦ないW・ブレイカーが3度炸裂し、シールドが舞い散る。

《スパー・スパーク》が発動するも、……………既に、聖夜は自分のターンを放棄している。

手札に加えられた《無限の精霊リーサ》も、もうバトルゾーンには出されない。

そして、凌駕は、

無防備となった友人へ、かつての友人へ、トドメの一撃を叩き込む……………。

「……………勝ったようだな」

「ああ、絶好調だったぜ」

からかうような笑顔を向ける凌駕。

それを向けられた紫音は、とりあえず凌駕を殴る。

「……つてえ」

「ふにゃふにゃと笑うな、気持ち悪い。……、痛くなかった……？」  
「律儀にどーも。聖夜のことは、もういいんだぜ」

……そうか。

風に溶ける、気のない返答をする紫音。

執事の斧山が到着するまではまだ時間があるというので、せっかくだからジューズでも飲もうと、二人は自販機横のベンチに腰掛ける。

海沿いの公園が近い。

海が、近い。

そういえば、店に来たのは放課後、夕方も盛りの時だ。

空が赤いのはそのせいか。

店から去っていく友人たちが、妙に感傷的に見えてしまうのはそのせいなのか。

「……それはおまえが感傷に浸っているから、そう見えるんだ」

「……ま、すぎたことはしゃーないか。俺は後も適当にデュエルして過ごすよ。聖夜たちのところには、戻らねえ」

「連中がおまえの所へ手を伸ばしてくるのは、意外と速いかもしれないぞ」

「なんでそんな事わかるんだよ、紫音。大丈夫だって、のんびりしてても俺はどうせ団体戦なんだし」

「だから何だ。……調べたんだが。大会ルールによるとな。団体戦を棄権すれば、県代表の権利を失う。よって、他の県大会に挑戦して個人代表になることは一応、可能なんだぞ」

「ん？ だからどうしたって」

「分からないのか。団体戦で全国出場が決定されているおまえを、

全国大会団体戦を早期に棄権させることで、個人戦の登録枠に回すことだつてできるんだ。つまり……団体戦での出場決定なんていう隠れ蓑も、さつぱり役には立たないということだ」

「……………俺を、棄権させにくるつてののか？ だけど、それに何の意味が」

「凌駕。おまえが敵対しているのは、強き者を崇め、弱き者を貶める、そういう体制の成立を目標としている組合だろう？ 全国大会や世界大会でおまえがその実力を示し、そしてそのおまえが、連中の組合に属していると知らしめる。そうすれば、その組合の地位は上がる。」

格好の宣伝材料というわけだ。同じ組合に知り合いがいるのだから、実に組しやすいと踏んだんだろうな、連中は」

「お、俺に宣伝要素があんのは分かった。けどよ、なんで仕掛けてくるのが早いなんていえるんだ。今日だつて、あいつら二人が気紛れに尋ねてきただけだろ？」

「……………。K県大会の日、私は個人決勝までのぼった」

「そーだったな」

「その決勝の相手は、あいつだ。高月聖夜だよ」

……………。

聖夜が、俺のいた大会に？

「あいつは個人戦に登録していた。そして、斧山に調べさせたんだが……高月聖夜が帰国、正しくはアメリカを発つたのがその大会の前日だ。大会の前日にアメリカを出て、翌日に日本のホテルからK県大会会場まで行ったというんだ、凌駕」

「そ……………そりゃ、どういう……………」

「アメリカにいた高月聖夜に、日本にいるおまえの行動が判るはずがない。おまえを見張っている高月聖夜の関係者の誰かが、日本から高月聖夜に報告したに決まっているだろう！ あいつの帰国の目

的は、徹頭徹尾おまえを組合に引き戻すためだ!!」

「……………なんだそりゃ。本気でめんどくせえ問題じゃねーか……………」  
「……………ああ、おまえ風に言えばめんどくさい問題だよ。だからデューエルには用心し、」

「いや、大丈夫なんじゃねーの？ 基本、負けなきゃいいわけだし。つーか全国大会で俺の強さを見せたいんならよ、なんで俺を倒しに掛かる必要があるんだろーな？ そこらへんわかんないっつーか……………」

「いいから用心をしろというんだ、この馬鹿！ おまえが負けて、おまえが何処かへ行ってしまっ、なんて私はイヤだ！」

「……………はあ？ なんで？」

「ん……………だから、ええと……………」

「あのなあ紫音。俺は本当に負ける気ないし、おまえを置いてだっ  
て行かねえよ。それでいいじゃねーか、な？ へへ」

「すっ。」

「……………や、だから痛え。なんで殴る……………」  
「ふにやふにや笑っなって言っただろっ……………。ふん……………」

## VS旧友「2」（後書き）

というわけで、今回の主役はなんと紫音ちゃんなのでした。個人的には左近がお気に入りだー！ 狐ー！

そんなこんな。読了ありがとうございます。

今回は旧友との出会いと、いいかげん『敵』の形をはっきりさせないとなー、という回でした。

なので団体戦メンバーは、ごめんなさい空気ですね。

組合、という言葉が出てきましたね。ちょっと調べたのですが、組合という言葉は民法上の言葉で、なんかよく分からない感じでした。なので組合は、深く考えずただの俗称としてお受け取りください。では、また次回で。

## 閑話（前書き）

今回はデュエルはお休みです。

この文章は実在するカードゲーム「デュエル・マスターズ」を主軸に置いた物語です。

なお、この物語はフィクションもいいとこの作り話に過ぎません。それゆえ、実在する団体や地名、氏名年齢住所電番、公式大会などとは一切関係どころか縁もゆかりもございません。



## 閑話

デュエル・マスターズDS デュアル・ソウル

『こんばんは』

「……………」

夜の港。

風が生ぬるく体を撫でる。遠くには船の汽笛。

『あの春の県大会からちょっと経過、もう夏がくるねえ。どう？  
調子のほうは』

「……………俺はアンタに、電番教えた記憶はねエ」

『僕、友達沢山いるから。尋ねればホイこの通りさ。デュエマやってる？ ご無沙汰かなあ？ 竜條くん』

竜條の電話の相手は、人を小馬鹿にした、それでいてどこか抜けた口調で話しかける。

普通なら、この不審者相手にまともな会話はせず、すぐに通話を切るか携帯を壁に叩きつけるところだ。

だが竜條は、この口調に聞き覚えがある。

「俺は組合なんぞにかかわる気分じゃないんで……………アンタ、もうかけてくんないな」

『冷たつ。何それ？ 県大会じゃあんなに燃えてたじゃん。弱者淘汰の夢に向かって、全速 前進だ！ みたいな？ あははは』

「切る」

『 ねえ、凌駕の行き先しらない？ 』

「青森凌駕なんぞ俺は興味ない。アンタ」

『 興味ない？ まっさかあ。自分を負かした相手は場外だろうが何だろつが、とりあえず再戦で叩き潰すのが君のいいところじゃないか。勝者への願望、勝利への欲望はどこいったの？ 』

竜條は、無言で返す。

……彼は、K県大会の団体部門、決勝戦で青森凌駕と戦った。

逆転につぐ逆転劇を繰り広げた、まさに互角の勝負だった。

その日から、彼の中で何かが変化した。

……自分が敗北した。それは、自分が相手よりも弱かったのだという事。

もちろん、今までならば再びデュエルを申し込み、叩き潰して鬱憤を晴らしていた。そうする事で、やはり自分は強者であると認識できていたのだ。

だが、何かが 何かが変容した。

「みつともねえデッキでみつともねえ戦術しやがるカスも気に入らないが、みつともねえ理由で勝つ事ばっか考えるってのも、また中々につまんねえ。

俺は組合に興味が失せた。誰なりと代役を呼べばいいだろ。……

もう話す事はない」

『 うん、まあいいけど、口頭でこんなやりとりしたってどうせ僕から電話はかかってくるんだよ？ それって意味ないよね。やっぱりこういう形式的な事はさあ、ちゃんと紙の上でやらないと』

「アンタなあ……」

『 というわけで、最後に、僕の要望に応えるくらいの仕事はしていつてくれないかな？ それで十分なトレードだ。君が抜けるぶんの組合の損失を、僕の依頼で補うんだ』

「アンタ、自分が何言ってるのか、分かっているのか。そもそも

アンタは、組合の【敵対側】だろうが。犬養いぬかい」

……電話の向こうが無言になる。

再び夜の風がうるさくなる。音のない場所は、こんなにも空気が騒ぐ。

『そうだね。僕は【敵対者】だ。でも、だからこそだ。だからこそ、君たち「組合」がどこまで遊べるのか、見ておきたい』

「……」  
『僕は楽観主義なんだ。エンジョイスト。現状がどう変化しようとか、誰が誰を狙おうと、それをどれだけ僕は楽しめるだろう？ それだけ。それだけが僕の生涯の、至上命題なのさ。分かりやすいだろう？ 竜條くん？』

「……俺が組合にそむく事が、なぜアンタの損になるのかが分からない」

『当然の疑問だと思うよ。だから、当然の答えを返してあげる。』

凌駕は僕の観察物なんだよ、竜條くん。凌駕という一個人のデュエリストが、僕にとってはひとつの見世物、グランギニョールなの分かる？ 僕は彼がいてくれるだけで嬉しい。彼がデュエマをするだけで楽しい。そして僕は、そんな彼とデュエマをする。とっても楽しいデュエマをね』

とてつもなく、意味が分からない。

だが、この人物はその意味不明な内容を　　いたくまじめに語っているのである。

『だから、組合に対立してみちゃう。僕が組合に入っちゃうと、凌

駕が「あーじゃあ、犬養がいるならいいか」って心変わりしちゃう  
かもしれない。それは駄目じゃん？ 凌駕が組合に入れば、誰が凌  
駕を苦しめるのさ？」

「アンタ、ぶっ壊れてやがる……！」

『あははは駄目だなあ、竜條くん。もっと早く気づけよオ、竜條く  
ん！ じゃあねっ。本題についてはまた後日』

> i15204 — 1477 <

## VS 東日本代表戦（前書き）

この文章は実在するカードゲーム「デュエル・マスターズ」を主軸に置いた物語です。

なお、この物語はフィクションもいとこの作り話に過ぎません。それゆえ、実在する団体や地名、氏名年齢住所電番、公式大会などとは一切関係どころか縁もゆかりもございません。

## V S 東日本代表戦

某月某日。天気は快晴。青森凌駕は今日も晴れ男である。

場所はY県の体育館。

あるのは人ごみばかり。

夏も間近の頃、Y県市民会館を貸しきって行われるのは、デュエル・マスターズ東日本代表決定戦。

これまで各県の代表者1名、加えて代表チーム1組を選抜してきた大会から、今度は東日本・西日本という括りで代表を争奪しあう大会へとシフトされる。

つまりデュエリストは、県代表を勝ち取り、東または西日本代表を勝ち取り、最後に東西両雄の試合によって日本代表を勝ち取るのだ。

「へー、これが東日本大会か」

選抜されたのは個人戦代表が1名と、チーム戦代表が3人1組。単純に考えて、各県から4人が選出されている。24県もあるのだから、この会場には96人がひしめき合っている計算になる。

それに加えて観客・フリーデュエリストなども押し寄せてきているのだから、その数は計り知れない。これでも日本大会の足元にも及ばないが。

「りよ、凌駕ってやっぱりヘン。なんでこんな場所で、そんなのんびりしてられるワケ？ 慣れてるの？」

「柳い、深呼吸しときな。おまえ眼がどっか泳いでるぞ。完璧に雰囲気飲まれてるぜ」

「しっ、深呼吸だね。分かった、すー……、はぼぼぼぼ……」

「なに今の！？ おおい、大丈夫か柳」

彼ら青森凌駕、柳太一、鈴井水子の3名は、K県代表としてこの会場に招かれる事を許された精鋭だ。周囲の選手の意気込みに圧倒されてうっかり漫才をやらかしていようと、精鋭は精鋭なのだ。

「リーダー、一発きめちゃってくださいよ」

「も、もちろんだよ田所。凌駕のかわりに抜けたお前のためにも、僕のこの新デッキで……あっ」

ばっらばらばらばらー。

紙束がただの紙くずになった。

「うわわわわー！ だっ、拾っ、凌駕拾ってー！」

「何やってんだ馬鹿！ おい、ちよ待っ、踏むな！」

面白いほどバラ撒けるカード。

そんなビビってて大丈夫か？ 大丈夫なわけがない、問題だらけだ。

「集まった……ちゃんと40枚あるかな」

「だいじょうぶ？」

「ありがと、鈴井さん。……あれ、凌駕知らない？」

「え？」

「あー、あっちすよ」

田所が指差した先には、フリースペースでさっそく一戦おっぴぼじめている帽子男の姿。……帽子男とか書いたけど、ヘドリアンではなく凌駕のことです。

「またかよ、あいつ大会前にフリーデュエルするの恒例なのかな？」  
とりあえず柳たちが凌駕のテーブルへと駆けつける。そこにはいつもどおり、いきいきとカードを振り回す青森凌駕がいる。

水のカードを躍動させ、たまに闇や自然を挟む縦横無尽のプレイング。

対戦相手を勤める眼鏡の少年は、残念ながらもう淘汰される寸前だった。

「ならっ……《土隠雲の超人》召喚！ 山札から《威牙の幻ハンゾウ》《斬隠蒼頭龍バイケン》《光牙忍ハヤブサマル》のいずれかを手札に加える」

ウンカイ・ジャイアントは召喚時、山札から好きなシノビを3体選び、そのいずれか1体を「相手に見せず」手札に入れる事が可能なクリーチャー。

つまり、シノビをサーチしつつ牽制を行うカードだ。

「……あの眼鏡の人、シノビデツキなんだなあ」

「《ハンゾウ》と《バイケン》匂わせたら、ハンデスしたくても出れないっすよね、リーダー」

「そうだね。《ロスト・ソウル》を撃つのすら躊躇わせる、結構慣れたプレイング」

しかし。凌駕のターン。

「だったら《凶刻の刃狼ガル・ヴォルフ》で、おまえの手札から『シノビ』を捨てさせる！」

このクリーチャーの優れた点としては、「捨てない」事を選ぶ



点だ。つまり、バイケンのマッドネスを回避することができる。

凌駕の闇のクリーチャー「ガル・ヴォルフ」が、眼鏡の少年の《威牙の幻ハンゾウ》を叩き落とした。

「やっぱり《ハンゾウ》だよなあ、俺には《バイケン》のハッターなんて効かねえぜ！」

「く、くっそう……！」

「《恵みの大地ババン・バン・バン》でトドメだ！　じゃあなシノビ！」

最後は華麗にフィニッシュ。凌駕は十数ものマナを有効に使い尽くし、瞬く間に対戦相手を蹴散らした。

「……凌駕はもっと容赦ないね」

「っすね」

「うん……」

悔しがる対戦相手。

ざわめくギャラリィ。

あいつらどこの県代表だ、と囃し立てる観客。

「試合前だというのに調子に乗るな」

と、甲斐甲斐しく凌駕を蹴りにくる楽絵紫音。黒神龍大好きな、K県個人代表の少女である。

「……………」

……そんな彼らの様子を、さめた眼で見張る少年。混沌とした会場の中で、魂の沸き立たない者。

スイスドロ―形式で行われる今大会、その試合開始20分前。  
……少年は、青森凌駕を見つめていた。

『凌駕を倒してみてよ。』

……昨日言われた「頼みごと」が頭をよぎる。

少年の名は竜條連次。K県大会団体戦の決勝にて、凌駕たちのチームと戦い敗れた男である。

敗れているので彼は代表選手ではない。では、こんな場所に何の用があるのかというと、

「青森凌駕を倒しに来た。そうでしょう、竜條連次サン」  
「……誰だ」

竜條の背後に、いつのまにか誰か立っている。独特の紋様が刺繍された黒いスーツに、片眼鏡を愛用する変わった少年だ。

「坂姫虎聖なまかきとらひびです。犬養軌跡の要望に応えるため、君とデュエルをしたい」

「犬養の仲間か……？ 俺の用があるのは青森凌駕だけだ、邪魔するな」

「……なるほど」

虎聖と名乗った少年は、片眼鏡を指で撫でながら思考に赴く。

「おそらくは竜條くん、君が私のテストなのですよ」

「はア？」

「私は先日、ある舞台上で犬養軌跡に実力を認められ、仲間にならな  
いかと誘いを受けましてね。その試練として設けられたのが、おそ  
らく君とのデュエル。そういったところでしょう」

「……遠回しなやり方じゃねえか。俺に青森凌駕を倒させようとし  
たのは、どういう事だ」

「青森凌駕を倒せといえば、君は青森凌駕の場所へと向かうでしょ  
う？ ならば私も同様に、青森凌駕の行く場所を辿れば、君に巡り  
あえる。そういう事です」

「だから回りくどいんだよ。適当な場所を指定すればいいものを、」  
「分かっていませんね。犬養軌跡の言うとおりにするということ事は、  
彼のおもちゃになるという事でしょう。おそらく犬養軌跡は、」

地点で××とデュエルしてみてよ』という要求を、君は飲まない  
だろう……と読んだんです。犬養軌跡に反感を抱いていた君ならね  
ですが、青森凌駕との再戦が叶うとなれば話は違う。そして、思  
惑通り、君はココにいる。君をおびき出すエサとして、犬養軌跡は  
青森凌駕を使っただんです」

「……………」

虎聖は腰のホルダーからカードの束を取り出す。

……洗練された40枚。デュエリストのデッキだ。

「サカキ」

「……お呼びでしょうか」

「俺がお前を倒したら、その後に俺は青森凌駕を蹴散らす。……そ  
の邪魔をするな……分かったか」

「……仰せの通りに致しますよう」

フリーデュエル開始。

東日本大会の始まる、15分前の出来事だった。

「俺の邪魔をした事、……忘れんじゃねえぞ」

「何のことでしょう？ 私は君を倒すだけ。君の邪魔をする気はサラサラありません……君が場外乱闘で青森凌駕という少年を負かそうが、私には諸実関係がない」

ちなみに、竜條連次は昨年の全国覇者としてすでに有名人である。そんな彼がフリーデュエルのスペースへ顔を出したとあれば、そこそこ一大事。……というわけで、あつという間にギャラリーが群がる。

もちろん、この大会にはもう関わりなくなった竜條にしてみれば、邪魔なことこの上ない。

「《ジエスター・ブレイン》超動。カードを3枚引きますが、どうします？」

「勝手に引きやがれ。俺のターンで《レッピー・アイニー》を召喚。山札の上から2枚を表向きにし、《超次元ドラヴィタ・ホール》を手札に加える。……行くぜ、《爆竜フレームシヴァXX》で攻撃する。山札から《超次元シャイニー・ホール》を手札に加える！」

「では、《ガラティア・ドラゴン》でブロック。《ガラティア》の能力で、君の《レッピー・アイニー》のパワーを1000ダウンさせて破壊。」

そして、私のターンの《炎獄スマッシュ》で《フレームシヴァ》を破壊します」

序盤から怒涛のやりとり。

幾重にも連なる駆け引きが飛び交う。

「《爆竜ハリケーントプス XX》召喚！」

「では《魔光王機デ・バウラ伯》を召喚し、《魔弾ソウル・キャッチャー》を拾います」

竜條は相変わらずのパワーデッキを用いる。前回、凌駕とのデュエルで使用した連ドラデッキとはまた違うタイプの、ドラゴンを使う戦術を用意してきたようだ。

対する坂姫虎聖は、若干地味ともいえる戦法。しかし確実に、竜條の戦術を削いでいく堅実なデュエルを行っていた。……呪文を主体にした、コントロール寄りのプレイングといえるだろう。

いくつもターンを消化するうち、ギャラリーも次第に増えていく。中には自分で実況を始める迷惑な者もいた。2人はとりあえず無視するも、周囲の熱狂ぶりは拍車がかかりつぱなした。

そして、手札を使い切った竜條が動く。ギャラリーの熱は最大に膨れ上がった。

「仕掛けさせてもらうぜ。《超次元シャイニー・ホール》で《時空の精圧ドラヴィタ》を場に！」

みる、超次元呪文だ！……観客の誰かが叫ぶ。

虎聖に牙をむくサイキック・クリーチャーが現れた。

「さらに《シャイニー・ホール》の効果により、《知識の精霊ロドリエス》をタップする。その際に、おまえのシールドを《爆竜ハ

リケーントプス XX」で攻撃する！

そして俺は《ハリケーントプス》の能力で、超次元ゾーンから《時空の魔陣オーフレイム》をバトルゾーンに出すことができる……  
「！」

虎聖の表情が険しくなる。

竜條の狙いが掴めたのだろう。……一刻も早く、しかも確実な対処をしなければならぬ……！

「私のターンで、《エナジー・ライト》をキャスト。カードを2枚引きます」

「《時空の精圧ドラヴィタ》の能力超動だ。おまえの《魔光王機デ・パウラ伯》をタップさせてもらう」

「……いいでしょう」

虎聖のクリーチャーは《魔光騎聖ブラッディ・シャドウ》が2体と《解体人形ジェニー》、タップ状態の《魔光王機デ・パウラ伯》のみ。

竜條の並べている《爆竜ハリケーントプス XX》と、2体のサイキック・クリーチャー《時空の精圧ドラヴィタ》《時空の魔陣オーフレイム》に対抗するには、心もとない戦力である。

「……坂姫よお。このまま負けたらおまえ、犬養の試練どころじゃなくなるぞ。大恥もんだな、このギャラリーの前でぶっ潰されたらよ……！」

「まあ同じ事は君にもいえませんがね。前回チャンピオン？」

「口、きけねえようにしてやろうかア？」

虎聖、ターン終了。すかさず竜條が動き出す。

「俺のターンで《時空の精庄ドラヴィタ》の覚醒条件達成！  
《龍庄の覚醒者ヴァーミリオン・ドラヴィタ》に覚醒する！」

サイキック・クリーチャーの覚醒である。

ギャラリーの応援・反応に熱が入る。迫力あるクリーチャーの反転は、デュエリストの心を揺さぶる……！

「《ヴァーミリオン・ドラヴィタ》の能力、呪文ロック超動……  
呪文主体のおまえのデッキが、呪文を封じられて生きていけるのか？」

《龍庄の覚醒者ヴァーミリオン・ドラヴィタ》の能力だ。

それは《光神龍スペル・デル・フィン》と同様に、相手の呪文を完璧に封殺するもの。これにより、相手はパワー12000の巨大クリーチャーに対し、呪文ナシという制限を負いながら対処しなければならぬ……！

さらに。

「《超次元ドラヴィタ・ホール》を超動し、超次元ゾーンから《時空の雷龍チャクラ》をバトルゾーンへ！」

さらなるサイキック・クリーチャー！

この容赦のない展開に、ギャラリーも息を忘れるほど熱中する。

……連ドラという戦法を切り替えたように見えた竜條だが、その本質はどこまでも変わっていないかった。

そう、彼の戦術のコンセプトはすでに明々白々。

「《龍庄の覚醒者ヴァーミリオン・ドラヴィタ》で攻撃する。《魔王機デ・バウラ伯》を潰すッ！」

「そのアタックを《魔光騎聖ブラッディ・シャドウ》でブロックし

ます！」

「勝手に死んでろ。次だ、《爆竜ハリケーントプス XX》でデ・バウラを攻撃！ ブラッディ・シャドウでブロックするのかわ？」

「……ッ、通します」

ブロックはされなかった。……砕け散る《デ・バウラ》。

竜條の追撃はまだ終わっていない。

「この時、《ハリケーントプス XX》の能力により、2体目の《時空の魔陣オーフレイム》をバトルゾーンへ追加。

そして、召喚酔いのない1体目の《時空の魔陣オーフレイム》でプレイヤーを攻撃し、シールドを1枚ブレイク！

この瞬間、《オーフレイム》は《破壊陣の覚醒者オーフレイヤー》に覚醒する……！」

「………」 圧巻だった。

竜條の攻め手には、攻撃的な意思だけではなく、技術面すら伺える。

それは虎聖も理解している。

最後に《オーフレイム》でシールドを破りにきたのは、単純に《オーフレイヤー》へと覚醒させるだけではなく、その隣の《時空の雷龍チャクラ》の覚醒条件をも確実に満たすため。

「………」

虎聖は虎視眈々とチャンスを伺う、コントロールタイプ。相手の隙を見逃さず、呪文で切り込んでいく戦術をメインにすえている。

しかし、《龍庄の覚醒者ヴァーミリオン・ドラヴィタ》の能力で呪文は封じられている。

ギャラリーの誰もが、そして対戦相手の竜條連次も、坂姫虎聖の



敗北を確信する。

いや、彼らでなくとも確信に至るだろう。

《龍圧の覚醒者ヴァーミリオン・ドラヴィタ》 《爆竜ハリケーン  
トプス XX》 《破壊陣の覚醒者オーフレイヤー》 《時空の魔陣オ  
ーフレイム》 《時空の雷龍チャクラ》。

竜條の、サイキック・クリーチャーを連発するという戦術が実を  
結んだ、この状況を眼にしたものならば。

虎聖の完敗を、確信する他ないのだ……。

「おら、おまえのターンだぞ坂姫。尻込みしてんならさつさと逃げ  
ちまえ。続けるならさつさとカードを引け。2つに1つしかねえん  
だよ……！」

「……ふむ。これは中々に見事」

ところが当の本人は。

黒の中に穿たれた白のように、その場所において異質であった。

まるで自身の危機など感じていない。

「ですが、前回チャンピオンの経歴を持つ君にしては、少々軽率と  
いわざるをえない。そこは頂けない所ですね」

「……?? てめえ、何を？」

虎聖のクリーチャーは《魔光騎聖ブラッディ・シャドウ》 《解体  
人形ジエニー》。

竜條連次が呆然とする中、坂姫虎聖がカードを引く。

運命のラストドロードとか、そういう奇跡めいたモノに興味  
はない。

そういうものを構築とは言えど、戦術とは言わないからだ。

「では、とっておきの手をひとつ。」

《アクア・ウェイブスター》！ 多色以外のクリーチャーをすべて、バウンスさせて頂きましょう」

……疾風、怒涛。

「な、なんツだとツ……………てめえ！」

水クリーチャー、《アクア・ウェイブスター》。

コスト7、パワー2000。

このクリーチャーをバトルゾーンに出した時、多色以外のクリーチャーを、すべて、持ち主の手札に戻す……………！

「超次元呪文による大量展開……………まあ、見越していましたが何か？」

虎聖はいそいそと《解体人形ジエニー》を手札に戻す。

しかし、竜條はそれどころではない。それを察知したのはギャラリ。すぐにわっと沸き立つ。

「う、うおおおっ！ ひっくり返したぞ！」

「あの片眼鏡、いけるんじゃないか！？」

「いや、まだ分からねえよ！ 竜條さんだし……………！」

「多色以外って事は、サイキックほぼ全部に効くんじゃない？」

「やべーな《ウェイブスター》、超次元メタになるかも……………！」

観衆が狂うのも無理はない。大量展開に成功した竜條のクリーチャーはいまや、《龍庄の覚醒者ヴァーミリオン・ドラヴィタ》を除いて全滅ッ！

5体だったクリーチャー軍団がただ1体だけの孤軍と化した。

これが逆転である！

これこそがデュエル・マスターズなのだ……！

「まあ、出の遅い《アクア・ウェイブスター》では、完璧なメタカードとなれるかは微妙ですがね？」

ですが、手札にきたものは仕方ありません。とりあえず、君がサイキック・クリーチャーをあらかた並べるまで待たせて頂きました……」

「くっそツたれ！ 《爆竜ハリケーントプス XX》召喚！ 《龍圧の覚醒者ヴァーミリオン・ドラヴィタ》でシールドをトリプル・ブレイクッ！」

しかし、虎聖はそれを《ブラッディ・シャドウ》でいなす。

「私のターン。《暗黒の悪魔神ヴァーズ・ロマノフ》を召喚」

竜條にとつて、またも予想外のカードを、虎聖が繰り出す。

「能力により《龍圧の覚醒者ヴァーミリオン・ドラヴィタ》を破壊します」

「くそツ、解除能力超動！ 《ヴァーミリオン・ドラヴィタ》を裏返し、《時空の精圧ドラヴィタ》となってバトルゾーンにとどまる！」

「ええ、では《ヴァーズ・ロマノフ》の攻撃で《ドラヴィタ》を、もう一度破壊しますね」

覚醒前、つまり《時空の精圧ドラヴィタ》の状態ではパワー5500程度。

前のターンに攻撃したのが仇になったか。タップ状態のまま「解除」を使うはめになってしまった《ドラヴィタ》は、そのままパワー7000の《ヴァーズ・ロマノフ》に蹴散らされた。

そして、このデュエルにて初めて、虎聖が動く。

「《アクア・ウェイブスター》でシールドをブレイクします」

……ちっ、破ってくるだと……！？ キメにきやがったな…

…！

シールドを手札に加えながら竜條は危惧する。

あせるな。

だが……竜條のマナはわずか。そして手札もわずか。

毎ターン、ここからデックトップドロイだけで戦わなければならぬに等しい……！

「《爆翔イーグル・アイニー》召喚！」

出たのは、小型のファイアー・バード。ギャラリーは落胆の色を見せる。

前回チャンピオンの竜條連次なら、もしかしたらこの状況をもなんとかできるのでは……と、思っていたのに。

「ざけるなっ、これがギリギリ、なんとかできるラインだ。いくぜ、《爆竜ハリケーントプス XX》の攻撃！ シールドを2枚、ブレイク！」

そして《ハリケーントプス》の能力で超次元ゾーンから《時空の魔陣オーフレイム》をバトルゾーンに出す。そして《イーグル・アイニー》の能力でスピードアタッカーを得る！

《オーフレイム》で《アクア・ウェイブスター》を攻撃！」

「……それが、終わりですか」

《アクア・ウェイブスター》破壊。虎聖のクリーチャーは《暗黒の悪魔神ヴァーズ・ロマノフ》だけ。

「君は過去の栄冠のみの、埃にまみれた遺物だ。青森凌駕に近づくと価値すら失われたデュエリスト。それが君です。竜條連次」

「……………!? ……」  
「手札から《光陣の使徒ムルムル》を2体召喚。そして……………今こそ『呪文』を使わせて頂きましょうか。」

《ダイヤモンド・ソード》！ この効果で、すべてのクリーチアーの『攻撃できない』を無効化！ そして召喚酔いをも無効化ッ！

加えて、G・ゼロ。手札から《魔光騎聖ブラッディ・シャドウ》を無料召喚！」

そう。

《ムルムル》と《ブラッディ・シャドウ》の召喚酔いが、消えた……………！

「私の攻撃です。《暗黒の悪魔神ヴァーズ・ロマノフ》と《光陣の使徒ムルムル》2体で、残りのシールド4枚をすべてブレイク。そして《魔光騎聖ブラッディ・シャドウ》の一撃で、プレイヤーにトドメを！」

一閃！

……………フィニッシュはあまりにも怒涛。

最後に手札に来た、竜條のシールド・トリガー《地獄スクラップ》も、パワー10500にまで膨らんだ《魔光騎聖ブラッディ・シャドウ》を止める事はできなかった。

決着と同時に、観客は興奮に包まれる。デュエルの最中を上回る騒ぎだ。

竜條連次が目の前で敗北したのだ。  
新たに超次元という戦略を用いても、またも負けてしまった。

「さて。私は一応D県代表という立場でもあります。なので、今日  
はこれにて。……さようなら、竜條連次サン」

恭しく一礼すると、虎聖は片眼鏡を正し、リースペースから会場へと帰還する。

すると、すでに大会開始3分前を切っていたようだ。  
慌てることなく、所定のテーブルへと移動する坂姫虎聖。

「あ、遅いぞ坂姫。どこ行ってたんだ」

「ほら、もう始まつちゃうよ！ 頑張ろう、ね？」

「申し訳ありません、帆積サンほづみに月小路サンつきみち。野暮用がありません」

笑顔を振りまく。

D県団体部門代表。坂姫虎聖、帆積吉良秋、月小路あゆな。

虎聖はチームのひとりだったのだ。

「なんだよ、切り札入れろって言っただる虎聖。デカいやつでぶん  
殴るのが楽しいんじゃないかよー」

「君は少々安直すぎますよ、帆積サン……。私は仕掛けを破裂させる  
のが得意だけです。月小路サンも同じですよね？」

「わっ、わたしはホラ……。バロム様出せたらいいんだもん！」  
「……なるほど。君も切り札を使いたいわけですね」

「だってえ、バロム様わたしの嫁だもん！ あゆなの嫁！ きゃー  
もうバロムかわいいー！」

「バロムは女だったのですか？ は、初耳ですね」

「うーん、そういうんじゃないかってねー」

「おい、静かにしろよオマエら。もう始まるぞ！」

「……最初はどこでしたっけ？ E県ですか。では、先鋒を勤めさせて頂きましょう」

「トラ頑張つてー！」

「俺らにも出番回してくれよー！」

賑やかな仲間に背中を押され、デュエルテーブルに向かう坂姫虎聖。

勝負はまさに電光石火であった。

3対3の勝ち抜き戦でありながら、先鋒の坂姫虎聖1人による3人全員抜き。

D県代表の圧勝で、彼らの1回戦は終わった。

心のすみで、虎聖は自信を得ていた。

サイキック・クリーチャーに追い詰められたなら、すべてバウンズしてしまうという豪快な反撃方法。

これは、誰にも真似できやしない。

こんな事を考え付き、実行してしまうのは自分だけだと考えていた。

事実、今回対戦したE県代表選手3人の誰も、虎聖に勝利することはできなかった。

《アクア・ウェイブスター》によるオールバウンス。これは、誰にも真似することはできない、そして真似することは許されないと

いう、絶対のこだわりにして絶対の自信だった。

「うわ、すげえ！！ あいつ、相手のクリーチャー全部飛ばしやがった！」

「飛ばすって何だよ、バウンスだろ！」

「……何？」

坂姫虎聖は会場を振り返る。どこかから聴こえた、聞き捨てならない歓声。

クリーチャーのオールバウンスを戦術とする者が、他にも会場にいるのか……？ それはどんなデュエリストなのだろう。どんなデュエルをするのだろうか。

「これでめえのクリーチャーは消えた！ 《魔刻の覚醒者G・オルゼキア》でトドメだッ！！」

そいつのデュエルテーブルには、クリーチャーがわずか2体。

だが、その対戦相手のテーブルには、クリーチャーが1体もいない。……オールバウンスだ。この勝ち方は、この戦術は坂姫虎聖と、自分と同じではないか。

いったい何者が、このような戦術を好んで使うのだろうか？

「……やったぞ、凌駕！」

「凌駕さん……すごい」

「どうだあ柳、鈴井、田所！ 俺の新しいデッキはよお！」

仲間とともに喜び合う、帽子の男。

スコアを見ると、このチームも先鋒の1人目が3連戦して全勝したらしい。

……というか、この選手には見覚えがありすぎる。



「青森、凌駕……!!」

片眼鏡から、刺し貫くような眼光が、凌駕に向けられた……。

## V S 東日本代表戦（後書き）

堂々の新キャラです。

名前は坂姫虎聖（Sakaki Torahiji）。絶対ありえないような当て字ですが、近年の大人も似たような名前をつけているようなので問題はないでしょうねえ。「凌駕」の時点で十分危険ですけどね（、、

超次元について執筆してみました。わたしとしてはあまり超次元には触れたことがないです。強いサイキック・クリヤーがなかなか手に入らないもので……！ サイキックエ……！

## V S 東日本代表戦・決勝戦「1」（前書き）

この文章は実在するカードゲーム「デュエル・マスターズ」を主軸に置いた物語です。

なお、この物語はフィクションもいとこの作り話に過ぎません。それゆえ、実在する団体や地名、氏名年齢住所電番、公式大会などとは一切関係どころか縁もゆかりもございません。

## V S 東日本代表戦・決勝戦「1」

デュエル・マスターズDS デュアル・ソウル

「ッさあ！ 勝利数計算により、いよいよ今大会の団体戦決勝チームが決定されたぞ！ 東日本代表をかけて争うのは、この2チーム！！！」

Y県の体育館、東日本代表選抜大会会場に、司会の声が響く。戦い続けたデュエリストたちが発表を待つ中、その2チーム2県の名前が挙げられた。

「まずはK県代表！ リーダー柳くん率いるズッコケ3人組だ！ これまでの経歴は県大会どまりというから驚き！ おそらくは凄まじい特訓を重ね、この大会へと辿り着いたに違いない！！」

「またズッコケ3人組って言われた！」

「リーダー、この場合誰が3人組なんすかねー。俺って入ります？」

「多分、おまえと僕と、鈴井さんで3人組……」

「まじっすかー……」

どんまい田所。

「あ、凌駕さんも入るんじゃないっすか？」

「いや、あいつは入らないだろ」

「おーす柳。ただいま。たい焼き食う？」

「……入るかもしれないね」

「ん？ 何に？」

『続いてD県代表だ！ 前回もこの大会に顔を出したが、惜しくも敗れ去ったチーム！ リーダー坂姫くんを新たに加え、今度こそ雪辱を果たすことができるかー！？』

「うっしや。やったるうぜ坂姫、月小路！」

「絶対バロムで勝つてやるー！」

「……落ち着きのない人たちですねえ」

両雄出揃った。

決勝戦の舞台を間近に、いよいよ開幕する熱狂の一戦。

『ルールは簡単！ それぞれのチームで先鋒・中堅・大将を選択し、それぞれ互いの先鋒・中堅・大将とだけ戦う！ そして2勝をあげたチームの勝ちだ！』

つまり、大将を倒せば勝ちになる予選と違って、先に2敗してしまえば大将が出るまでもなく終わってしまう可能性も秘めている。

そこをよく理解した上で試合に臨んでくれ！」

「……聞いた？ 凌駕」

「ああ。つまり俺か柳か鈴井 この中で誰か2人負けたら、その時点で終わりって事だな」

「そんな……あたし、負けたら……」

「負けた事なんて考えるなよ鈴井。………？」

凌駕は、誰かの視線に気づく。

……対戦相手のD県代表チームだ。その中の一人が、こっちのチームを……いや、凌駕を刺すように見ている。

黒スーツに片眼鏡という、面白いスタイルの少年である。

「……………なるほど。なるほどな」

凌駕はその眼から、何かを察したらしい。

あの眼に宿るのは、敵意に近いもの。しかし悪意のない純粹な心。それを言語化するなら、おそらくは 闘志と書くのが正しいだろう。

「よッし！ じゃあ俺が大将やっちゃおうかなー！！ 悪いな柳、鈴井！」

凌駕が急に叫んだ。

「ちよつ、凌駕！ そんな大声で言ったら向こうに聞こえる……………」

柳が慌てて止めるが、凌駕は微塵も気にしていない。むしろ意味深に、相手のD県代表チームを見つめている。

……………彼、坂姫虎聖もそれを理解したようだ。

「おい、虎聖。あいつ、なんか見てきてるぜ」

「面白いですね。私、今回は大将で行こうと思います」

「え、トラ大将なのお？ 珍しいね、いつも先鋒で3連勝したがってるのに」

「……………しよーがねえなあ。じゃあ、誰が先鋒」

「はーい！ わったしわたし、あゆな行きたい！」

「はあ？ おまえそんな目立つタマかよ。俺が様子見に……………」

「うっさいキラ、譲って！」

「てめえなあ！ まあいいわ、行ってこいよ月小路」

後ろの2人が揉めている間も、坂姫虎聖は視線を揺るがさない。  
……青森凌駕。犬養軌跡が気にかけているというデュエリスト……。  
気になる。

その存在がいかなものなのか、非常に気になる。  
大将で来るというのなら乗るうじゃないか。

「……敵も、やる気十分だぜ。柳」

「わ、わかってるよ凌駕。気を引き締めてかからないとね……!!  
うおおお、一週間かけて研究したデツキよ、僕に力をくれやがれ……

……!!」

「り、リーダー変……!!」

「変!? ひ、ひどっ! それはないよ鈴井さん」

「ごめんなさい」

『それじゃあ開始しようか! 両チーム、それぞれ先鋒・中堅・大  
将は決まったかなあ!?』

泣いても笑っても最終戦! 決勝戦の始まりだああ!』

「よっしやああ、行くぜ! 柳! 鈴井! 田所!!」

「始めましょうか。帆積サン、月小路サン」

#### K県代表

【先鋒】柳 太一

【中堅】鈴井 水子

【大将】青森 凌駕

#### D県代表

【先鋒】月小路 あゆな

【中堅】帆積 吉良秋

【大将】 坂姫 虎聖

「よろしくお願ひします！」

柳は元気よく頭を下げ、挨拶する。

礼儀正しい姿だが、決勝戦という舞台に飲まれてこわばっている証拠でもある。

「え？ よろしくう。キミ面白いね、あははっ！」

月小路にからかわれる始末。柳は赤くなりながらも、シールドを並べだす。

『さあ、準備はいいか！ 東日本代表チーム決定戦！ デュエル・スタートだッ！』

「あゆなの《プライマル・スクリーム》で山札4枚捨てて、とりあえず《ゴースト・タッチ》を発動しちゃうかな」

「僕は《魔弾パンダフル・ライフ》を超動！ バトルゾーンに《魔光騎聖ブラッディ・シャドウ》があるのでナイト・マジックにより2枚ブーストする！」

序盤は呪文合戦から開始した。



……この2人のデッキカラーはよく似通っているが、目を凝らせばコンセプトはまったく違う。

月小路あゆなは光と闇のデーモン・コマンド主体。そこへドロの水、タッチで火を加えたコントロールデッキだ。

対する柳太一は、なんとタッチも含めると5色全部使っている計算になる。ただし、《魔光ブラッディ・シャドウ》は呪文を唱えることで無料召喚できることもあり、文明の数に入れないことが多い。そう考えると、柳の光文明は、4積みされた《ブラッディ・シャドウ》のみ。

なので、こちらも光を除いた4色ということになる。どちらも随分と大胆なデッキだ。

「《魔光ドラム・トレボール》でシールドブレイク！」

「じゃあS・トリガーの《デーモン・ハンド》！ 《トレボール》破壊！」

序盤から積極的にシールドを割っていく柳。

対し、月小路あゆなはまだ準備段階だ。バトルゾーンに《聖黒獣アシュライガー》を置き、隙をうかがっている。

「凌駕くん。リーダー、大丈夫かなあ……」

「まだ序盤だよ鈴井。柳も考えがあって動いてるはずだぜ。現に、柳のクリーチャーはまだ手薄だ。《パンダフル・ライフ》もそうだし、結構まだ何か秘めてると思う」

「そうなの？」

「テンションあげていこうぜ！ 柳なら勝てるはず！ ほら、田所おまえも応援しやがれ」

「俺っすか？ マジ勘弁すわそういつの」

「ノリ悪っ。……と、そろそろ動き出すぜ、あいつら」

「わたしのターン！ 《アシュライガー》でコストを軽減し、《壊滅の撃墜王エスコバルド Z》召喚！」

『出たッ！ コスト7の凶悪デーモンコマンド「Z」<sup>ゼータ</sup>！ その名も《エスコバルド》！』

「なら僕は《氷牙フランツ二世》を召喚！ その能力でコストを減らし《魔弾オープン・ブレイン》を発動！ ナイト・マジックにより4ドローだ！」

『対する柳くんは、かの《サイバー・ブレイン》をも超えるスーパードロワー、オープン・ブレイン！ 何を仕掛けてくれるのか！』

凌駕が反応する。

「まずい、駄目だ柳！」

「あゆなのタアーン！ まずは爆殺コンボ、いっちゃうよー！ 《崩壊と灼熱の牙》、超動！」

月小路あゆなが呪文を唱える。

「ほ、《崩壊と灼熱の牙》……！？」

「さらに、《壊滅の撃墜王エスコバルド Z》でキミを攻撃！ さあ、『返霊』発動！」

墓地のカード7枚を山札の下に置くことで、バトルゾーンにある

コスト7以下のクリーチャーをすべて破壊するよ!」

『ああーつと!? D 県代表の先鋒、まずは必殺の「返霊」だ!』  
「ということとは、……そんな、僕のクリーチャーが全滅!」

そう、柳の《氷牙フランツI世》《魔光騎聖ブラッディ・シャドウ》は、どちらもコスト7以下のクリーチャーだ。

「だけじゃないよ、《崩壊と灼熱の牙》の効果発動! このターン破壊されたキミのクリーチャー1体につき、マナとシールドを1枚ずつ削る! つまりマナ2つとシールド2つを破壊する!」

《壊滅の撃墜王エスコバルド Z》の滅殺能力と、《崩壊と灼熱の牙》の効果ブレンドさせたマナ&シールド除去コンボ。……これが「エスコバルドの牙」(命名:月小路あゆな)である。

「さーて、シールドをW・ブレイク!」

「うわっ……!! く、くそ……1ターンでシールドを4枚も削られるなんて!」

「リーダー……! りよ、凌駕くん、あれ大丈夫なの……?」

「今のは痛えな……けど、前のターンに引いたカードで何とかできるはずだぜ!」

「呪文、《炎獄スマッシュ》! 《壊滅の撃墜王エスコバルド Z》破壊!

そしてG・ゼロで《魔光騎聖ブラッディ・シャドウ》を召喚だ!  
「あ、クリーチャーなくなった……仕切りなおしになっちゃったか!。しかしキミも《ブラッディ・シャドウ》好きだねー。うちのト

「ラも好きなんだよ、ソレ」  
「ト、トラ？ ……誰？」

ペースを乱されるな。と、柳は心の中で自分に念じる。  
ペースを乱されるな。今のやりとりで、バトルゾーンにあるクリ  
ーチャーは柳の《魔光騎聖ブラッディ・シャドウ》だけになった。  
ここからなら、まだ立て直せる。

「わたしのターンで《超次元リバイヴ・ホール》超動！ 超次元ゾ  
ーンから《時空の脅威スヴァ》をバトルゾーンに！」  
「……《スヴァ》、か。ブロッカーを置いてきたね」

「さあ、クリーチャーはお互いブロッカーのみ！ どちらがこの均  
衡を先に崩すのか！」

「僕がやってやる！ 《邪眼死龍ゴールドノフV世》召喚！」

動いたのは柳。召喚した《ゴールドノフ》は、墓地の呪文をすべて  
闇にする能力を持っている。

「それでロマノフでも使おうって気なの？」

「さあね。どうぞ、君のターンだよ、月小路さん」

「OK！ 《スヴァ》から進化！ 《死神明王ガブリエル・XEN  
OM》！！」

すぐに《ガブリエル・XENOM》で攻撃！ その時にわたしの  
山札を3枚捨てて能力発動。キミの《邪眼死龍ゴールドノフV世》を  
破壊！」

「しまった、《ゴールドノフ》を！」

「最後のシールド貰っちゃうよ！ ブレイク！」

柳、シールド0枚。

……パワー11000の《死神明王ガブリエル・XENOM》を前に、あまりにも無防備。

『ああー！ 柳くん、シールドをすべてブレイクされすっぽんぽんだ！』

「すっぽんぽんとか言うな！ 恥ずかしいよ！」

けれど。

最後の奇跡が、柳に光明をもたらす。

「……あ、やった、シールド・トリガー！ 呪文、《クリスタル・メモリー》だ！」

「え！？」

あゆなはわずかに、自分の行動を責めた。先走りすぎたか？ と。

柳は山札を見る。

《クリスタル・メモリー》は、種類問わずカードを手札に加えることができる呪文だ。わずか1枚のサーチだが、しかしその1枚が、劇的な展開を呼んだって何もおかしくはない。

「……よし！ これならいける！ 勝てるぞ！」

「急に元気になったな、柳」

「みたいっすねー。あのテンションは前からっすから」

「僕のターン！」

柳が手札からカードをプレイする。  
その眼には、わずかに気迫のようなものすら見える。

カード・レジョン  
「呪文！ 山札の上の順番を入れ替えることができる！」

「山札操作……？ 何を考えてるの」

「そして、《クリスタル・メモリー》で呼んだのは……こいつだ！

《魔光蟲ヴィルジニア卿》を召喚する！」

《ヴィルジニア》……かつて彼が目の当たりにしてきたデュエリストが、何度も振りかざした凶悪クリーチャー。

その能力は、墓地からクリーチャーを1体拾うこと。

そして、それがパラサイトワームまたはナイトの進化クリーチャーであれば、

「……ノーコストで、バトルゾーンに出せる」

「そのとおりだ！ 《ヴィルジニア》と《ブラッディ・シャドウ》を進化元にして、墓地からこのカードを出す！」

《暗黒皇グレイテスト・シーザー》……これが、僕の切り札だ！

「……………ッ！！」

月小路あゆなが後ずさりした。

そして堂々の切り札宣言。これに、実況だけでなく会場全体がヒートアップする！

「いくぞ、《グレイテスト・シーザー》の能力！ 攻撃時、墓地にある闇か火の呪文を唱えることができる！ 僕はこの能力を使って、《超次元ストーム・ホール》を超動だ！」

超次元ゾーンから、《時空の神風ストーム・カイザー XX》をバトルゾーンに！」

「な、なんとツ！ 《ストーム・ホール》で呼び出したのは大型クリチャー！ 《ストーム・カイザー》だ！ ナイト戦術を得意とする柳くんにはイメージにあわないぞ！」

「さつきから余計なお世話だよ！」

だが、その力はまさに本物。

《グレイテスト・シーザー》の攻撃とともに、パワー12000のT・ブレイカー獣が現れたのだ……！

「……見事だわ。すごい。すごすぎる」

「ありがとう。……さあ！ 《グレイテスト・シーザー》の攻撃！ 《死神王ガブリエル・XENOM》を殴りにいくぞ！」

この一撃で、月小路のクリチャーは0に。

……追い詰められていた柳は、《クリスタル・メモリー》1枚でここまで戦術を昇華させた。

いま、柳のクリチャーは《暗黒皇グレイテスト・シーザー》と《時空の神風ストーム・カイザー XX》。そのどちらも、パワー10000超えのT・ブレイカー持ち巨大獣！

「やった……逆転してる！ やったぞ！」

「……そっか。《ヴィルジニア》を出す前に《ガード・ビジョン》で山札を操作してたのは……」

「《ストーム・カイザー》の覚醒のためだよ。山札の一番上がドラゴンなら覚醒できるからね。……ちなみに、次のターンには覚醒できるよ！ デッキの上をドラゴンにしておいたから！」

「わたしのターン！ ……まだ、終わってないもん！ 《次元院の霊騎アスファル》召喚！」

そして呪文、《デッドリー・ラブ》！ これでわたしの《アスファル》と、キミの《ストーム・カイザー》の2体を破壊！

《アスファル》が破壊された時、わたしの超次元ゾーンから《時空の霊魔シュヴァル》をバトルゾーンへ……！！」

なにがなんでもデーモン・コマンドを残したい。

それが月小路の唯一の思考だった。

「僕のターン……！！」

結果的には、間違っていない。

柳のシールドは0。しかも、ブロッカーはいない。《ブラッディ・シャドウ》は《グレイテスト・シーザー》の進化元に使ってしまった。

この隙に付け入ることが、月小路あゆなの唯一の勝利のチャンス！

159

「なら、それをカバーするまでだ！ 《超次元ストーム・ホール》を手札から超動し、その効果で《時空の霊魔シュヴァル》を破壊だ！ 加えて、さつき破壊された《時空の神風ストーム・カイザー X》を再びバトルゾーンに出す！」

「うっ……！！！！」

たった1体のアタッカーを破壊された。

しかも、一度破壊した《ストーム・カイザー》がまた戻ってきた。月小路あゆなに、次の攻撃手段は残されていない。

「《グレイテスト・シーザー》の攻撃！ シールドをT・ブレイク！

同時に、墓地から《超次元ボルシャック・ホール》超動！ 超次

元ゾーンから《時空の喧嘩屋キル》と《時空の踊り子マティーニ》

を場へ！」



『うまくブロッカーを並べる柳くん！……攻撃しながら防御を固める！ こういう時に超次元は強いッ！！』

月小路のシールドが、わずか1枚になる。

「……………あ」

「？」

……………まあ。シールドを3枚も一度に破られれば、出てしまうものは仕方ないのだろう。

「シールドトリガー、《インフェルノ・サイン》」

『なんとッ！ ここでシールドトリガー、俗称「サイン」！ 何をリアニメイトさせる！』

「墓地から《壊滅の撃墜王エスコバルド Z》をバトルゾーンに！」

《エスコバルド》再来。

デュエルの最初のほうで死んでたなあそういえば。と会場の何人もがうなずいた。

「しまった……………！ けど、僕には《マティーニ》がいる」

そう、柳のブロッカーは万全。

「わたしのターン……………！」

……………《エスコバルド》は墓地のカードを7枚山札に送ることで、その《マティーニ》すら破壊できる。

けれど、彼女の墓地にあるのは

《インフェルノ・サイン》  
《デッドリー・ラブ》  
《次元院の霊騎アスファル》  
《死神明王ガブリエル・XENOM》  
《超次元リバイヴ・ホール》  
以上の5枚だけ。

「よし、返霊は使えない……これで、次のターンに僕の勝ち、」  
「……いや、わたしの勝ちだよ!!」

妙なことを口走り始める月小路あゆな。  
唐突な勝利宣言。すっかり柳ペースの会場は、キョトンな空気に  
つまれた。

「いくよ、これがわたしの史上最強最愛の嫁切り札……!!」  
《悪魔神バロム》だ……!!  
「……」

「《バロム》？」  
「うん。《エスコバルド Z》から進化ってことで！」  
《悪魔神バロム》。  
デーモン・コマンドから進化。  
このクリーチャーをバトルゾーンに出した時、闇以外のクリーチ  
ャーを全破壊。

「……って事は。どうなるんだっけ」  
「やだなあ、キミのクリーチャー、全滅でしょ？」



「おちこまないで、リーダー。しょうがないもん……」  
「うぐぐ……。鈴井さん、僕ってダメなやつだなあ……」

いつにない落ち込みぶりに、チームメイトが駆け寄る。田所はいつもどおり、ヤレヤレといった表情。凌駕もいつもどおり、

「ナイスファイトだったぜ！ 俺に内緒であんなデツキ組んでやがったのかよ柳！」

「びっくりさせようと思ったんだけどね……負けちゃ意味ないよ……」

「ワケあるか、観客みんな沸いてたじゃねーか。おまえのデュエマは最高だったって事だよ、柳！ おら元気出せー！」

「でも、大丈夫かな。初戦から落としちゃって……」

「大丈夫。その辺は鈴井がうまいこと勝ってくれるから！」

急に話の槍がとんできて、反応を返せない鈴井水子。

「えええ？」

「つーわけで、頑張ってくれよ鈴井！ 柳のぶんまで勝て！」

「そ、そんな………えっと、りよ、凌駕くん、助けてよ………」

「弱気なんなつて！ まだ1回負けただけだぜー、どうにでもなるんだよ！ 信じてるぜ、鈴井！」

「うっー………」

そっとうわけで、中堅戦が始まる。

「だいじょうぶ、かな………？」

「よっし、このまま勢い乗って、2連勝きめてやる！」

中堅戦。

鈴木水子 VS 帆積吉良秋

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
.

V S 東日本代表戦・決勝戦「1」（後書き）

柳が見事に逆転されました！

わたしはバロムが大好きです。その中で、どうしても初代バロムが出したかったんです……！ 無印バロムを！（笑）

最新カードをわりと使いこなす、月小路あゆな（Tukinoko Uji Ayuna）。今後どういふ変化、そしてバロムへの愛を見せてくれるのか……！？

それでは、次回は鈴井さんのデュエルをお楽しみくださいm（

）m

## VS 東日本代表戦・決勝戦「2」(前書き)

この文章は実在するカードゲーム「デュエル・マスターズ」を主軸に置いた物語です。

なお、この物語はフィクションもいとこの作り話に過ぎません。それゆえ、実在する団体や地名、氏名年齢住所電番、公式大会などとは一切関係どころか縁もゆかりもございません。

## V S 東日本代表戦・決勝戦「2」

デュエル・マスターズDS デュアル・ソウル

「ねえ、ほんとに大丈夫だよね……カナ……」

『だーいじょうぶよ！ ミズ、あんたいい加減その性格直しなつて言ってるでしょ！？』

「……カナ、言い方きつい」

『ミズが弱気だから！ 大丈夫！ あんたならできるよ、ミズ！

……彼にかっこいいトコ見せたいんでしょ？ その、噂の彼に』

「そんなに、そんなんじゃないもん……！」

『あつはつはつは、違うなら噛むなよー！ 相つ変わらず、ミズつたら分かりやすいんだから……！ あつははは』

「カナの馬鹿……」

『ミズはもつと馬鹿。ホラ、頑張ってきた。ウチと組んだデッキでしょ？ 負けるわけないじゃん！ ウチと、それから、自分を信じるんだよ。ミズ』

「……、うん」

『返事はハッキリと！ 鈴井水子ッ！』

「は、はいー！」

『よし！ じゃ、またね』

ぶつり。



「《ビートル・モグッタン》を召喚。……《雪布妖精ユウコ》で攻撃！」

先制は鈴井。

W・ソウル持ちクリチャーをふんだんに使用した戦術で、序盤の主導権を握った。

『中堅戦、先取はK県代表チームッ！

さあ、鈴井vs帆積の一戦、お互い展開しあい、どちらも引けをとらないぞお！』

鈴井は《ビートル・モグッタン》《雪布妖精ユウコ》《青銅の鎧》をバトルゾーンに展開。

対して、帆積は《ポップ・弥太郎・パッピー》が2体。鈴井の軍団は、パワーは高いとはいえないが、数では帆積に劣らないのである。

「うおお、俺のターン！！」

う……………あの人コワイ……………。

気迫満点な、帆積のカードドロ。気迫はいらぬ場面である。

「デュエルに気合こめて何が悪い！ 《弥太郎・パッピー》を進化《戦劇エンペラー・キンタ》で《ユウコ》を攻撃するぞ！」

「あ……………！！」

『おお、D側も負けてはいない！ 進化獣で殴り倒したッ！』

まさに、一歩も引けをとらないクリーチャー合戦。

先程の柳 vs 月小路で見た呪文合戦とは、また一風異なるデュエルの様相。

「あたしは……《アラゴト・ムスビ》召喚！ 《ビートル・モグツタン》を手札に戻して、マーシャル・タッチ……山札の上から1枚目を、」

「トロトロすんじゃないねえ、ブーストだろブースト！ それくらいさっさとしてくれよ」

「あつ……ごめんなさい……」

「いくぞ！ 俺のターンで《コッコ・ルピア》を召喚！ ターン終了だ！」

『さあー、クリーチャー展開勝負は互角！ 《コッコ・ルピア》を出したという事は、もしかしてドラゴンのお出ましが見られるのかああー！』

心配そうに見守る柳。

「鈴井さん……完全に相手に圧倒されちゃってるなあ、凌駕」

「ああ」

うなずく凌駕。

「仕方ないか、あんな大声でデュエルする相手なんて、気の弱い鈴井さんじゃ怯えるのも……」

「そうじゃねーよ。帆積ってやつ、《コッコ・ルピア》を召喚しただけでターンを終わりやがったぜ。《エンペラー・キンタ》で攻撃

できたのに、だ」

「……なんか企んでるってコトすか」

「田所の言うとおりで。鈴井のやつ、相手に圧倒されて気づいてないぜ」

「あたしのシールドは、無傷の5枚……あの人は4枚。ここで、さらに向かっていこう……！」

鈴井のターン。

場には《アラゴト・ムスビ》と《青銅の鎧》だけ。

だが、マナは芳醇だ。序盤からずっと、クリーチャー召喚とマナブーストを両立させた展開をしていた鈴井にとって、今は絶好の攻め時である。

「《青銅の鎧》を《大勇者「ふたつ牙」》に進化！ 相手のシールドを、ダブルブレイク……！」

圧倒的優位が確定するような、大幅なリードを決めた。

帆積、シールド残り2枚！

……やった！ 勝てる……あたし、勝てるかも……！ ありがとう、カナ！

『おおうつと！？ D県代表、追い込まれる！ ここからどう巻き返すのかあ！ 勝利の風は、完全にK県代表側へと吹いているぞッ』

「……勝利の風かよ。風向きぐらい、自力で変えられなきゃデュエリストじゃねえだろおお！」

俺のターン！ ……油断したな。今のは油断だったな、鈴井ちゃ

「んとやらようっ！」

「『とやら』って何ですか……」

「見た感じ文系なあんたに、力つてのを分からせてやる。こいつが俺の切り札ってやつよ！」

帆積がクリーチャーを切り出す。

自信満々な瞳が、ここでさらに炎のように燃え盛った……！

「《戦劇エンペラー・キンタ》と《弥太郎・パツピー》の2体を進化元に、《戦極竜ヴァルキリアス・ムサシ》を召喚……！」

『進化V獣！ 《ヴァルキリアス・ムサシ》だあああ！ カタカナでムサシと書いてるの見たらロケット団ばかり思い浮かぶぞおっ！……！』

「実況の事情なんぞ知るかあ！」

事態は笑い事ではない。鈴井にとっては。

「さらに……《ヴァルキリアス・ムサシ》の能力で、俺はサムライ・クリーチャーを2体、手札からバトルゾーンに出すことができる……！……！」

「ひっ…………」

「アレはっ…………！！」

凌駕も、思わず息を呑む。

この感覚を覚えている。この感覚。会場に満ちるこの雰囲気はまさに、逆転の合図だ……！

「《蒼神龍ボルバルザーク・紫電・ドラゴン》と《バザガベルグ・

疾風・ドラゴン》、2体のサムライクリーチャーを場に！！」

巨大クリーチャー2体が、コストを無視して登場した。

ただ出てきただけではない。それぞれが《ヴァルキリアス・ムサシ》の能力で「スピードアタッカー」を得て、このターン内に攻撃ができる！

「……………！！」

「さあいくぞツ、死にさせ！　まずは《戦極竜ヴァルキリアス・ムサシ》で《大勇者「ふたつ牙」》を攻撃！」

デュアル・ファンクが破壊された。

《ヴァルキリアス・ムサシ》は強力な能力を秘めているだけでなく、パワー11000のアタッカーでもあるのだ。

「さらに、パワー8000の《疾風・ドラゴン》で《アラゴト・ムスビ》を攻撃！」

……………鈴井のクリーチャーが全滅する。

反撃手段を失ったのである。

「まだ終わらねえなっ！　《蒼神龍ボルバルザーク・紫電・ドラゴン》でシールドをブレイク！」

まずは1枚、反撃された。

「シールドトリガー、《リーフストーム・トラップ》超動！　《戦極竜ヴァルキリアス・ムサシ》をマナゾーンへ！」

「へえ、いいのかよ。俺のマナが増えるぞ……………！　ちなみに、まだ俺のターンは終わってない。《コッコ・ルピア》でシールドをブレ

イク！」

鈴井、シールド残り3枚。

どんどんダメージを返上されていく。クリーチャーのいなくなつた鈴井にとっては、追い討ちのようなものだ。

「まだまだあ！ 《蒼神龍バルバザーク・紫電・ドラゴン》をア  
ンタップ！」

「えっ……！？」

「こいつは1ターンに2回まで、攻撃することができるクリーチャーだ。……もう一発、いくぞ！ 《紫電・ドラゴン》でシールドをブレイク！」

「シールドトリガー、《ナチュラル・トラップ》！ ……《コッコ・ルピア》をマナゾーンへ……！」

「……ちっ、運のいいやつだな。……ターン終了。生き残った俺の《蒼神龍バルバザーク・紫電・ドラゴン》《バザガベルグ・疾風・ドラゴン》は、《ヴァルキリアス・ムサシ》の能力で自爆する」

「……」  
「ただし！ 《バザガベルグ・疾風・ドラゴン》は手札に戻るぞ。  
次のターン……この増えたマナで反撃してやるうじゃねえか……！」

……怖い。

鈴井のターン。

カードを引く。……観客席を振りかえる。

いや、自分の後ろにいる……チームメイトを振り返る。

そこには、心配そうな面持ちで鈴井を見守る仲間たち。

「……そっか。心配……させちゃうよね……」

ほんとうは、今のターン、もう負けたと思っていた。

相手がクリーチャーを破壊しに来ず、ただ即勝利を狙っていたら終わっていた。

自分は負けていたかもしれないのである。

しかし生き延びた。帆積というデュエリストの性格如何で結果が変わっていたが、鈴井はそれを生き延びた。

そして、自分にも相手にも、今、クリーチャーはいない……！

「もう怖くないよ……。あたしは、このチャンスを生かすんだ……」

マナをタップし、クリーチャーを召喚する。

「《無双大地ナズナグマ》！」

……あたしは……これに賭けるんだ……！

「かなみ華奈海ちゃん。お電話、もう終わった？」

「ちよつと待ってー。ミズのやつ、出ないんだー」

「きつと、もう決勝戦始まっちゃってるのよ。頑張ってるんでしょ？ そのお友達」

「うん。臆病なやつでさー、《リーフストーム・トラップ》と《ナチュラル・トラップ》、4枚ずつ入れたいって言ってる聞かないんだよ」

「うふふ……よく分からないけれど、変わったコなのね。さ、もう

お部屋に戻りましょ」

「えー。まだいいじゃん。もうちょっと待ったって」

「駄目よ。ほかの患者さんの迷惑になるかもしれないわ。ね？ ほら、華奈海ちゃん」

「ぶーぶー。しょうがないなあ。ま、看護婦さんにはいつもお世話になってるからね」

「まあ。どこでそんな言葉遣い覚えたの？」

「ドラマ〜。あーあ……ミズのやつ、大丈夫か心配だな〜。ファイトって言いたかったんだけどな〜」

「いいじゃない。昨日、ちゃんと説いたんでしょ？」

「そりゃそうだけど……当日だって言いたいの。ウチがあげた《ナズナグマ》、ちゃんと使ってよなって」

『お互いにシールド2枚という状況で！ 一足早く巨大クリーチャーを出したのはK県代表！ 《無双大地ナズナグマ》だあ！』

「……やるな」

「あたしのターンは終了です……！」

会場がヒートアップ。

彼らの鼓動を体現するかのように、デュエルという空間を囃し立てる！

「俺のターンだ！ ……ちっ、マナが増えたはいいが、手札が悪いな。《エナジー・ライト》！ カードを2枚引く」



鈴井の心臓はどんどん早くなる。

相手が切り札を出したらどうしよう。

そうでなくとも、お互いシールド2枚というこの状況。一瞬で決着がついてもおかしくない……！

けれど、鈴井は覚悟を決めている。

帆積は2枚のカードを手札から出す。

「増えた手札から、まずは《超次元エクストラ・ホール》を超動！超次元ゾーンから《時空の戦猫シンカイヤヌス》をバトルゾーンに出す！

そしてもう1枚、今度は《超次元キル・ホール》を超動！これで、超次元ゾーンから《時空の戦猫ヤヌスグレンオー》をバトルゾーンに！」

2体のサイキック・クリーチャーが揃った。

「そして！ 《ヤヌスグレンオー》を出したことにより、《時空の戦猫シンカイヤヌス》が覚醒する！ 『ループ覚醒』により《時空の戦猫ヤヌスグレンオー》に覚醒だ！

さらにいま覚醒した《ヤヌスグレンオー》の能力発動！ 覚醒した時、自分のクリーチャー1体をスピードアタッカーにする事ができる！」

俺はこの能力により、いま出したばかりの《時空の戦猫ヤヌスグレンオー》をスピードアタッカーにする！ これにより、俺のバトルゾーンには攻撃できる《時空の戦猫ヤヌスグレンオー》が2体だ！」

「……………！！！」

「2体の《ヤヌスグレンオー》で、2枚のシールドをすべてブレイク！ これでシールド0だ……………！！！」

鈴井のシールドがすべて破られた。

これで、次に一撃でもくれば、鈴井の負け。

「……よかった」

「ん？」

「よかった。今のターン、負けるんじゃないかってずっと心配だった……けど、負けなかった……！」

鈴井のターン。

シールドは0で、バトルゾーンには《無双大地ナズナグマ》が1体。

「《雪布妖精ユウコ》を、マナ爆誕で召喚！ この時……《ナズナグマ》の能力で、マナゾーンにあるW・ソウルクリチャーをすべてアンタップする……！」

「なっ……！」

帆積の背中を、いやな予感が漂う。

……それはちょうど、さっき凌駕の感じたという感覚と似ている。これは……！！

「さらにもう1体、《雪布妖精ユウコ》をマナ爆誕！ 《ビートルモグタン》をマナ爆誕！ 《絢爛の超人》をマナ爆誕！」

そして、手札から《母なる紋章》を超動……！！バトルゾーンにある《雪布妖精ユウコ》1体と、マナゾーンにある《鎧亜の咆哮キリユー・ジルヴェス》を交換ッ！」

「よしッー！」

凌駕が、隣にいる柳を殴り飛ばさん勢いでガッツポーズする。  
これはいける、と確信した瞬間。

「いけえ、鈴井いいー！」

「鈴井さん！」

「《キリユー・ジルヴェス》の能力によって、このターン、あたしのクリーチャーはすべてスピードアタッカーを得る！」

「ちよ、お……おいおいッ！！ うそだろお！」

帆積がこの上なく動揺する。

それもそうだ。……彼に牙をむくクリーチャーは5体……！そして、何の冗談なのかすべてがスピードアタッカー！ つまり、召喚酔いなど関係なく、このターンで息の根を止めにかかる！

「《無双大地ナズナグマ》で、シールドをダブルブレイク！ これ  
で……シールド0！」

「シールドトリガー、《スーパーバースト・ショット》お！ 敵の  
パワー2000以下のクリーチャーを抹殺………」

抹殺………しきれない。

「《ビートル・モグタン》と《絢爛の超人》を止めることはでき  
ない………！」

「くっそううっおおおッ！」

「ラスト……！ 《絢爛の超人》でトドメだッ……！」

『ダイレクト・アタック成功おおおッ！！  
中堅戦！ 勝ったのはK県代表、鈴井水子！！ ラストはすさま  
じいー撃を見せてくれたああ！！ 可愛い顔してなかなか手痛い事  
するぞお！』

「なんだって今日の実況は余計なこと言いたがるんだろう！ とに  
かくおめでとつ、鈴井さん！」

柳が出迎える。

「リーダー……！ あたし、勝てた……」

鈴井は声が震えている。……勝利の残響か。

とにかく、体には今、言い表せないほどの歡喜が満ちているのだ。

「す、すごく、不安だったけど……！ 勝ったよ！ 柳くん……！」  
「うん！ ……あれ。鈴井さん。僕を苗字で呼んだの初めてだね？  
だよな、田所」

「っすね。いつもリーダーって呼んでんのに」

「え、う、………今は、たまたま」

「たまたまかー。………さあ、次は凌駕だね」

柳が振り向くと、そこにはすでに、眼に闘志を秘めた青森凌駕が  
立っていた。

その眼はずっと、大将戦の相手、坂姫虎聖に向けられている。

「おう。後は俺に任せな。鈴井が頑張ったおかげで……ここまで繋  
げたぜ！」

「いってこい大将！ 凌駕！」

「っしゃあー！」

「かーっ！ ちくしょう！ 負けちまったぜ、あんな女の子によお」  
「しょーがないよ、デュエマってそういうものでしょお？ キラ」  
「……だなー。悩んだってアレだな。後は虎聖に任せるか」  
「……まったく。その切り替えの早いあたりが、君たちのいい所な  
んでしょうねえ」  
「ん？ もしかしてホメてる？」  
「馬鹿だと言ったんです。まあ、いい意味で、ですがね」  
「次、トラだねー！ 頑張ってね！」  
「ええ。任せてください」

「さあ！！ 中堅戦も終わり、両チームスコアはなんと1vs1！  
！ いよいよ大将戦に突入だああああ！！ 会場みんな、ついて  
きてくれよッ！」

司会が会場を煽る。

観客は実況の言葉と、照明のパフォーマンスに魅了され、地面を  
揺らすほどの声援を惜しみなく送り続ける。

「まずはK県代表チーム、大将。……青森、凌駕くんだああああ！  
！」

名を呼ばれ、凌駕がデュエルテーブルへと踏み出すと、観客が大  
いに沸騰した。

破裂寸前の風船のように、声援はまだまだ力強くなる。

「出ました、今大会いまだ無敗の帝王ッ！ 大将・青森凌駕ッ！  
なんとここに至るまでのすべての試合を勝利してきた少年！」

彼が先鋒を務めた勝負は全部、そのまま3連勝のストレート勝ち！  
規格外の勝率者だああ！！」

観客全員の眼が、帽子の男へと注がれる。

黒髪に、白を基調とした服装。対照的な黒のボトムス。

赤いベルトに吊り下げられたデッキケースから、洗練された40枚、デュエリストのデッキが現れる……！

『対するD県代表チーム、大将はッ、……坂姫、虎聖くんあああ！！』

同じように、虎聖がテーブルに踏み出すと、あわせて観客が沸き踊る。

声援に惜しみなど微塵も無い。

『二つ名は「デュエリスト：ブレイン」！ そう、なんと彼の正体は、2年前に行われた東日本代表戦・個人優勝者なのだあ！』

「……なんだと？」

凌駕が、実況の言葉に首をひねる。

『2年前は《聖鎧亜キング・アルカディアス》による鬼のような、しかし手札を巧みに操るテクニカルなデュエルを見せてくれたぞ！  
今大会はどんな戦術を見せてくれるのか、期待したいところだ！』

「……あなた、優勝者だったのか」

「過去の栄冠ですがね。……ご存知でしたか？ この大会で優勝した個人代表、およびチーム代表選手にはみな、何らかの二つ名が与えられるという制度があるのです」

「みたいだな。あなたの二つ名は『デュエリスト：ブレイン』……」

「過去の栄冠に興味はありません。いま私が見ているのは、君の姿だけ。君のデュエルが見たいだけなのです」

『注目の決勝戦！ いよいよおっぴばじめるぞおおお！ デュエル・スタートだああ！』』

「《腐敗聖者ベガ》召喚！ シールド追加です」

『おおーっとう、《ベガ》だ！ これで坂姫さんのクリーチャーは3体！ さあ、青森くんはどう対処するのか！』

虎聖のクリーチャーは全部で3体。

《光陣の使徒ムルムル》 《雷鳴の守護者ミスト・リエス》 《腐敗聖者ベガ》。

対する凌駕は《アクア・ジエスタールーペ》のみ。

「さあ、見せてください。犬養軌跡が気にかけるほどのデュエルを……！」

「キセキがどう関係すんのか知らないけど、そんなに見たいなら見せてやるぜ!？」

凌駕のターン。

「《ジエスタールーペ》進化！ 《爆裂大河シルヴェスタ・V・ソ

「ド」――！」

すべては一瞬。

《ジエスターループ》に重ねた進化クリーチャーが、虎聖のクリーチャーを根こそぎ破壊する！

「……な、……なッ………！！！」

一瞬で、バトルゾーンはカラ。

虎聖はあつけにとられ、まさに開いた口がふさがらない。

あまりにも強烈で、不意打ちな一撃。

……凌駕だけは、満足げな笑みを浮かべていた。

「とっ！ 突如現れたクリーチャーが相手のカードを全滅させたあああ！！ しかもその能力によって、青森凌駕くんは3枚ドロ―！！」

実況も、観客も、凄まじい一閃に打ちのめされる……！

「なんとというアドバンテージ！ もしや、これを狙っていたとでもいうのか！ 「デュエリスト：ブレイン」と謳われた坂姫虎聖を、ワナに嵌めたとでもいうのかああ！」

「狙っていた、ですって……」

「んん？ おいおい、どうした坂姫い？ 俺のデュエル、まだまだこれからだぜ……！！？」

凌駕はまた、笑う。

邪悪なように、実は楽しくて仕方ないという笑み。

その眼が語っている。



もう終わりか？ と、坂姫虎聖を挑発する……！

「……！！ 受けて立ちましょう。私は、全力で君を倒してみせる  
！」

「 かってきやがれ！」

『 今までにない勢い！ 大将戦を勝ち抜き、東日本代表の栄冠を勝ち取るのどちらなのかあ！！』

t o b e c o n t i n u e d .

## V S 東日本代表戦・決勝戦「2」（後書き）

鈴井さんのデュエルが公開されるのは、もしかしたら初めてかもしれませんね（´ー`、

改めまして。鈴井水子のデュエルスタイルはこんな感じです。

ちなみに「二つ名制度」ですが、作中にもあるように、東・西日本代表の座を勝ち取ったデュエリスト全員に「二つ名」が与えられます。命名ルールは「デュエリスト：〜」。

上で登場した「デュエリスト：ブレイン」とは、ブレインという名の通り、手札を駆使するデュエリストを意味します。2年前の坂姫虎聖は、有り余る手札から数多の手段を使い分けてデュエルを進める戦術家だったので、このような名前がつけられたのだと思います。《聖鎧亜キング・アルカディアス》を使ってたという事は、まあ大体ドロマーコントロールでしょうねー。あ、ちなみにこの物語の間と、実際のデュエマの時間はリンクしておりません。なので殿堂とかわりとあいまいです。そのあたり、ご理解いただけるとありがたいですm（´ー`）m

さて、次はいよいよ最終戦に移ります。次でお会いしましょう！

## VS 東日本代表戦・決勝戦「3」（前書き）

この文章は実在するカードゲーム「デュエル・マスターズ」を主軸に置いた物語です。

なお、この物語はフィクションもいとこの作り話に過ぎません。それゆえ、実在する団体や地名、氏名年齢住所電番、公式大会などとは一切関係どころか縁もゆかりもございません。

## V S 東日本代表戦・決勝戦「3」

デュエル・マスターズDS デュアル・ソウル

2年前。出会った瞬間、彼らはそれぞれに見惚れた。

片や、その圧倒的なプレイングに。

片や、

……小さな商店街の一角だった。催し物としてはいまひとつ客足の芳しくないカード大会。田舎町で行われる、精一杯の息抜きの場。坂姫虎聖の地元である。

子供たちにしてみれば近所の公園のような場所で、店の名前ももう覚えてはいない。

16人程度のトーナメント戦を、みな楽しげな表情で戦う。とても無邪気に。閑静な灰色の商店街に、唯一の賑わいがもたらされるひととき。

坂姫虎聖は、当時から頭抜けた実力を秘めていると話題になっている少年だった。彼がひとたび大会に顔を出せば、フリーデュエルの的となる。財力にものをいわせてレアカードを掻き集め、結局それを扱いきれず敗れていく大人たちとは違う。誇らず驕らず、自分の持てる力の範囲で、出来ることだけをしていく。

彼には自分の出来ることが見えており、自分のすべき事を理解できる。

ひとときクールだったとも言えよう。

いつものように、彼は友人の談笑に囲まれながら、ゲームテーブルにつく。

そして、いつものように一戦終える。対戦相手は笑顔だった。テーブルに置かれたカードを束ね、片付けている時。ふと珍しいものが目についた。

近隣では見かけない人物。年齢は、虎聖と並ぶ程度だろうか。

……それは、地元の子供ではなかった。顔には常に笑みが張り付き、顔が隠れるのではないかというほどの大きなヘッドフォンを首に提げ、にこにここと無口にカードゲームを楽しんでいる。

その子は白髪でもあり、いっそう好奇心をかきたてる外見である。珍しいもの見たさでそのテーブルに近寄る虎聖。

その目に映ったのは、デュエルテーブル。

……衝撃的な光景。周囲の面子は違和感など持っていない。しかし、虎聖にのみ理解できる、圧倒的な衝撃があったのだ。

『……それは』

その衝撃につられ、虎聖は、ケースに仕舞ってある自らのデッキを確認する。そのデッキはしっかりとケースに収まっており、誰かが手をつけた形跡はない。

何故、坂姫虎聖はそんな行動をしてしまったのか。

それは、まったく、同じだったから。

そのヘッドフォンの子供が使っているカードは、ほぼ……いや、すべてと言ってもいいだろう。

坂姫虎聖の使うデッキそのものだったのだ。

そして、虎聖の眼を奪う光景は、それだけに終わらない。

そこに並ぶカードは、いずれも自分のデッキのコピーであるはずなのに。

そのプレイング、カード捌きは、とても自分と鏡合わせに並べられるものではない。

同じカードを使っているはずなのに。その本来の持ち主であるはずの自分ですら考えないようなテクニックを扱う、ヘッドフォンの

少年。

彼は、坂姫虎聖は見惚れてしまった。

その圧倒的なプレイングに。

……自分の使っていたカードたちには、こんな使い方があったのか。と、言葉に出来ない新鮮な気分になった。自分が先程までテールブルに並べていたカードが、今はまったく新しい別のものに見えてしまう。

『すみませんが』

思わず声をかけていた。対戦を終えたヘッドフォンの少年は、笑顔のまま、顔を虎聖へ向ける。きよとん、と丸い目がこちらを映す。

『見かけない顔ですが、君の、名前は……？』

表情は変わらない。

その少年は虎聖に、耳を近づけさせるようなジェスチャーをする。ひそひそ話かしたいのか、と虎聖もそれに従う。

耳元で、ヘッドフォンの少年は嬉しそうに囁いた。

『いぬかいきせき。』

犬養軌跡。

この後、この珍しい名前を、虎聖は一度も忘れない。

『ありがとう。私の名前は、』

『知ってるよ、さかきとらひじ』

『……？なぜ……』

『君は友達が多い。みんなから、さかきとか、とらひじとか呼ばれてるからね。総合統計して名前が分かっただけ』

そして、犬養軌跡はにこりと笑う。

『僕も君が気になっててね。つい君の周りを注視した。……その結果ね。デッキの構成も分かったし、クセも判明したし、ターン最初に多色カードをマナゾーンに置かないというプレイングも把握できた。君を再現するの、もうこれ以上のデータがいらないくらい容易になった』

……薄ら寒い空気が、虎聖の背筋を満たす。

『どうして、私の戦術をまねるような事を？』

『僕は見惚れ症で。今回は、思わず君に見惚れてしまったんだ。』

……だって、そのヘンテコな眼鏡、超おもしろいじゃん』

名前どころか。発言のひとつひとつすら、忘れたくても忘れられない呪縛を受けた。

2年前。出会った瞬間、彼らはそれぞれに見惚れた。

片や、その圧倒的なプレイングに。

片や、その変な格好に。

> i 1 6 9 2 0 — 1 4 7 7 <

「 つうわけでッ、《シルヴェスタ・V・ソード》でシールドを2枚ブレイクと行こうか!!」

《ベガ》の能力で増やしたぶんも含め、6枚から4枚へと減る坂姫虎聖のシールド。

手札に来たのはS・トリガーでもなければ、別段いま必要というわけでもない。微妙だ。いま《魔光王機デ・バウラ伯》を手札に加えたところで、マナに置く程度の先行きしか見えない。

「私のターン。《デーモン・ハンド》で《シルヴェスタ・V・ソード》を破壊しましょう。加えて、呪文を唱えたことにより手札の《ブラッディ・シャドウ》を無料召喚です！」

《魔光騎聖ブラッディ・シャドウ》を1体召喚。

……いまクリチャーを保有するのは虎聖のみ。凌駕は《ジェスタール・ペ》を進化元に使ってしまったことで、デイスアドバンテージ：-2だ。

だが表情は怯まない。《シルヴェスタ》の破壊も想定のうち……？

「ターン終了です！」

前のターンに、《シルヴェスタ》による3ドロウがあった。あの手札の内容は分からないが、油断できたものではない。青森凌駕の余裕はそこから生まれるのだろうか？

「OK、俺のターンだな……《パルピイ・ゴビー》を召喚だぜ。

こいつで山札を操作した上で、《青銅の鎧》召喚！」

凌駕のマナがひとつ増える。

やはり手札に「次」を用意していましたか……。

《爆裂大河シルヴェスタ・V・ソード》は、滅殺のための青森凌駕の切り札だろう。

だが、それに固執しないのが彼のプレイスタイル。



エースがやられようと、デュエルには次があるのだと、凌駕は理解している。

「私のターン 《未来設計図》で、山札から《無頼聖者スカイソード》を手札に。そして、《スカイソード》をそのまま召喚！」

《スカイソード》の能力により、再びシールドを5枚へ回復する。破られれば戻す。坂姫虎聖のスタイルは、基本的に『対応型』と言えるだろう。

環境の変化に応じ、自分の周囲を変えていく。相手が殴りかかるならば防御を。相手が退くならば深追いをせず準備を。

「じゃ、俺は《電腦大河バタフライ・ブランデ》召喚だ！ 連鎖発動で、さっき仕込んだデッキから《タラリラ・クロウラー》をバトルゾーンへ！」

おまけに《タラリラ・クロウラー》から連鎖！ 《幻緑の双月》をバトルゾーンへ！」

一度に3体ものクリーチャーを並べる。

防御の手薄な虎聖には、少し先行きの暗い展開だ。

「そっいや、さっきからやたらシールド増やしてくるなあ……。はは！ 分かってるぜ坂姫。おまえ、超次元ゾーンに《チャクラ》を忍ばせてるもんな。シールドが減っちゃ困るだろうよ」

虎聖の意図を見抜く凌駕。

「……… だったら何です。この状況で殴りかかってくるのですか？」

「……… そうさせてもらおうと思ってよ！ 《青銅の鎧》で攻撃！」

シールドを1枚ブレイク!!」

虎聖のシールドが1枚減る。

……そうか。と、虎聖は思った。

この青森凌駕は、自分と違うタイプの、いうならば『対抗型』だろうか。

周囲の変化を受け流す坂姫虎聖と、周囲の変化へ反逆する青森凌駕。

ならば、私は君に対応し。君を受け流してやるう。

「私のターン。《超次元ミカド・ホール》発動！ これで君の《青銅の鎧》を破壊します。

そして、超次元ゾーンから《時空の封殺ディアス Z》をバトルゾーンへ……！」

会場がわっと沸く。

巨大サイキック・クリーチャー、《ディアス Z》。坂姫虎聖の切り札であり、メインアタッカーである。

凌駕のクリーチャーは《電腦大河バタフライ・ブランド》《タラリラ・クロウラー》《パルピィ・ゴビー》《幻緑の双月》の、以上4体。

それに睨み合う坂姫虎聖のクリーチャーは《無頼聖者スカイソード》《魔光騎聖ブラッディ・シャドウ》、いま加えた《時空の封殺ディアス Z》の3体。

『クリーチャーの数が並んだ！ デュエルは中盤、展開合戦へ突入しているッ！ 先に攻め手を切り出してくるのはどちらかッ……！！ サイキック・クリーチャーを前に、全勝を収めている青森凌駕くんも、若干手詰まりを……』

「俺のターンで《超次元フェアリー・ホール》超動！」

会場がさらに燃え上がる。

一体となった声援は、そのサイキック・クリーチャーの名を唱和した。

「《時空の豪腕ジャパン》をバトルゾーンへ出すぜ！」

『手詰まり……じゃなかったああああ！！ 凌駕くん対抗する！』

サイキックを出されたならば、対抗して「こちらも」ッ！ これが彼の傾向か！！』

実況も次第に何を言っているのか分からなくなってきた場合。

「ついでに《斬込隊長マサト》を召喚してターン終わりだ。さ、そ  
うちのターンだぜ……！」

「……………これは、」

この状況。

凌駕のクリーチャーが、全部で6体。

そのうち1体は《時空の豪腕ジャパン》。そして、ジャパンの覚  
醒条件は……「ターンのはじめに、他に5体のクリーチャーがバト  
ルゾーンにあること」だ……！

「私のターン！ 《スカイソード》を《聖鎧亜クイーン・アルカデ  
イアス》に進化！ シールドをダブル・ブレイク！」

「通すぜ！ おいおい、ちょっと焦ったんじゃないか？ 《チャク  
ラ》の覚醒目指したいの分かるけど、ここで俺に手札与えていいの  
かよって話っ！

俺のターン！ ついに《ジャパン》の覚醒条件達成だぜ。《乱打

の覚醒者ジャパニカ《覚醒だー!!》」

うおお、と会場が唸る。

《乱打の覚醒者ジャパニカ》は、パワー17000のT・ブレイカー獣。加えて、ターンの終わりに山札からクリーチャーを1体、手札に持つてくることが出来る能力を持っている。

「さらに《アクア・ジエスターループ》召喚！ 連鎖は失敗だが…  
…パワー17000の《ジャパニカ》で、《クイーン・アルカディアス》を攻撃!!」

「《ブラッディ・シャドウ》でブロック」

パワー17000の巨拳に、ブロックが押し潰される。

何もかもを圧殺する力！

……青森凌駕のデッキは、切り札である《ジャパニカ》を覚醒させる手段として「連鎖」を選択したのだ。

「ターン終わり！ ここで、デッキからクリーチャーを1体、手札に加えるぜ！」

それは手段のひとつでしかないが、ここまでひとりひとりに異なる選択があるのは何故か。

デッキは無数の可能性から出来ている。たとえば《ジャパニカ》を覚醒させる方法ひとつにしても、それには無数の選択がある。

「選ぶのは、こいつ                    《サイバー・G・ホーガン》だ！」  
「ッ!!」

青森凌駕は、その無数のの中から、ただひとつを選んだ。

その理由はとても単純。ただ、それが自分に一番「合っていた」

から。

「そっちのターンだぜええ！ 坂姫いい！！」

どうして私の真似をしたのですか。

デュエリストがその戦術をとる理由は単純。ただ、それが自分に一番「合っていた」から。

なのに、その少年はその一番の理由を単純に無視する。

『どうしてって？』

『私の組んだデッキは、私の神経を基準に編まれたものです。それを、構築を真似たって、意味がないじゃないですか……！』  
『意味がないって？』

ヘッドフォンの少年、犬養軌跡は、笑顔のままきよんとする。

……これは笑顔をやささない人間の顔ではない。これは、笑顔が張り付いて剥がれない人間の貌である。

『たとえば、カード1枚1枚がそうです。何故そのカードを入れたのか？ どのようにそのカードを使うのか？ これらはすべて構築者に委ねられた理由です。だから構築者はカード1枚1枚の意味が分かっているし、何に使うべきなのかも分かる。』

けれど、ただ単純にレシピを真似ただけでは意味がありません。

……なぜなら、そこには無いからです。いえ、分からないからです。その「理由」が』

坂姫虎聖の述べる、当然の「理由」。

デッキの構築は、デュエリスト各々に委ねられた挑戦だ。どんなデッキを組むか。それにはどんなカードが必要か。それらのカードを、対戦中にどのような考えで使うべきなのか。それらを、構築者がすべて決定する。

でも。まったくの別人が、デッキの構築内容を真似ただけで使おうとしたって、それはただ同じカードを手に持っているだけに過ぎない。これが虎聖の理屈。

「……つまり、構築者にはひとつしか見えてないんじゃない？」  
「？」

漠然とした物言いをする、犬養軌跡。

「構築者の考えでデッキが組まれてるんでしょう？そこは僕もさんせーだよ。でも、じゃあそのデッキをそのまま別の人に渡したからって、その別の人はまったく理由無くカードを使ったりしないよね？」

「……」  
「デッキがそっくり誰かの手に渡ったとしても、その誰かは、自身の考えのもとプレイングをするはずだよ。おそらくは、構築者とはまったく違う意図で」

犬養軌跡の理屈も正しい。

「僕はそれ、面白いと思うよ。ひとつのデッキをいろんな人が使って、そこに何か、別の可能性を見出すことだってあるんじゃない？君も思っただんでしょ？僕のデュエル観ながら。ああ、あんな面白い方もあるんだ、って」

「……分かっていただけですか？」  
「え〜？カマかけたただだよ。読心者でもないのに分かるワケな

いじゃん。焦るなあ』

笑顔だけは異常に無邪気だった。

この少年が、何を思っただけでそんな事を 何を思っただけで、そんなデュエルの楽しみ方をするのかが理解できない。

しかし、虎聖は気づくのである。

この、犬養軌跡という少年は 少なからず、デュエルを楽しんでいることは事実なのだ、と。

漫画なんかでよくある「勝利」を重んじすぎて悪の軍団チツクになっただけのような、ああいう支離滅裂な連中とは違う。

『君とは、いい友人になれそうです』

『ありがたいけど、僕は遠くへ帰らなくちゃいけない。その時まで、僕のことを覚えててくれれば結構だよ。』

『さあ、大会を続けよう。お互い、決勝まで上れるといいね』

坂姫虎聖がその決勝で敗れた翌日。

犬養軌跡はその町を出た。

t o b e c o n t i n u e d .

**V S 東日本代表戦・決勝戦「3」(後書き)**

決着は次回へ持ち越し。

最近ブログに挑戦を始めました。お暇でしたら見ていってください！



## VS 東日本代表戦・決勝戦「4」（前書き）

この文章は実在するカードゲーム「デュエル・マスターズ」を主軸に置いた物語です。

なお、この物語はフィクションもいとこの作り話に過ぎません。それゆえ、実在する団体や地名、氏名年齢住所電番、公式大会などとは一切関係どころか縁もゆかりもございません。

## V S 東日本代表戦・決勝戦「4」

デュエル・マスターズDS デュアル・ソウル

「私の、ターン！」

その瞳が勝負を諦めない。

片眼鏡の奥に潜む目が、マナゾーンに灯る希望を見出しているのだ。

青森凌駕のクリーチャーは《乱打の覚醒者ジャパニカ》を筆頭とし、《アクア・ジエスタールーペ》《斬込隊長マサト》《電脳大河バタフライ・ブランデ》《タラリラ・クロウラー》《パルピィ・ゴビー》《幻緑の双月》の7体。

私の《時空の封殺ディアス Z》と《聖鎧亜クイーン・アルカディアス》で攻撃しても、凌駕の3枚のシールドを0にするだけ。

「……………」

虎聖のターン。

ターントップで引いたカードは《青銅の鎧》。

今この状況で役に立ちほしくない。虎聖はすぐにそれをマナゾーンに、置く……………」

「……？」

会場の奥で、”くすっ”と嘲う声が漏れる。

虎聖はその方角を振り返るも、声の主を目にすることはできない。会場の歓声に掻き消され、その嘲い声は耳に残らなかったものの、虎聖は確かに感じた。

自分を嘲う何者かの、存在感……。確実に、その者は存在する。

黒い衣装に全身を包んだ、季節に似合わぬ影。夏の空を拒むような影。

集中を乱してはいけない。テーブルを見る。私はこの状況を打開しなければ。

/

『同系対決になっちゃったね。頑張ろうね』  
『はい』

犬養軌跡との決戦は、虎聖のアタッカーが軌跡の《光牙忍ハヤブサマル》に碎かれ、直後の隙を突かれて敗北した。

犬養軌跡はこの一戦を、同系対決と称した。

同系どころかデッキの中身がまったく同じもの同士による決戦は、観客にはかなり異様に映ったものの、大会はそこそこの盛況とともに幕を下ろす。

大会を終えて。

2人はまだテーブルにいた。

『……こんな寂れた商店街になんの未練があるの？』  
『どういう意味ですか』

突然、犬養軌跡が間の抜けた質問を出した。

坂姫虎聖はあつけにとられる。突然、”なんの未練があるの？”などと問われても、会話に脈絡がなさすぎて答えかたが分からない。

『あ、ごめん。君みたいなプレイヤーは、もつと視線を外へ外へと向けていくべきだと思うんだ。なのにそれをしないってコトは、抜けきらない未練がこの商店街にあるってコトでしょ？ 違うの？』

少年は少年らしい動物のような目で、坂姫虎聖を見つめる。

ちなみに虎聖にしてみれば、とんだ思い違いだ。商店街に未練があるのではなく、そもそもこの外に何があるのか、魅力を感じたことすらなかった。

『私はここで、十分楽しませてもらっているの』  
『そういうんじゃないかって、地理的な「外」。県外へ挑戦しに行かないの？ って意味』  
『県外に出て、何の意味があるんです？ そこまでせずともいいじゃないですか』

虎聖が答えると、軌跡はうーんと考え込む。返す言葉もないようだ。が、虎聖の言葉はそんなに理解不能なものではなかったはず。

『カードが楽しいなら、とことん楽しまなきゃだめだよ』

そう言って、軌跡は席を立つ。

「ねえ、僕を追っかけてくれないかな」

「……そうやって、脈絡もなく話し始めるのをやめてください。君は常に、いくつも先から話し始める」

「癖だから。で、本題なんだけど、僕はこれからカードを楽しむため、日本を駆けずり回る」

「はあ」

「そして僕は、いつのまにか日本から世界へ足踏みを変える。そうになったら僕を追っかけて。　　そうしたほうが面白い」

……不気味なほど、中身の読めない会話である。

虎聖はそう感じた。自分のデッキを完全に模倣してしまう人物ということで、多少の興味を引かれていた。しかし、本当はこの少年と会話することは、あまり体にいいものではないんじゃないだろうか？ ……。

「ついでに、僕はこれからこの町を出て、どこか別の場所に登場する。だから、今の君と話すのはこれが最後ってこと」

「そうなのですか」

「だから最後にひとつ言っところかな。よく聞いてね？」

君

のデッキ、すっげーつまんなかったよ」

/

嘲笑われるのは苦手だ。

虎聖は、一瞬で頭が冷静になる。……彼は怒りに火がつくと、逆

に精神がクールダウンするタイプだ。

「……おい、どうかしたのか？」

凌駕が声を投げってくる。

「いいえ、何でも。気にしないでください。すぐに、ゲームを続けますので。」

手札から《ナヴァール》を召喚！」

虎聖の召喚した《天雷機士ナヴァール卿》は、マナゾーンから呪文を1枚、手札に戻す能力を持つ。

「私が戻す呪文はこれです。全体呪文、《ミリオン・スピア》！」

「……火だと？」

虎聖はマナカードを5枚タップ。

「《ミリオン・スピア》超動！ 敵の《ジエスタールペ》、《マサト》、《バタフライ・ブランデ》、《パルピィ・ゴビー》そして《幻緑の双月》を抹殺……！」

「ちっ……なんだよ火力呪文かよ。てつきり光・闇・自然の3色だと踏んでたんだがな」

「あなたのクリーチャーは《ジャパニカ》と《タラリラ・クロウラー》を残し、全滅。私の《天雷機士ナヴァール卿》もパワー3000なので、被害を免れ得ませんが……その程度は必要経費でしょうね」

「そうかよ。じゃあ《バタフライ・ブランデ》の転生連鎖発動！ この能力で、山札から《ソククン》をバトルゾーンへ！」

バトルゾーンが焼け野原になっているさなか、凌駕の山札からクリチャーが飛んでくる。

「……《ソンクン》？」

「知らないのかよ、《バタフライ・ブランデ》の『転生連鎖』だけ俺の《電脳大河バタフライ・ブランデ》が破壊された時、連鎖能力を発動する！」

凌駕は得意げに《バタフライ・ブランデ》をかざす。

「ああ、そんな事は”どちらでもいい”のですよ、青森凌駕……！」  
「ん？」

「ターン終了。ではこの時点で、私の《ディアス Z》が覚醒条件を満たした！」

虎聖が、手元に置かれた《時空の封殺ディアス Z》を、コストの大きいほうに裏返す。

《殲滅の覚醒者ディアボロス Z》。  
巨大な覚醒獣が立ち上がる。

「なんだと？」

「《ディアボロス Z》、覚醒！ パワーダウン5000が発動し、《ソンクン》と《タラリラ》を破壊！」

《殲滅の覚醒者ディアボロス Z》。相手のクリーチャー3体を除去することで覚醒条件が満たせ、覚醒すれば相手クリーチャーすべてのパワーを5000下げる。

つまり、凌駕はパワー5000以下のクリーチャーの召喚が封じられたも同然……！

「ってことかよ？ 小型を召喚しても、《ディアボロス》に消されちまうから意味がねえ……！」

「《ミリオン・スピア》で吹っ飛ばしたのが、うまく効いた形になりましたね……。さあ、そちらのターンですよ。」

「といっても、私の《クイーン・アルカディアス》で、あなたは多色呪文しか唱えられない。打開する確率はおよそ半分程度でしょうか？」

さらに、次の虎聖のターンになれば、《ディアボロス》のQ・ブレイカーで凌駕のシールドが0になり、《クイーン》の攻撃でトドメになる。

「……そういえば、あなたはオールバウンスを得意としていましたね。その手は使わないのですか？」

「あん？ なんだそりゃ。俺のターン！」

凌駕がカードを引く。

「……」

青森凌駕はオールバウンスを意識していない？

つまり、《アクア・ウェイブスター》や《超神星ネプチューン・シウトローム》などによるバウンスがメインではないということか。デッキタイプからなんとなく予想はしていましたが。

「だったら、俺のカードはこれだ！」

《ケロディ・フロッグ》召喚！」

しまった、と、虎聖の心を衝撃が掠める。



オールバウンスの事ばかりに気をとられていたが。それが青森凌駕のメインプレーではないのなら、

デュエル中、結果的にオールバウンスに近くなるほどの圧倒的バウンスを繰り返したということ？

「いくぜ、《ケロディ・フロッグ》の能力でディアボロスを手札へ戻す！」

「ならディアボロス・ゼータの『解除』を使います！ バウンスを無効にし、《時空の封殺ディアス Z》に裏返る！」

「だったら、《ディアボロス》の能力で破壊される《ケロディ・フロッグ》の能力”を発動する！ こいつで、もう一度《ディアス Z》をバウンスさせてもらおう！」

「そういうことかッ！！」

《時空の封殺ディアス Z》が、バトルゾーンから消え去った！

「そうか！ 《ケロディ・フロッグ》は出した時と破壊された時、両方で1回ずつ能力が使える……！」

「いまの、どついう事？ 柳くん」

鈴井の声に、柳が答える。

「《ディアボロス》の能力は、相手クリーチャーのパワーを5000下げること。そこにパワー5000の《ケロディ・フロッグ》を召喚しても、すぐに殺されてしまった。

でも、《ケロディ・フロッグ》の能力だけは使える、って知ってるでしょ？ だからまず、バトルゾーンに出した時の能力で《ディアボロス》を除去するんだ。

これで《ディアボロス》は《ディアス》になっちゃったけど、《

ケロディ・フロッグ》は破壊されてるでしょ？」

「うん。《ディアボロス》の能力で」

「で、次に、破壊された時の能力が、《ディアス》に対して発動できるとだ」

「……え、そうなの？」

「つまり、《ケロディ・フロッグ》を召喚したので、《ディアボロス》に破壊されつつ、能力を発動」

そして、破壊されたので、今度は《ディアス》に対して能力を発動」

こうすることで、凌駕は《殲滅の覚醒者ディアボロス Z》を、たった1枚のクリーチャーで除去したんだ……！」

「《ディアボロス Z》を、超次元ゾーンへ返還！！　これが、俺のトリック！　見たかよ！」

「あなたのデッキはマーシャル・タッチによる、リフォース（再利用）がメインの戦術。トリックの名は相応しいというわけですか」

「俺のターンは終了。《ジャパニカ》の能力で、俺は手札に《パルピィ・ゴビー》を加える！」

このとき、虎聖の中で強烈な予感がした。

燃えるような予感だ。

敵は勝負を決めにきている　！　脈絡も根拠もなく、そう感じた！

「私のターン！」

そうとも。青森凌駕のすべての「トリック」は、あの《パルピィ・ゴビー》によってタネを仕込まれた連鎖能力だ。

それを、もう一度仕掛けようとしている！

「させませんよ……！！ 《炎獄スマツシュ》で《ジャパニカ》を破壊！」

「なら、解除能力で《ジャパニカ》を《時空の豪腕ジャパン》に戻すぜ！」

「分かっていますよ。まだ、私のターンは終わらない。」

召喚！ 《GENJI・ゲンジXXダブルクロス》！！！」

観客が息を呑む！

「スピードアタッカー！ 《GENJI》と《クイーン・アルカディアス》で、青森凌駕のシールドを3枚ブレイク！」

とうとう、0枚になる凌駕のシールド。

シールドトリガーなし。

先に追い詰められたのは、K県代表、大将の青森凌駕。

「俺のターン！ ドローだ！」

「凌駕あ！ 負けるなー！」

「おうよ！ 手札から《青銅の鎧》を召喚し、《大勇者「ふたつ牙」》に進化！」

さらに、ブーストしたマナで《パルピィ・ゴビー》召喚！ デッキトップの順番を入れ替えるぜ！」

「やはり、何か企んでいますね……！！！」

一抹の不安。しかし、今はもうそんな事を気にかけている段階は過ぎた！

今ある手札のみが、信じることのできるカード！

「さあねえ！　いくぜ、《ふたつ牙》の攻撃！」

パワー8000の《大勇者「ふたつ牙」》をタップする。攻撃対象は、誰が見てももう分かる！

「《ゲンジ》を潰せ！　《ふたつ牙》！」

「くっ……………！！　私のターン！　ドロー！」

両者、ともに余裕のない勝負。

凌駕のシールドは0枚。虎聖のシールドは1枚。

凌駕のブロッカーは《パルピィ・ゴビー》。虎聖にブロッカーはいない。

互いに、防御力は拮抗している……………！！

ここへくると、今からは逃げ切り合戦だ。

どちらが防衛ラインを保ちながら、相手の防衛ラインを先に突破するか！

「《超次元ドラヴィタ・ホール》超動！」

動くのは虎聖。

虎聖は一瞬迷った後、超次元ゾーンからクリーチャーを引っ張り出す。

「《舞姫の覚醒者ユリア・マティーナ》をバトルゾーンに！」

「！」

《ユリア・マティーナ》は、ブロック時にシールドを1枚増やす。防御をさらに固めるつもりなのだ。

「さらに、《ドラヴィタ・ホール》で回収した《未来設計図》を使

い、手札に《魔刻の斬将オルゼキア》を加えます」

この時、虎聖は自分の引きの悪さに舌を巻いた。

せめて、せめて1枚でも《魔光騎聖ブラッディ・シャドウ》があれば……話は違ったものを！

「そして！ 《クイーン・アルカディアス》で凌駕にダイレクト・アタック！」

「させねーよ！ 《パルピィ・ゴビー》でブロック！」

凌駕の《パルピィ・ゴビー》が破壊され、ついに凌駕は防衛ラインを失った。

シールド0、ブロッカー0の境地！

「俺のターン！ ラスト・ドローだけ、虎聖！」

「ラスト？ ありえませぬね。私がカードを引くまでは、ラストにはなりえない！」

「はッ！ 実を言つとよ、俺いま結構ギリギリでさあ！ この手で勝てなきゃ終わりだなあ、なんて一丁前に緊張してんだぜ！」

「私も実を言つと、断崖絶壁ですかね！ 実を言いたくはないんですがね、なるべくは！ さあ、あなたのターンだ、凌駕！」

「ああ。今こそな。今こそ召喚するッ！ 俺のカードは《サイバー・G・ホーガン》！」

ラストカード。

これが、凌駕の召喚するラストクリーチャー。

「激流連鎖発動。パルピィで仕込んだクリーチャーを2体、バトルゾーンに出す！ まずは《幻緑の双月》！ そして、  
《爆裂大河シルヴェスタ・V・ソード》！」

「か、はッ……………!?!」

「こッ、ここで引いたのは進化クリチャー、《爆裂大河シルヴェスタ・V・ソード》!!! 《ホーガン》からの、よもやの進化! これは、……………これはまさかああ!!!」

「Last Trick!!! 《サイバー・G・ホーガン》を《シルヴェスタ・V・ソード》へ進化!” 召喚酔い解除”ッ!!! さらにッ、この《シルヴェスタ》の能力で、虎聖の《ユリア・マティーナ》を破壊!”

「!?!」

最後の防衛ラインを、失った。

虎聖のブロッカーは消滅。

ミスだ。防御力を上乗せすることばかりを考えていたために

……………!

《ユリア・マティーナ》を出したあの時、別のカードを出していればよかったのだ……………切り札、《時空の雷龍チャクラ》を! そうすれば、《シルヴェスタ》の除去には引つかからなかった!

「おまえのシールドはラスト1枚。俺の、《シルヴェスタ》と《ジヤパン》、《ふたつ牙》の攻撃で終わりだぜッ!”

「くっ……………うっうっ!」

虎聖は、たった1枚残された手札を握る。

凌駕のmanaはいま尽きた。

今、お互いの手にするカードが、すべての戦力。ラストバトル。

最後の交戦。

「まずは《時空の豪腕ジャパン》で、虎聖のシールドをブレイク！」  
先じて、《ジャパン》が突撃をかける。  
ここで虎聖は最後の手札を切った。

「手札から《ハンゾウ》をニンジャ・ストライクし、《ジャパン》を破壊します！」

その突撃を、シノビによる防御でいなす！  
そう、虎聖の防衛ラインはシールドとブロッカーだけではない。  
手札にも握られている！

「まだ手はあるぜ、《ふたつ牙》でシールドをブレイクだ！ ラストシールド、もらっぜー！」

虎聖の防御もここまで。  
手札は尽き、ブロッカーもない。最後のシールドを破られ、……  
身を守るものがなくなった！

「う……………！」  
「さあいくぜ、最後の」

虎聖はシールドカードを手札に加える。  
そのカードを見る。

その瞬間、いつかの思い出がフラッシュバック。

『君のデッキ、すっげーつまんなかったよ』

「《シルヴェスタ》で、虎聖をダイレクト・アタック！ これで、トドメだ」

虎聖は。

最後に手札に加わった、シールドカードを手札から切る。

「《光牙忍ハヤブサマル》でそれをブロック！！」

シールド0の虎聖に残された、最後のカードはまたもシノビ。凌駕の最終突撃を、《光牙忍ハヤブサマル》が凌いだ……！！  
そして。

「な……………」

凌駕の手が、尽きる。

クリーチャー3体は、すべて、殴りきった。

……そこへ、《ハヤブサマル》が飛んできたのだ。

この瞬間、声援は二分化された。最後のシノビに喚起を上げる声、そして凌駕の敗北に落胆する声。

「りよ、凌駕……………」

「……凌駕くん……………」

「……………」

「まだだー！！」

と、その中で。



凌駕の声だけが、違った。  
虎聖もそちらを見やる。もう、攻撃は終わったはずなのだ。  
しかし、

「俺の《シルヴェスタ・V・ソード》が、《ハヤブサマル》にブロ  
ックされた瞬間！」

今度は、凌駕が手札を切る。

「ニンジャ・ストライク発動！ 《斬隠オロチ》！！」

《斬隠オロチ》……ニンジャ・ストライク7を備える、水のシノ  
ビクリーチャー。

「《斬隠オロチ》の能力で、俺の《シルヴェスタ》を山札の一番下  
に送る。そして、山札の上からクリーチャーが出るまでめぐり、

そいつを、すぐにバトルゾーンに出せる！」

「い……いまさら、何を出そうが」

凌駕は、デッキの一番上をめくる。  
知っている。

このカードが何なのか。

凌駕は前のターンに、《パルピィ・ゴビー》でトリックを仕掛  
けてあったのだから……！

「《オロチ》の能力で、山札の上から《サイバー・T・クラウン》  
をバトルゾーンへ！！」

さらに現れるクリーチャー。

コスト7、パワー7000の、連鎖持ちサイバー・コマンド！

「まさか……また、連鎖を繋ぐ気ですかッ!!」

「悪いな。さつきは嘘ついたぜ。これが俺の、本当のLast Trick!!」

《T・クラウン》の連鎖発動! 山札の上から、《大勇者「ふたつ牙」》をバトルゾーンへ!! そしてこいつを、さつき《ホーガン》の激流連鎖で出して放置していた、《幻緑の双月》に乗せて進化するッ!!」

このターン、もう一度《大勇者「ふたつ牙」》が登場した。

そして、これによって”召喚酔い”が消える。

つまり?

「これで俺には、攻撃できるクリーチャーがもう1体増えた!!」

虎聖! おまえにはもうシールドも、ブロッカーも! 手札も無え!!

ラスト攻撃! 2体目の《大勇者「ふたつ牙」》で、虎聖をダイレクト・アタック!! トドメだ!!」

負け

……

た……

……。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
.

## V S 東日本代表戦・決勝戦「4」（後書き）

東日本代表戦・決勝戦、閉幕。  
勝者はK県代表チームの3人。

さて、その頃、もうひとりのK県個人代表・楽絵紫音は何をしていたでしょう。続きます。

\*\*\*

Blog:「Twitter」

【<http://twitteright.blog.shinobi.jp/>】

デュエル・マスターズについて小気味よく喋ったり。  
ブログもよろしく！

## V S 東日本代表戦・個人決勝戦（前書き）

この文章は実在するカードゲーム「デュエル・マスターズ」を主軸に置いた物語です。

なので、デュエル・マスターズカードゲームについての知識をある程度備えている方を対象に描いております。

よって、文章中にいちいちクリチャーの解説などは載らない予定です。そこをご理解いただける方のみ、どうぞお読み進めくださいませ。

なお、この物語はフィクションもいいとこの作り話に過ぎません。それゆえ、実在する団体や地名、氏名年齢住所電番、公式大会などとは一切関係どころか縁もゆかりもございません。

ついでに、シャークトレードは誰もがやってはいけないことです。ルールとマナーを守って楽しくデュエマしようぜ！

## V S 東日本代表戦・個人決勝戦

デュエル・マスターズDS デュアル・ソウル

K県代表vs、D県代表による団体戦決勝よりも少し前。

「いけ！ 《ヤヌスグレンオー》でシールドをブレイクっ！」

こちらは個人代表戦。

K県個人代表・楽絵紫音を相手に、火の速攻を繰り返すF県代表の少女。

傍目には天真爛漫。

カードを使わせれば、もっと天真爛漫。というか暴れる子猫だった。

「《アクア・スーパーエメラル》でブロック」

さすがの紫音も手を焼く猛攻だ。

紫音の場には、シールドトリガーで召喚した《ヤミノサザン》が1体。マナもろくに貯まっていない。

「じゃあ、2体目の《ヤヌスグレンオー》でシールドブレイク！  
さらに《エグゼドライブ》でもう1枚もらっつ！」

「っ」

紫音のシールドはゼロ。



同時に、彼女は個人決勝戦へとステージを進めた。

「ぎゃ……逆転されるなんてえ……」

「あのな。勝負前になんだかんだと肩書きを出す奴は、すべからく負ける約束なんだとさ」

(まあ、ソースは凌駕だから信用できたものじゃあないけどな)

……この大会の目玉は、あくまで団体戦。

数年前から取り入れられた、チームバトルという概念が軌道に乗り出した時代。今、楽絵紫音を始めたプレイヤーたちがあいまみえるのは、そんな流行のスタート地点なのである。

なので従来の個人戦よりも、団体戦のほうに盛り上がりは集まる。確かに「たつたひとつ」の勝利を奪いあう、個人戦の魅力が衰えたわけではない。しかし、チーム戦という、大衆にウケのよいスポーツじみたゲーム形式が人気を呼んでいるのである。

そんな背景もあり、メインイベントである団体戦よりは若干盛り下がる雰囲気のほか、ようやく個人代表同士による決勝戦が行われようとしている。

紫音に緊張はない。

観客の目はほとんど、準決勝を争う団体メンバーに向けられている。

そんなムードの中でも、個人戦に目を惹かれる数名の観客たちも存在する。

その眼が見ている。

その眼を見つめ返し、紫音は思いを吐き出すように、呟く。

「 やつと見つけたぞ。『デュエリスト：ソーサラー』」



「一美おねえちゃんー！！！」  
「ねえちゃんー！！！」  
「あ……あなたたち」

個人戦準決勝で敗れた夢坂一美。

会場を去る彼女のもとへ、3人の少女が元気に（？）駆け寄ってきた。なにやらほほえましい（？）姉妹愛あふれるシーンの様子。

「二葉！ 三香！ ……あれ、四保は？」  
「あつちでトレードやってる」  
「ああそう」

「一美お姉ちゃん！ お姉ちゃんのデュエルすごかったよう絶対負けてなかったもん」

「こ、こら三香！ ひつつくな！ 泣き顔かよ！」  
「あつはつはつはアレは反則的だよね」。《エターナルゲート》  
でシールドぶつ飛ばすとか」

「あたしが油断してただけよ二葉。今度は絶対勝つんだから」  
「だよねお姉ちゃん！？ そうだよね……」  
「っていうかあなたたち、あたしの試合見てたの！？ そっちの試合はどうしたのよ！」

「あー、わたしら一回戦で負けたからヒマしてたんだよ」  
「一落ちかよ！ もっと持ちなさいよ！ それでも夢坂家四姉妹」

「おこらないですよお次は頑張るからあつ、お姉ちゃんー！！！」

「怒ってないわよ！ ッていうかひつつくなつつつの三香ー！」「  
「いや、わたしの《アルメリック》も頑張ったんだよ。けどねー  
やっぱ《スーパー・スパーク》は苦手って感じ？ あっはっはー！」「  
「笑うのかよ！ 努力しなさい二葉ー！」「  
「……………かずねえ」  
「うわっっ！？ 四保！ 気配を發揮しなさい！」「  
「トレードしてきたよ、かずねえ。見て……………」  
「ちょっとは試合の疲れを労わるとか、そういう気遣い見せなさい  
よ四保。  
それで、何をゲットしたわけ？」「  
四保は目をキラキラさせながら、  
「光ってる。きれい」

自慢したそうに《キング・オリオン》を見せた。

「……………確かに、綺麗だけど……………」  
「なーんか、時代遅れなカードだね。あっはっは」  
「……………で、あんたは何を渡したの」  
「《パーフェクト・ギヤラクシー》と《ゲンジ》（きりっ）  
「「シャークされてんじゃねーよ！」「」

そんな裏舞台がありました。

「あ、あ、あ」

お互いに、持ち寄るカードは48枚。  
山札と超次元ゾーンのフルセット。

「懐かしい顔ね。紫音」

「すすりん 鈴蘭。おまえこの会場で何をしている」

長い、長い黒髪。

スズランとは独特の形状をした花をつける多年草のこと。

夏も間近のころに、黒い服で体を隠し、黒い髪を伸ばす彼女とは、まったく正反対の容姿をさす。

「何を、ってそんな……私はT県代表よ？ 理由なんてそれだけよ

……馬鹿ね」

「県の代表だから？ それはすべての代表選手がそうだろうな。だが、私が聞きたいのは何故よりもよって『おまえ』がいるんだ、という点だぞ！」

「スズランは『純粹』だからよ紫音。私は純粹に、カードゲームが好きなのよ……だから、大会に出て何が変なの？」

「おまえは純粹に、嘘が好きなだけだろう。真っ黒で、美しいが美しくない。幸福でないけれど幸福。花のスズランに喧嘩売ってるよな存在だ」

「ひどい言われよう……。でも、言い返さないわ、紫音。

カードで、語りましょう」

黒いスズランは、ひそやかに笑った。

「『フランク』でコストを軽減し、『シークレット・クロックタワー』で山札操作！ さらに、『ミカド・ホール』で『時空の賢者ラ

ンブル』をバトルゾーンに出す！」

「素晴らしいわ紫音。」

じゃ、《執拗なる鎧巫の牢獄》を撃ち、《ランブル》とあなたの手札1枚を除去するわね」

「……この……っ！」

紫音の連携技は正しい。

《ランブル》の覚醒条件を満たすために、《シークレット・クロツクタワー》でデッキボトムを固定。

コスト軽減能力を持つ《氷牙フランツ二世》があるので、これを5マナで実行できる。

だが肝心の《ランブル》が消されては意味が無い。

「あら、あら……さつきから、調子がよくないようね？」

「ちょこまか動く奴がいるからな……！ 私のターンで《アクア・スーパージェムラル》を召喚！」

「私は《スペース・クロウラー》を召喚。」

じゃ、引いたカードから《母なる紋章》を使い      バトルゾーンにある《ヴァルチャー》と、マナゾーンの《ロマネスク》を交換するわ」

《龍仙ロマネスク》の能力により、大量のマナを作る鈴蘭。

そのマナ差は歴然。

「有利有利。さあ、紫音のターンよ」

「私のターン！ 《フランツ》を《エンペラー・マルコ》に進化させ、カードを3枚ドロウする！」

「じゃあ私も……《トリプル・ブレイン》で、カードを3枚引くわ。《フェアリー・ミラクル》もおまけで唱えておこうかしら？」

鈴蘭はマナを2つ置く。

特定のデッキでしか使用できない呪文、《フェアリー・ミラクル》。もう、鈴蘭のデッキ内容は明瞭であり。

「5色コントロール……！ しかも、」

マナゾーンを見るに超次元デッキ。

紫音は焦燥する。

基本的に。5色との対決は、ターンを重ねるごとに色の少ないデッキが不利になる……！！

この全色使用デッキこそ、鈴蘭が『デュエリスト：ソーサラー』と称号付けられる所以だ。

「《オルゼキア》、召喚！ そして召喚直後に自爆させ、鈴蘭のクリチャーを2体奪う！」

「私は《ロードリエス》、召喚よ。おまけにドラヴィタ・ホールを使って、墓地の《母なる紋章》を回収しておくわ。

さあ、超次元ゾーンから《時空の不滅ギャラクシー》をバトルゾーンへ！」

「不滅……ギャラクシー！」

除去耐性のあるサイキック・クリーチャー、《時空の不滅ギャラクシー》。

まずい。

紫音は感じる。

自分が追い込まれていく、感覚。

「《バイス・ホール》！」

……私はおまえに飲み込まれはしない、鈴蘭！ 超次元ゾーンから《ディアス Z》！」

「あら、あら……せつかくの紋章が、捨てさせられちゃったわねえ。私のターン。《魂と記憶の盾》で《ディアス Z》を除去。……さあ……紫音………

もつと、もつと戦って?」

鈴蘭は何か陶酔するようじ。

何かを信仰する信者の姿で、両の手を広げ、紫音を歓迎する。

紫音のターン。

「《魔光帝フェルナンドV E E世》、召喚!」

「私は《リフレクティング・レイ》を唱えるわ。これで墓地の、《母なる紋章》を回収。

ここですぐに紋章を唱えて、バトルゾーンにある《ロマネスク》をマナに置き、マナゾーンにある《パーフェクト・ギャラクシー》と交換するわね」

とうとう本家「ギャラクシー」も登場。

紫音の状況は、淡々と悪化する。

バトルゾーンにある鈴蘭のクリーチャーは、《不滅の精霊パーフェクト・ギャラクシー》と《時空の不滅ギャラクシー》、《知識の精霊ロードリエス》。

紫音はこれを、《フェルナンド》と《エンペラー・マルコ》だけで打破しなければならない。

「負けるか!! 《インフェルノ・サイン》で、墓地の《オルゼキア》を再びバトルゾーンに出す!

そして自爆! さあ、鈴蘭のクリーチャーを2体、墓地に置け!」  
「馬鹿ね。私が選ぶのは《パーフェクト・ギャラクシー》と、《時空の不滅ギャラクシー》。でも、《パーフェクト・ギャラクシー》はバトルゾーンを離れないわ。

おまけに、《不滅ギヤラクシー》は《撃滅の覚醒者キング・オブ・ギヤラクシー》に覚醒！ パワーが11500になり、味方にブロッカーを付属させる。

ね、何をしても無駄……………。無駄よ、紫音」

「　　ッ！！」

無駄、という一言が、紫音の心に強く反響する。

怒りにあふれ、テーブルを殴りつけたような衝動に襲われる。

………… スズランの花言葉は「純粹」？　じゃあ、鈴蘭の人間言葉はアレか、「不純」か。本当に、鈴蘭はスズランに喧嘩を売っているんじゃないだろうか。

「《フェルナンド》で《パーフェクト・ギヤラクシー》のシールドを狙う！　さらに《フェルナンド》の能力で、《ロードリエス》を破壊！」

「《パーフェクト・ギヤラクシー》でブロック」

「ならば《エンペラー・マルコ》で《ギヤラクシー》のシールドを狙う！　これでシールド・フォースを解除！

ターン終了だ！」

「……………」

鈴蘭はカードを1枚引く。

………… 眼が、どこか泳いでいる。

対戦相手の紫音を捉えていない。鈴蘭が見ているのは、どこか、

向こう　　？

「馬鹿な人ね」

「………… 何がだ」

「ああ、気にしないで………… 紫音のことじゃないわ。

私は《超次元ボルシャック・ホール》を唱えて、《マティーニ》

と《時空の喧嘩屋キル》をバトルゾーンに出す。そして、《キング・オブ・ギャラクシー》で《フェルナンド》を攻撃するわ」「  
「なら《威牙忍ヤミノザンジ》でパワーを2000下げ、《フェルナンド》で返り討ちにする！」

紫音の《フェルナンド》が、パワー9500に下がった《キング・オブ・ギャラクシー》を破壊する。

紫音は、攻撃されることを読んだ上で、前のターンに《フェルナンド》で攻撃したのだ。手札に《ヤミノザンジ》があることを利用したのである。

「なら《パーフェクト・ギャラクシー》で《エンペラー・マルコ》を倒すわ。これでああなたの手駒は、《フェルナンド》だけ……………」  
「私のターンで、《ヤミノザン》召喚！ 鈴蘭のサイキック・クリチャー、《キル》と《マティーニ》を全滅させる！」  
そして《フェルナンド》で《パーフェクト・ギャラクシー》を攻撃！」

鈴蘭のクリチャーがいなくなる。

紫音が巻き返しているのだ……………！

「よし……………」

勝利の光は、わずかに紫音を照らし始めた。

(……………願うなら、これが)

これが、一時の日差しであらんことを。

「……………だらけたい勝負ね、紫音」



「！」

鈴蘭が、急にとんでもない事を言い出した。

「もっと楽しいことをしましょうよ、紫音。こんな小さなカード遊  
びの決勝戦なんかより、ずっと……そう、たとえば『組合』の  
皆と一緒に、とかね？」

「鈴蘭、おまえ……そのカード遊びの会場に来てまで、何を言  
い出す？」

怒りと違和感で、紫音の心はいっぱいだ。

その顔を見て、鈴蘭はとてもうれしそうに、

「あなた、つまらないのよ紫音。東日本？ 西日本？ 小さな規模  
で争っているのね？」

あなたより、あの犬養軌跡のほうがよっぽど、楽しいことを狙っ  
ているわよ？ うっふふふ……！！」

犬養軌跡の名を出した瞬間、鈴蘭の目が少し濁った。

邪悪に光る黒い瞳。そこには、鈴蘭の本性が宿っているように見  
えた。

「……………鈴蘭。おまえの目当ては……………凌駕か？」

「青森凌駕なんて眼中になかったわ、ごめんなさい。私はね……………

…ただ、紫音に会いたくて……………」

「戯言、戯言。さつきから鬱陶しい。御託よりも聞きたい。おまえ  
は、さつきからどこを見ているんだ！」

「別にどこも？ 私の目には今も、あなたが映ってるわよ。紫音…  
……………」

返事は戯言だった。  
ハアとひとつ、ため息をもらす紫音。

「D県代表に、何か用事か？ 鈴蘭」

「……………何が？？」

「『？』じゃない。さつきから鈴蘭の目線は、あつちばかりだ。D県に何か用があるんだろう」

「用は無いわ。気になるだけよ。……………なんたって、『組合』の新人がひとり、あそこで頑張ってるんだから」

「な、……………？？」

ずどん。

……………揺れるような音を立てて、紫音の心に爆弾が落ちる。

「トーナメント表を見たけれど、D県の決勝の相手って、K県なんですってね……………？ あら、あら？ あなたの大切な『凌駕』くんの所属、K県じゃなかったかしら……………」

「鈴蘭。おまえのターンだ」

「焦らないでね紫音。どうせこんな、個人戦の決勝なんて……………実況だって見ちゃいないわ。正直、『遅延行為』なんてクソくらえ！  
うっふっふっふっふ！」

「貴様……………！！！」

「あら、睨まないでね。」

怖いあなたに睨まれたくないから……………《超次元ガード・ホール》で《フェルナンド》をシールドに送るわ」

紫音の唯一のクリーチャー、《フェルナンド》をシールド送りにする凶悪呪文。

「そして。超次元ゾーンから《ギャラクシー》！」

再び……現れる、《不滅ギャラクシー》！

「……青森凌駕。思い出したわ……ええ、あなたのお陰よ紫音。

さあ、あなたの想い人が待ってるわ？ あなたが彼に興味ないのなら、私が貰っちゃおうかしら……あわよくば組合に連れ帰って、いじめてみたいわ。うっふふふ……ほら、『昔のように』」

ぶちり。

「貴ッ様ああ〜………！！」

紫音のターン。

紫音が唱えたのは《バイス・ホール》。

その呪文で 超次元ゾーンから《時空の邪眼ロマノフズ》！

>i18870—1477<

「あら、あら……？」

「墓地にある呪文は、これで10枚。次のターンに覚醒させ、一気に……！！」

一気に、勝ちに繋ぐ。

紫音の手札に隠されている超次元呪文を連打し、サイキック・クリチャーを再展開すれば、鈴蘭であろうと捌ききれない……！！

「 ああ、もうあなたはいいわ。紫音」

直面する鈴蘭の表情は、優しい。

「……………」

「ほら、《バイス・ホール》の能力で、私の手札を1枚捨てさせるんでしょ？」

「ああ。手札を見せろ、鈴蘭」

鈴蘭が手札を開く。

「さあ、どれでもどうぞ？ うっふふふ……………」

「おまえ。最初から……………」

紫音が選んだのは《超次元ドラヴィタ・ホール》。

そう……………これがある限り。

これと「あれ」が手札に揃っている限り。

何を捨てようと結果は変わらないと、紫音は瞬時に理解に至った……………！

「私のターンね。……………ほら、よく言っじゃない。

次の、ターンとか。

言ってる、時点で。

遅いのよ、紫音。

手札から《母なる星域》。これで《不滅ギャラクシー》を《キング・オブ・ギャラクシー》に覚醒。

さらにその《キング・オブ・ギャラクシー》に、マナゾーンにある《悪魔神王バルカディアス》を重ねて進化する！」

《悪魔神王バルカディアス》の召喚達成。

この瞬間、バトルゾーンのクリーチャーが、《バルカディアス》を除いてすべて抹殺される。

紫音の《ロマノフズ》が超次元ゾーンへ送還される。  
そして、もう二度と超次元ゾーンから現れることはない。

「……………」

紫音は《バルカディアス》によって、呪文を握りつぶされているから……………！

「《星域》を捨てれば、《ドラヴィタ・ホール》で回収できる。《ドラヴィタ・ホール》を捨てても、そのまま《星域》が撃てる。あなたが撃つべきは《ロスト・ソウル》だったわ、紫音。いつものあなたからは考えられない判断ミスだけれど、何か、気に障ることもあったの？」

《バルカディアス》が出た時点で、勝負はあらかた決まっているけれど、紫音の目がゲームを捨てていない。手札にある、《執拗なる鎧巫の牢獄》をマナゾーンに置く。呪文が使えない今、手札にある呪文は紙切れだ。

「《フランツ》召喚！ ターン終了だ、鈴蘭！」

「私のターン。《悪魔神王バルカディアス》進化。 《聖霊王アルファディオス》召喚。」

このクリーチャーで、紫音のシールドを3枚ブレイク」

シールドトリガー、《アクア・サーファー》が封殺される。

《アルファディオス》は光以外のカードの使用を許さない、絶対の勝利の導き手。

「あら、私には他にクリーチャーがないわね。あなたのターンよ紫音」

デッキに光のない紫音は、突破することができない。

残りシールド4枚の鈴蘭に対し、紫音の殴り手は《氷牙フランチⅠ世》1体のみ。つまり、勝利まで最低5ターンを要する。

不可能。

紫音の手札とデッキから光以外のカードを取り除けば、残されるのがバトルゾーンにある《フランチ》のみ。

「じゃあね、紫音。

何もできず、死になさい」

「……………」

加納鈴蘭。個人戦優勝決定。

東日本代表選手として日本一決定戦へ足を進めるが、彼女はそれを辞退するとの意向を

「へえ、じゃあデュエマを始めたのって、最近なんだね」

「おうよ。町歩いてただけだよ。目的とかそんなのない、ただブラブラ歩くだけ、みたいな。」

そんな時にさ見つけたんだよ、髪の毛黄色くてめっちゃかわいい子！なんか困ってるみたいだよ、こう、ちょっとお近づきになりてえなってるって声かけたんだ」

「で、それが彼女だったの？」

「ああ。月小路だった。俺がさ、なんか困ってるの？ って聞いたんですよ、」

『あ、ねえキミ！ デュエマできる？ デュエマ！』

『は？ まー、ガキの頃ちよつと……』

『じゃあ、あゆなとタッグ組んで大会出よう！ パートナーみつかなくなつて！ ほら行くこう！』

『ちよ、ちよつと待てあんた！ カードなんて俺いま持ってねえし』

『だつたらあゆなの貸したげるから！ 来て、始まつちやうよ！』

「……で、想い人からカード手渡されて。同時に大会は始まつて

俺ん中ではラヴが始まつたつて感じだな」

「その大会はどうなつたの？」

「俺がど素人だったもんで、一回戦負けだよ。俺は一応謝つたんだけどよ、『なんで謝るの？ 楽しかったよ！』なんて言ってくれるもんでさ。あー、最高にかわいいぜあいつ」

「ふーん。いいなあ、なんかロマンチックだ」

「ま、それ以来2人でデュエマするようになって。月小路は、俺の名前をキラって呼んでんだ。あ、俺の名前、帆積吉良秋っていうんだけどよ、月小路が呼びづらいつていうもんだから。」

……それは置いて。あんたはどうなんだよ、柳くんよ？ 誰かに惚れてるって顔してるじゃないか」

「え、ええ！？ ぼ、僕が誰に？」

「なーんだよ、自分では気づいてない系か。お先長いな、頑張れよ！」

「な、何のこと？？」

大きく笑う吉良秋と、何がなんだか分かってない柳。団体戦終了。

優勝チームのリーダーである柳は、優勝商品であるトロフィーと、プロモーションカードを受け取ったりしていた。そこでたまたま顔を鉢合わせたD県代表の帆積と、うっかり話し込んでいた流れである。

「帆積サン。準優勝のトロフィーが放置されていましたよ。手放さないでくださいと、あれほど……！」

そこに、プロモーションカードと銀のトロフィーを手にした、D県リーダーの坂姫虎聖がやってきた。

「わりいわりに坂姫。こちらの柳くんと仲良くなってよ。だろ？」

「う、うんまあ」

「そうですね、それはご迷惑を」

虎聖が柳に頭を下げる。

「おい坂姫、俺と仲良くなったら迷惑って言ってるふうに聞こえるんだけど」

「さあどうでしょう。それより、月小路サンはどこに？」

「ん？ ああ、そういや見ないな。トイレじゃねーの」



「……あ、鈴井さんだ」

柳は、トイレの方向からやってくる鈴井を見つけた。

「おかえり鈴井さん。そつちに月小路さん、いなかった？」

「え……？ 知らないよ」

鈴井の返事を聞いた吉良秋が小首を傾げる。

「んん？ じゃあどこ行つちまったんだ、あいつ」

「すぐ戻ってくるでしょう。気まぐれ屋の月小路サンの事です、どうせ付近の自販機で休憩でもしてるんでしょう」

「あー、ありうるな」

「……って、そういえばさつきから凌駕もないし。田所もどこ消えたんだ？」

「あ、すみません、俺ここにいますよ」

柳の後ろから声がする。

「いつの間に！ ってか、どこ行ってたのさ。僕らが決勝戦やってる時からいなかったし、準決勝の時もサイドにいなかっただろ」

「そこらへんでトレードしましたよ。やっぱ大会ってだけあって、結構資産もってるっすね、みんな」

いつも表情を変えない田所が、珍しく満足そうにしている。

……というか、肌つやが若干増している。

「みんなの応援してくれよ……何をゲットしたんだ？」

「まあ、いろいろありますよ。中でも大収穫だったのが《パーフェクト・ギャラクシー》と、《ゲンジ》っすね」

「豪華だなあ。何と交換したんだ？」

「《キング・オリオン》っす」

「シャークしてんじゃねーよ！」

「　　なんだよ、あんたら」

青森凌駕の表情は余裕。

基本的に、挑戦者を歓迎する性格をしている凌駕にとって、壁際に追い詰められるのはまさしく上等。

だから、基本的に目の前の人物に対しても、余裕の態度で歓迎する。

ただ若干、今回は事情が違う。

なんだよ、あんたら。と凌駕は問いかけるが、凌駕は目の前の人物の名前を知っているし、素性も知っている。

つい、さっきまで。凌駕と、テーブルを挟んだ向かい側にいたのだから……。

「聞かなくても、分かるでしょう？」

黒い影が答える。夏のころに、肌を黒い服で覆う影。

凌駕を会場外に呼び出し、あざ笑うように凌駕を追い詰め、手下をひとり連れて、やはり、あざ笑う。

黒い影の名前は加納鈴蘭。

そして、もうひとりいる、黒い影。

黒いコート。蒸し暑くはないのか、と凌駕が冗談まじりに問いかけるも、その少女はそれを無視して、凌駕の最初の問いに答える。

「組合の者です」

黄色い髪の内から、大きな目を覗かせ、微笑む声。

鈴蘭が連れ歩く『組合』の新人。

月小路あゆなの声。

t o b e c o n t i n u e d .

## V S裏方（前書き）

この文章は実在するカードゲーム「デュエル・マスターズ」を主軸に置いた物語です。

なので、デュエル・マスターズカードゲームについての知識をある程度備えている方を対象に描いております。

よって、文章中にいちいちクリチャーの解説などは載らない予定です。そこをご理解いただける方のみ、どうぞお読み進めくださいませ。

なお、この物語はフィクションもいとこの作り話に過ぎません。それゆえ、実在する団体や地名、氏名年齢住所電番、公式大会などとは一切関係どころか縁もゆかりもございません。

## V S 裏方

デュエル・マスターズDS デュアル・ソウル

「……紆余曲折あったものの、それは過程にすぎません。結果という形に当て嵌めることに成功したのは、確かな、私たちの功績といえましょう」

以前に聞いたものとまったく違う口調で、月小路あゆなが言葉を並べだす。

凌駕は少なくとも、彼女に 陽気な、若干騒々しいくらいイメージを抱いていたが、目の前の彼女にはそれが微塵もない。

その事実が違和感となって襲ってくる。

違和ではなく、不和に近いか。

まるで性格という仮面を張り替えているかのように、月小路あゆなは人格を不和にする。

「  
」

青森凌駕はこれを無視できなかった。

若者病の走りだと思つように努めても、気になるものは気になる。以前にも凌駕は、このように突如変わり果てた人間と出会った経歴があるのだから。

ただの人間ではなく。  
友人とまで慕い合ったはずの、高月聖夜という少年と。

「……結果的に成功した、ってコトは。俺たちが優勝するよう仕向けるのが、おまえら『組合』の目的だったわけ？」

何気なく投げる凌駕の問い。

頬に、深窓の令嬢の浮かべる笑みを貼り付け、月小路あゆなは返答する。

「具体的には違います。あなたたちが勝ち、楽絵紫音はここで脱落。隅々まで図り尽くした果ての今を、我々は得た」

「紫音ちゃんを皆が怖がるから私が来てあげたのに、あの子にはガツカリね。……ねえ凌駕くん？ そう思わない？ あんなにもアツサリ消えちゃって」

鈴蘭が嫌らしい笑みを高らかに掲げる。

凌駕は睨み返したりもせず、肩をすくめながら返答した。

「まあ、俺もアイツがこんな簡単に落ちるなんて思っちゃなかったけど」

「あら意外。てつきり紫音を庇うと思っていたわ？ だってあなたたち仲がいいもの、”昔から”」

「……………あんたも調子は変わんねえみたいだよな。鈴蘭さんよ。そんなテンションじゃ、紫音はたぶん楽しくなかってなかっただろうなあ」

凌駕の声のトーンが変わる。

表情や声質、呼吸を参考にして、その人の感情を読み取る技術があり、鈴蘭はそれを体得している。

多様な言葉で人の心の外壁をえぐり、感情を暴くのが得意なのだ。だから分かる。

凌駕の感情はゆらぎはじめている。

「ああ、怖い怖い。紫音が負けたからって、私を悪いと責めたてるの？ 野蛮な行いなんて、あなたには似合わないわ」

「？ そんなつもりはねえなあ。あんたと紫音はちゃんとデュエマで勝負したし、どう勝ち負けついたってしょうがねーじゃん」

「相変わらず、そういう処の線引きはしっかりしてるのね。……なら、私たちの何が、そんなに不服なの？ 凌駕くん」

決まってるんだろ？ と、凌駕の一言。

それはとても重い。

「おまえ。おまえが悪い」

「……………？」

凌駕は、鈴蘭の前に立つ月小路あゆなを指名する。

名指しでコイツが悪い、と言い立てる。

月小路は急に会話のバトンを渡されて、若干とまどった。

「わたしと、何か関係が？」

「さつき目的を聞いたけどよ。何？ ここで負ける予定だったって？ じゃあ最初から八百長気分でテーブルに立ってたわけかよ。

そんな奴の相手をさせられた柳は不憫だよな。分かるだろ？ おまえの相手だった奴なんだけど」

凌駕が言いたかったのは、そういうことだったのだ。

凌駕たちを勝たせることが目的だったならば、必然的に自分たちが勝ちを譲ることになる。

他者を持ち上げるには、自己が引き下げられなければならない……。それを予定調和として嬉々と挑んでいた月小路に、凌駕は微々たる苛立ちを覚えたのである。

「ああ、彼？ わたしも正直、あのデッキで勝てるとは思ってませんでした。でもごめんなさい、予想外に、その 彼、無駄な動きが多いから」

「まあ柳の敗因は、不慣れなデッキを使ったことかな。4色なんてアイツには早すぎた。」

「……で、八百長を企んだの、おまえだけ？」

「はい、わたしだけです。他の帆積吉良秋と坂姫虎聖はわたしたちと無関係ですので。手間ですが独断専行という形を取りました。」

「だから八百長なんて言い方は、的外れだと思えますね？ 結果的にわたし勝ちましたし、わたしのチームメイトはかつてに負けましたし」

「……それも気に入らねーなあ。分かってるだろ？ 他人を勝ち馬にするってことは、自分たちを負け犬にすることだろ。おまえは何も知らない仲間2人を心中させようとしたってわけだ。」

「あとな、おまえ結果ばかり見てんじゃねーよ。心意気だよ、俺が言ってるの。そうやって結果論を重んじてつと、どこかで結果と過程を間違えるぜ？ いつか」

くつくつく、と凌駕は悪役じみた笑みを浮かべた。

月小路はそれが気に障ったらしく、わずかに眉をひそめる。そして、鈴蘭はその微動を見逃さない。

「……凌駕くん。あなたは、ここの月小路あゆなは負けたことを予定調和と言い放って、自分の実力はこんなもんじゃないんだよーと言いつける、幼稚の極みみたいな恥知らずだと思っててるの？」

「別にー。ていうかそいつ、試合には勝ったんだろ？ ならいいじ



「やねーか」

「……………凌駕さん。あなたはわたしを挑発したいんですね。負けるつもりが勝ってしまった。え？作戦失敗してんじゃねーか（笑）……………と、なじりたいんでしょう。」

「はん、べつつにいいですけどー？わたしそんなの。ただあなたの余裕ぶつた顔とか？甘々な坂姫とマジで張り合っちゃってる姿とか？組合に関するはつきりしない態度とか？そういうの全部ひっくるめてわたしあんたキライですから」

「ふーん。だからどうした？って言いてえな。俺は立場ハッキリさせてるぜ？組合なんて気にいらねー、でも潰すのとか面倒だし関わりたくねえな、ってよ」

凌駕と言葉の投げあいをして、急に冷めた目になる月小路。

感情が薄れたのではない。仮面が薄れたのだ。

彼女の表面を覆っていた偽りが脱げる。言葉遣いも態度もマジめんどくせー。どーだっていいじゃん。わたしそーゆーの苦手だし。バカだから。

「ついてきて。」と一言投げる。

ひとけのない場所から、ひとけの薄い場所へ。

一際さびれた場所に、忘れられたように設置されているテーブルがあった。

「言いたいことはただひとつ。凌駕も、それが何であるかなんとか理解できた。」

「組合の力見せてあげますよ。わたしと勝負しません？」

「受けた。手加減と本気のギャップを見せてくれよ。そういうの好きだぜ、本気じゃない奴は嫌いだけだな」

「あなたの好みは知りませんが、わたしターボドルバロムですから気をつけてください。決勝のあの青赤緑なんかで来ると、即死しますよ」

「めんどくさいことになったわね……。ま、凌駕くんがどう成長したのか、見てっても損はないかしら？」

凌駕は序盤から、《青銅の鎧》でマナを増やす。

月小路は《シークレット・クロックタワー》で山札操作。その上で、《解体人形ジェニー》で相手の手札を削る。

凌駕はその《ジェニー》を《ワインレッド・ドラグーン》で破壊。序盤のクリーチャー戦は凌駕が制する。だが、デュエマは序盤だけで趨勢が決まるほど、一本気なゲームではなかった。

「《超次元リバイヴ・ホール》で《ランブル》！」

月小路は、超次元ゾーンから《時空の賢者ランブル》をバトルゾーンに出す。

覚醒条件はデッキボトムを言い当てること。それも《シークレット・クロックタワー》によって前準備を果たしている。よって、次のターンには確実に覚醒。

しかも、《リバイヴ・ホール》によって、前のターンに除去された《解体人形ジェニー》を手札へ戻した。

ここまでは、無駄のない戦術。

「前のターン、《ジェニー》であなたの除去呪文は落としてあります。この《ランブル》も止められずに、優勝者の名を語るわけでは

ありませんよね？」

「当然だろ。《鬪竜死爵デス・メンドーサ》で《ランブル》を破壊するぜ！」

バトルゾーンに出した時、相手を1体破壊する能力を使って、《ランブル》を除去する。

でもそれは月小路も読んでいた事。

彼女はさらに、凌駕の手元を追い詰める。

「《ガル・ヴォルフ》召喚！ 種族を宣言して、その種族のカードを捨てさせることができるデーモン・コマンド。わたしが選ぶのは『サイバー・コマンド』です！」

さあ、手札からサイバー・コマンドを1体捨ててくださいね。具体的には、大事そうに握ってるその《サイバー・G・ホーガン》を！」

狙っていたかのように、カードを射抜く月小路。

まあ当然といえる。月小路は《解体人形ジエニー》で凌駕の手札を見ていたのだから。

「ついでにシールドも1枚奪えたし、儲けだね。ターン終了！」

「はいよ。」

あーあ手札がねえなあ……。しょーがねえ、《トリプル・ブレイン》で3枚引くぜ」

呪文、《トリプル・ブレイン》でカードを3枚引く。

凌駕はドローを、数体の《クウリヤン》と《トリプル・ブレイン》だけで補うデッキを使用。呪文数は必要最低限に抑えた、クリーチャーメインの戦術を用いる。

月小路に手札除去を連打される前に、とにかく一定量の手札は温

存して置きたいのが凌駕の本音だ。

「それだけ？ わたしのターン。《超次元フェアリー・ホール》で《シュヴァル》！」

今度は《時空の霊魔シュヴァル》をバトルゾーンへ。

デッキと人格は変わっても、デーモン・コマンドを出したいと思いつけるそのスタイルだけは変わらないのだろうか。

「おまけに《エナジー・ライト》で、カードを2枚引く。ああ、デッキがよく回転してる！ ターン終了！」

「じゃあターンが終わる時、俺の手札からリベンジ・チャンスで《ベニジシ・スパイダー》を出さず。この能力で、俺はマナをひとつ増やす！」

「……っ、はん、何かと思えば《ベニジシ》！ そんなのを得意顔で出されても困りますけどっ？」

凌駕のターン。《ベニジシ・スパイダー》のお陰で、予定より速くマナが増えた。

ここから狙っていく。

「《パルピィ・ゴビー》召喚！」

デッキの上から5枚を自由に並べ替えられるクリーチャー。

凌駕はデッキにトリックのタネを仕込む。後は、切り札である《サイバー・G・ホーガン》を出せれば激流連鎖によるコンボは決まる。

「おまけに、《封魔ゴーゴンシャック》を召喚。すべての呪文のコストを2、多くする」

加えて、呪文ロツクもかける。

月小路のデッキは、一部を除いて、超次元ゾーンにあるデーモン・コマンドを進化元として《悪魔神ドルバロム》を呼び出すターボドルバロム。

凌駕の《ゴーゴンシャック》がバトルゾーンにいたるだけで、超次元呪文のキャストに7マナかかる事になる。これがかなりの重圧となって、月小路の両腕を縛る……。

「じゃあつ、そいつを除けてやればいいですね。7マナ、《超次元ミカド・ホール》で《ゴーゴンシャック》を破壊！

おまけに超次元ゾーンから《時空の封殺ディアス Z》！

ここでターン終了を宣言することで、わたしの《シュヴァル》が《霊魔の覚醒者シューヴェルト》に覚醒！ さつ、シュヴァル・ゲームの始まりってヤツですかね！」

「冗談になってねーな！」

「冗談じゃないし！」

月小路あゆなのクリーチャーは《凶刻の刃狼ガル・ヴォルフ》《霊魔の覚醒者シューヴェルト》《時空の封殺ディアス Z》の3体《ガル・ヴォルフ》と《ディアス Z》がバトルゾーンにあったため、《シューヴェルト》への覚醒条件を満たせていた。

一方、凌駕に残されたクリーチャーは《青銅の鎧》《ワインレット・ドラグーン》《闘竜死爵デス・メンドーサ》《ベニジシ・スパイダー》《パルピィ・ゴビー》。

……頭数は十分。

もっともクリーチャーの展開力を要にする凌駕のデッキにとっては、この程度のクリーチャー数はある意味当然だ。

「さあ、早くゲームを進めたら？」

「俺は《サイバー・G・ホーガン》を召喚！ 激流連鎖発動で、山札の上から《アクア・サーファー》と《クウリヤン》をバトルゾーンへ！」

水のクリーチャーが2体現れた。

凌駕は《サイバー・G・ホーガン》の激流連鎖によって、山札からクリーチャーを大量に呼び出すコスト踏み倒し系トリックデッキもつとも、これをトリックと呼んでいるのは凌駕だけだが。しかし威力は十分。

呼び出したクリーチャーの能力を発動する。

「《アクア・サーファー》の能力で、《霊魔の覚醒者シユールヴェルト》を超次元ゾーンに送還してやるぜ。

ついでに《クウリヤン》で1ドローだ。アドバンテージ減らねえなあ、さすがホーガン！ だと思わねえ？」

「ええ、さっすがシユールヴェール！ そっちがクリーチャーを3体も出したお陰で、わたしのシールドは3枚増えて合計8枚に！ 今なら《アレフティナ》だつて狙えるかもですよ」

「狙えるか！ ターン終了！」

月小路あゆながカードを1枚引く。

……彼女は少しずつ凌駕のデッキを読み進めていく。

クリーチャーコントロールという、デッキのほとんどを能力持ちクリーチャーで独占し、クリーチャーの能力によって相手を妨害するデッキが存在する。

青森凌駕はまさにそれだろう。

ほとんどをクリーチャーで占めることで、切り札である《サイバー・G・ホーガン》の激流連鎖がヒットしやすい仕様になっているのだ。

なら、これはいらねえね。

月小路が、マナに《ヤミノカムスター》を置く。クリーチャー以外のカードだけを手札から捨てさせることができる《ヤミノカムスター》は、凌駕のデッキに対して意味を持たない、と月小路は検分したのだ。

「《腐敗無頼トリプルマウス》召喚！ マナをひとつ増やし、あなたの手札を1枚除去！」

青森凌駕のデッキは、ほうっておくと次から次へクリーチャーが沸いてくる。

その源泉はどう考えてもあの手札だ。

なら それを枯らしてしまえ。

短絡的な回答だが、威力は凄まじい。月小路はいま捨てさせた手札を見て、策の成功を噛みしめる。

「よし、《ガイアクラッシュ・クロウラー》を落とす！ 危ないね」

「……ち。ここで抜いてくるのかよ……！」

反面、凌駕は苦笑い。《ガイアクラッシュ・クロウラー》は、マナゾーンにある呪文をタップできなくさせる、という能力を持つ。

呪文がデッキの大部分を占める月小路に対して召喚すれば、大幅なマナ削減になったはずだ。

だが月小路の運が勝った。

「ついでに《トリプル・ブレイン》！ カードを3枚引きます」

……月小路が手を握り締める。

来た。

《母なる紋章》が手札に来た！

「……………!!」

声に出さずに、ドロローの成功を飲み込む。

貯めに貯めたマナは10枚。

バトルゾーンには《ガル・ヴォルフ》と《ディアス Z》という、2体もの進化元。

出せる。次のターンに、マナゾーンにある《悪魔神ドルバロム》が登場するのだ……!

「ここでターンを終了しておきます!」

「《ディアス Z》で殴らねーのかよ。そいつの殲滅返霊を使えば、俺のクリーチャーを削げたるうに。欲がないと勝てねーぜ?」

「欲がなくっても打算がありますので。それに一斉攻撃されても、シールドが0になるだけでトドメにはいたりません。」

「ついでに、わたし《ハンゾウ》握ってるんで大丈夫ですし」

「は。結局おまえも『次のターン』論法なわけね……。俺のターン行くけど、いいかい?」

「いいよ。どうぞ?」

凌駕がカードを1枚引く。

引いたカードは《パルピィ・ゴビー》。

凌駕のクリーチャーは、《青銅の鎧》《ワインレッド・ドラグーン》《闘竜死爵デス・メンドーサ》《ベニジシ・スパイダー》《パルピィ・ゴビー》《サイバー・G・ホーガン》《アクア・サーフアー》《クウリヤン》。合計8体。

《パルピィ・ゴビー》は攻撃ができないのでシールドを割りにいけない。

《サイバー・G・ホーガン》が唯一W・ブレイカーを持っており、シールドを2枚割ることができる。



つまり、これらのクリーチャーでブレイクできるシールドの合計は、現状8枚。

月小路あゆなのシールドも8枚。

確かに、シールドに特攻を仕掛けても、0枚になるだけで停止する。……トドメの一撃が刺せない。

「ま、策が無いわけじゃあねえぜ」

「最後に全員で突っ込んできたらしいのに。返しのターンの《ドルバロム》で、ぶっ殺してあげますケドね？」

手札を1枚、マナゾーンに置く。

これで……マナは青森凌駕も10枚。

「十分」

手札から、2体のクリーチャーを召喚した。

「《パルピィ・ゴビー》召喚！ デッキの上から5枚の順番を入れ替える。

お次は7マナ。《魔龍バベルギヌス》召喚！」

「……《魔龍バベルギヌス》？」

月小路あゆなは不思議そうにそれを見つめる。

そして、何やら漂う危険な気配に、一気に神経が張り詰める。

「まさかっ……」

「《魔龍バベルギヌス》の能力で、バトルゾーンにある俺の《サイバー・G・ホーガン》を破壊！ そして、いま破壊した《ホーガン》をすぐに墓地からバトルゾーンへ戻すぜ！」

これで激流連鎖が発動する！」

月小路の予感も遅すぎる。

凌駕の山札の上から2枚が公開される。

埋められたトリックが顔を出す。それらは、一瞬意味を掴みづらい。しかし一拍置いて考えてみれば、まさに青ざめるような結果を連想させるクリーチャー軍団だった。

「激流連鎖により、山札から《緑神龍バグナボーン》と《鎧亜の咆哮キリユー・ジルヴェス》をバトルゾーンへ出す！！」

並んだ2体のクリーチャー。

これで、凌駕のクリーチャーは合計……12体。

そして《キリユー・ジルヴェス》の能力によって、全員がスピードアタッカー。ただし《パルピイ・ゴビー》は頭数に入っていない。

「さあて……お望み通り一斉攻撃してやんよ。どーぞ《ハンゾウ》出すんなら好きにしま？」

「な……なに、なにコレええッ！ 来な！ 来なよ！ どうぞお！？」

「《緑神龍バグナボーン》で攻撃！」

スピードアタッカーを得た《緑神龍バグナボーン》が攻撃を仕掛ける。

その時、能力によって、manaゾーンからパワー3000以下のクリーチャーをバトルゾーンに出すことができる。

「《バグナボーン》の能力で、俺はmanaゾーンから《斬隠オロチ》を出すぜ！ これで俺の《パルピイ・ゴビー》を山札に戻し、かわりに山札から《青銅の鎧》が出る！」

おまけにシールドをダブル・ブレイク！」

「くっ……………ト、トリガー無し!? 何か入ってなさいよ、そこは!」

「続けて行くぜ……………残りのクリーチャーで一斉攻撃! 《青銅の鎧》 《ワインレッド・ドラグーン》 《闘竜死爵デス・メンドーサ》 《ベニジシ・スパイダー》 《サイバー・G・ホーガン》 《アクア・サーファー》 《クウリヤン》 《魔龍バベルギヌス》 《鎧亜の咆哮キリユー・ジルヴェス》 《斬隠オロチ》 《青銅の鎧》!」

数え切れないほどの大群が押し寄せる。

怒涛の津波のようだ。

「しっ……………シールドトリガー《デーモン・ハンド》! 《ガンヴィー ト・ツイスト》!!! ニンジャ・ストライクで《威牙の幻ハンゾウ》……………! ああああ……………!!!」

たかが1、2発の呪文で反撃に転じる程度では、津波を水鉄砲で追い返そうとするようなもの。

濁流に揉まれながら、すぐそこまで迫っている「敗北」を、必死に遠ざけようと手を伸ばす。

だが無駄な足掻き。

津波は月小路のシールドをすべて飲み込み、暴虐の限りを尽くした後、

そのシールドに守られていた主をも飲み込む……………!

「……………ワンショットキルねえ……………。つーか、何ヒマなことやってんだか。凌駕さん」

「あら、だあれ？」

傍らで聞こえた、ぼそりとした一言に、鈴蘭の耳が反応する。それはすぐ隣から聞こえていた。

「……鈴蘭さんも鈴蘭さんで、相変わらずすごいカッコっすね。暑くねっすか、それ」

「田所くん。どうしてここにいるの？」

声の主は田所だった。

赤茶に染髪した頭と黒縁眼鏡はいつものスタイル。

あたかもたつたいま偶然居合わせました、と言わんばかりの何食わぬ顔で登場した。

「つか、静かにしてください。俺があんたと知り合いだってバレたら、厄介っしょ」

「バレたら厄介って、誰にかしら？」

「凌駕さんに。いちおう俺、あの人と同じチームなんで。そういうの知られるのダメっす」

不躰にそう答える田所に、鈴蘭のしとやかな眉が少し歪む。

「……君の言う事、私が素直に聞くなんて……思ってるの？」

「最終的にはどっちでもいいっすよ。ただまあ、どちらかと言えば、内緒にしといて欲しいなあ、ってだけっす」

「決定意思のない話し方はやめなさい」  
「ないわけじゃないっすよ。どっちでもいい、って決めてるんです。世の中、なんでも0（ON）と1（OFF）だけじゃねえっすし。人間、ホントに決めなきゃいけないトコだけ見極めてりゃ、あとは『どっちでもいい』で済ませて大丈夫だと思っすけどね」

話している最中、田所は鈴蘭のため息を聞いた。

「……………。それで、本当は何をしに来たの？」  
「仲間に言われて、凌駕さん探しに。あ、仲間っていつてもアツチですよ。K県代表チームのほうっす。見つけて連れて帰る予定だったんすけど、もういいっすかね連れてつても」  
「いいわよ。好きにしなさい。……………私たちの用が終わった後でなら……………私たちの用、つてのは『組合』の用ってことっすか？」  
「そっすよ？ 分かっているなら退がってなさいな。いま彼と月小路が余興を終えたばかり……………本題はまだなのだから」  
「いや、こっちにもこっちの都合があるんすけど」

田所が言い終わらないうちに、  
彼らの後方で、どさり、と落下音がした。  
振り返って見てみると、音の正体はカードファイルが落ちた音。  
中身が地面にばらまけて、拾うのが大変そうだ……………。  
でも落とし主はカードを見ていない。  
二人組の少女は、彼ら 厳密に言々と田所を凝視して、落としたカードには目もくれずに呟く。

「……………いた……………」

風に消えるような儂い声。

その様子に、もう片方の少女が問い質す。

「あの人？ あの人がそうなの？ 四保ちゃん」

「……うん……！ トレードしたひと」

か細い指を田所に向ける、背の低い少女。隣に立っているのは姉のようだ。

それを見て、田所が一言。

「……………げ」

田所は、自身に指を向けている少女に面識がある。

というかついさつき会ったところだ。まさか遭遇するとは。だからさっさと用事済ませてズラかろうと急いでいたのに……。と、田所の心でいろいろ逡巡する。

それをかき消すような声で、片方の少女が声を投げる。

「すみません！ この子のカード……返してもらえませんか？」

……必死だ。

表情から感情が読み取れる鈴蘭でなくとも分かる。田所でも分かる。彼女は必死に訴えている。

「……あの、わたしこの子の姉の三香っていいいます。それで……」

「もう片っぱの子は、俺とトレードした子っすね。……なんか用すか、忙しいんだけど」

「あの、勝手だって分かってるんですけど……この子と交換したカード、返してくれませんか………」

「いや、……ムリでしょ常識的に」

と言って突き放そうとするものの、三香を名乗る少女の目は揺る

がない。

見た目にはすぐにも折れそうな女の子だというのに、心の芯は意外なほど強いらしい。

田所の苦手なタイプである。フェイントかよ、と身勝手な悪態をつきたくなりつつ、

隣では鈴蘭が「面白い展開になったわねー」と言いたそうな満足表情を浮かべ、

眼前にはカード返してくれと怒鳴り込みに来た少女が二人ほどおり、

肝心の青森凌駕は余興が楽しくって田所なんて眼中にないときた。

「……………めんどくさい展開っすわ、これ」

t o b e c o n t i n u e d .

V S 裏方（後書き）

《サイバー・G・ホーガン》大好き。  
でも最近は《GENJI》も大好き。  
どいつを主人公機にしよう？



## VSいぢぢぢ(前書き)

この文章は実在するカードゲーム「デュエル・マスターズ」を主に軸に置いた物語です。

なので、デュエル・マスターズカードゲームについての知識をある程度備えている方を対象に描いております。

よって、文章中にいちいちクリチャーの解説などは載らない予定です。そこをご理解いただける方のみ、どうぞお読み進めくださいませ。

なお、この物語はフィクションもいとこの作り話に過ぎません。それゆえ、実在する団体や地名、氏名年齢住所電番、公式大会などとは一切関係どころか縁もゆかりもございません。

## V S I Y O J K O

デュエル・マスターズDS デュアル・ソウル

トレード揉めはよくあることで。

価値を知らないトレードと、価値を基にするトレードの相容れなさが引き金となる。どちらに重きを置くかは個々人によって異なるべきだが、それを認めない人間もやはり多少はあつて然るべき。

田所強と夢坂三香。

ふたりの今後の流れは思い通り、アンティルールという非合法な賭け試合に落ち着くこととなる。

「なんで俺、こんなことなつてんの……」

「わ、わたしが勝つたらパーフェクト・ギャラクシーとゲンジを返してもらいます……。あなたが勝つたら、」

別になにもいらねーから、帰ってくれば一番助かる。

……と、言つてやりたいがせつかくノーコストで高レアリティのカードが手に入るかもしれないチャンスだ。とりあえず《超次元カード・ホール》を要求してみる田所。一拍置いて承諾された。

ひとけのないと言っても、さっぱり人の通らない裏路地というわけではない。

大会の興奮冷めやまない子供たちが、がやがやとそばを通り過ぎることもある。その都度、アンティに興じる身としては、田所は萎縮せざるをえない。

「やりづれー……」

ついひとり語散る。

「わたしのターンで《スペース・クロウラー》を召喚！ マナゾーンに水・闇・自然の3色があるので、山札の上から3枚を見て好きな順番に入れ替えます」

（ スペクロっすか。予想できるデッキとしてはくドルゲージかな）

夢坂三香の《スペース・クロウラー》で手札を潤し、デッキボトムを固定する。

この流れから《時空の賢者ランブル》を呼び出して覚醒に繋ぎ、手札の損失を《剛撃戦攻ドルゲージ》の超ドロで補うデッキである。

「走ったほうがいつすねえ、これ。《再誕の社》超動で2マナ追加！」

前のターンに唱えた《エマージェンシー・タイフーン》で墓地に捨てたカードを、そのまま《再誕の社》でマナに変換する。

「社エンジン……！」

「《ランブル》出すんなら、急いだほうがよくねえっすか？」

「ばれてるなら躊躇いません……《超次元ミカド・ホール》から《時空の賢者ランブル》をバトルゾーンへ！」

現れる予定調和の化身。

スムーズさとしては一流だが、こと挑発においては田所が勝った。

「《リーフストーム・トラップ》で、《ランブル》を除去っすね」

「じゃあっ……《超次元フェアリー・ホール》！ これでマナをひとつ増やし《巨人の覚醒者セツダン》を出します」

ゆるぎない安定感に田所が唖る。

三香のクリーチャーは《スペース・クロウラー》、《巨人の覚醒者セツダン》。《剛撃戦攻ドルゲージ》のシンパシー能力を使えば、次のターンにでも大量ドロローがかなう。

「《トリプル・ブレイン》で3枚カードを引き、手札から《フェアリー・ライフ》を唱えてターン終了っす」

「わたしのターン！ 《ドルゲージ》召喚！ 能力を発動し、カードを4枚引きます！」

盤面で見れば、圧倒的有利は三香のほう。

クリーチャー無しの田所に対し《剛撃戦攻ドルゲージ》《スペース・クロウラー》《巨人の覚醒者セツダン》。

「さあ……ターン終了ですよ」

「俺のターン。まあ確かに不利は不利だけど、……もうここまできたんだから、ボードの1：2交換くらいで怯まないでほしいっすね

「？」

田所の手番。

「《超次元ガード・ホール》超動で、そっちの《セツダン》を除去。対象は《支配者》で」

ガードホールから登場したのは《時空の支配者ディアボロス》。《》。

9000のブロッカーで、クリーチャーの能力で選ばれない。そう、このパワーは《ドルゲーズ》を押さえ込む。

「俺こっから1：2連打していくんでー……そのへん気をつけてほしいっすね」

「……………！」

田所のマナは十分。

さらに三香のマナも十分。

田所のセリフは、勝負はここからだという宣言と同じ。

「わたしのターン！ ……」

「さ、なんかないっすか？」

「……《エナジー・ライト》で2枚ドロします。ターン終了！」

(ふうん。動きナシっすか)

田所はなにかを感じたのだろうか。

しかしトップドロに恵まれず、予感に反して動かざるを得なかった。

「俺のターン。《支配者》の覚醒はナシっす。

……そのかわりに、《ガンヴィート・ブラスター》唱えます。これで《ドルゲージ》に死んでもらって、手札2枚切ってくれっす」

待っていた、という貌。

「じゃあ、ここで手札から《斬隠蒼頭龍バイケン》！」

やはりいたか。

「まあ……分かつちやいたんすけどね。エンドっす」

「わたしのターンで《ミカド・ホール》超動！ 対象は」

相手の計算は崩れたはず。

ここで一気に、場を有利にする！

……三香の思考はおおまかにこんな感じ。

でも、三香はひとつ分かっていなかった。

相手の計算が崩れたと読んだが。

そもそも、田所のハンドには計算など関係ない。

「 《時空の賢者ランブル》！」

「なるほど、ボトムは最初のスペクロで固定してるから……ってわけっすね。終わり？」

「はい。ターン終了します」

「じゃ、俺のターンで。トップの腐り具合はまあいいとして《母なる紋章》使います」

「紋章っ……！？ まさか」

「選ぶ文明は水、対象は《支配者》。こいつと、マナゾーンにある《アクア・サーファー》を交換し、能力で《ランブル》をバウンス！」

（ そんな。この場面で《時空の支配者ディアボロス》を自分から捨てるなんて）

三香の脳裏に、まざまざと植えつけられる。

……何事かの違和感。

びっ、と一筋だけ。

敗北へと繋がっていく道が浮かんだ。

「っ……わたしのターン！ 《超次元フェアリー・ホール》超動」

「おっと。またセツダンっすか」

（ ……違う。決めにいくんだ。多少ムリをしても……っ！！）

「《時空の喧嘩屋キル》を2体、バトルゾーンに出します！」

「！」

キルが2枚、バトルゾーンに放たれる。

（ 次のターンの覚醒から、勝負決めにくる気か）

t o b e c o n t i n u e d .

## V S いちじち (後書き)

最近ドロマー超次元の調子がいいです。

D Rで遊びにいくとホーガンもらえるので楽しい >  
<



## V S I K O J K O [ 2 ]

デュエル・マスターズDS デュアル・ソウル

【????】

「…………青森、凌駕を全国大会に出場させます」

クロイモノが斯く言った。

田所のターン。

三香のクリーチャーは《時空の喧嘩屋キル》×2、《剛撃戦攻ドルゲーズ》《スペース・クロウラー》《斬隠蒼頭龍バイケン》の5体。

「俺のターン。ドロー」

田所は、計算ずくで相手を制することが苦手だ。いかに安定したデッキであろうと、いかに地雷を突き詰めたデッキ

キである」と、

相手の手札。シールド。山札。見えない要素はいくらでもある。しかし、その見えない要素を恐れずに、戦略を組み上げられる者こそが強いデュエリストだ。

「手札からマナチャージして、合計11マナっす」

しかし田所は、頭で理解していてもそれを実践することはない。どんな精密な分析でも、どんな緻密な戦略でも、結局のところ、カードゲームである以上は不確定要素に右往左往する。

……田所の得意とするのは、それらに唾する戦い。というよりは。

万人が同じような状態に陥らざるを得ない、確かな強制力のあるカードを好む。

そこに不確定はなく確定が残るのみ。

「6マナで《超次元バイス・ホール》！ じゃあ、ハンド（手札）から《ナチュラル・トラップ》を落としてもらうっす」

「バイス・ホールでは、わたしのクリーチャーを除去できません。あなたが《支配者》を出したとしても、次のターンのデビル覚醒を待たずに、わたしの総攻撃でゲームは終わりですよ……！」

「勝ちが迫ると饒舌になるって、暑苦しいっすね。とりあえず、超次元ゾーンから《時空の支配者ディアボロス》を出すっすよ」

……何度見ても、厄介の一言に尽きる。

クリーチャーの除去能力が通用しない以上、三香に残された除去手段は呪文に限られる。

しかし、その呪文である《ナチュラル・トラップ》は《超次元バイス・ホール》によって墓地に落とされた。

( それでも、アレを破壊する手段はある…… )

三香の手札に、希望はある。

「……………。なんすか、その希望ありげな顔」

「……………。なんでもないですよ」

「いっすけど、そういうところから情報握られるんだよなあ。OK。手札は読めた。…………。どっちみち、俺の手には、負える。」

いくぜ、グラビティ・ゼロ！ 《五連の精霊オファニス》をバトルゾーンに出す！」

( アレは!?! )

バトルゾーンに、5大文明のすべてが揃ってれば、無料でバトルゾーンに出てくるエンジェル・コマンド。

「さらに、手札から呪文超動。

《母なる星域》！ 俺の《時空の支配者ディアボロス》と、マナゾーンにあるクリーチャー1体とを交換！ 《五連の精霊オファニス》進化！

《悪魔神王バルカディアス》！」

バルカディアスの召喚によって、他のクリーチャーが抹殺される。

「他のクリーチャーをすべて破壊する」。…………。アクサ・サーファーやオルゼキア等、1体や2体の除去に対処することなら、誰でもできる。」

しかし、手札をフルに使ってからの大量展開を、根こそぎすべて奪われれば、それこそ『誰だって』疲弊する。」

( そんな、この人……… いったい……… あの超パワーカード《時空の支配者ディアボロス》を……… 何度、「ただの踏み台」として使えば気が済むの………!?)

一度目は、水の文明を持つことを利用して《母なる紋章》で《ア  
クア・サーファー》と交換され。

二度目は、たったいま、5文明すべてを持つことを利用して《五  
連の精霊オファニス》のグラビティ・ゼロ要員として扱われ。

「……… パワーカードって言ったって、一介のカードに過ぎないんす  
よ。持ち腐れにしたいくないから、素質は骨までしゃぶらないと。

さ、攻撃なしでターンエンドっすよ」

「わたしのターンです！」

呪文は使えない。

そうでなくともパワー14500。トリプルブレイカー。半端な  
クリーチャーは出せない。

( 大丈夫。対処はできる! )

「《龍神へヴィ》召喚! 自爆して1ドロー!」

田所の《支配者》に使う予定だったへヴィをここで切る夢坂三香。

「おっと……… じゃあバルカを捨てざるをえないっすね」

「そして! ドローしたカードを超動。《エナジー・ライト》!」

カードを2枚引く。

……… リソースだ。一度場をリセットされたからには、まず一定量

の手札は確保必須。

「俺のターンっすね。」

「たぶん、なに引いたって無駄っすよ。俺が『こういうの』好きだ  
って、わかったっしょ。呪文超動。《ロスト・ソウル》」

「……………！！ て、手札を全部捨てます……………！！」

「《バイケン》の2枚目はナシ、か。まあ妥当っすよね。」

「じゃ、続いて《魔光王機デ・バウラ伯》召喚。墓地から《トリプ  
ル・ブレイン》を手札に加えるっすよ。」

三香のターン。

ロスソによって手札はゼロ。

……………三香のデッキは、2コストブースト（《フェアリー・ライフ  
》、《鼓動する石版》等）から4コスト圏（《解体人形ジェニー》、  
《パクリオ》）に繋ぐルート。

並びに、3コストブースト（《青銅の鎧》）から5コスト圏（各  
種超次元呪文、《龍神ヘヴィ》等）に繋ぐルート、これら2つが投  
入されている。

動きを確実にするため、これら序盤のエンジンは大量に組み込ま  
れ、多少の腐り札を気にしない《剛撃戦攻ドルゲージ》による圧倒  
的ドローで手札を賄う。

「ドロー！ ……《フェアリー・ライフ》をマナに置いて、終了し  
ます」

ここで、その代償が出た。

序盤の潤滑油は、十分に豊潤化された後半戦においてタダの荷物  
と化す。

「スキあり。俺のターンで《トリプル・ブレイン》、3ドローっす。」

ドローカードから《超次元ドラヴィタ・ホール》。墓地の《母なる紋章》を回収して、超次元ゾーンから《時空の不滅ギヤラクシー》をバトルゾーンに「

場、手札をゼロにした隙を突けば、どんなデッキでも機能不全なままゲームを続行せざるを得ない。

田所のデッキは、《悪魔神王バルカディアス》と《ロスト・ソウル》による、相手の勢力をゼロにすることを目標としたくフルリセツト>……！

「わたしのターン！」

返す、三香のターン。

ドローカードを即座にプレイする。

「《超次元フェアリー・ホール》！ 超次元ゾーンから……《時空の喧嘩屋キル》を2体！」

またも、キル2体を並べる。

「……俺の除去札を削ろうとしてんのが丸分かりっすね」

しかし、だからこそ悪くない手である。

ここで《巨人の覚醒者セツダン》を出し、それを相手の《魂と記憶の盾》や《デーモン・ハンド》で除去されれば、再びバトルゾーンはカラに逆戻りする。

しかし、《時空の喧嘩屋キル》を2体並べるなら、たとえ片方が除去されても1体は残る。

1体でもクリーチャーがあれば、

次に繋ぐことができる、可能性が残る。

「じゃ、俺のターンっす。さてと……じゃ、このクリーチャーを召喚」

【????】

「青森凌駕を？」

「はい。此度、年に一度の大規模な全国大会が開催されます。これは世界大会へのキップを得られる数少ないチャンスなのです。この大会で上位に入賞することは、大きな荣誉なのです」

クロイモノが語る。

「春………か。気の長い話だな。君の話によると、その『彼女』はそう待つてはおれないのでは？」

まだ肌寒い風の吹く季節だった。

これは、ある雪の振る日にあつた、窓際の密談。

「犬養軌跡は確かに『彼女』の再生を望んでいます。それには、ワールドデュエリストである犬養軌跡と敵対する、組合の隆盛が必須。組合の実績をデュエマの世界に知らしめる、絶好のチャンス………！それが今、なのです」

「……組合の『名持ち』は、いま何人かな？」

「『デュエリスト：ズー』を獲得した岬点晴、『デュエリスト：シナー』を獲得したアルベール・ディフ。脱退した『デュエリスト：

ドラゴニカ』の竜條連次を引くと、計3名ほど。『デュエリスト：ソーサラー』の私を含め……です」

「3人か。俺には少々、物足りない気もするのだが。組合に属さない『名持ち』で厄介なのは拳がるか？」

「『名持ち』はいずれも厄介ですが……。『デュエリスト：ブレイン』坂姫虎聖、『デュエリスト：アムネジア』アシュリー・ベアトリックスあたりでしょうか。『デュエリスト：フルリセット』の田中が最近行方知れず。他は正直、無視してもよいかと」

「そうか。必勝が欲しくば、俺を呼ぶがいいぞ。しかし本当に3名で足りるのか？」

「ご安心を……。民衆は真の象徴というものを知っています。海外勢であるアルベール・ディフを手中に収めた今、日本に根付いた組合もグローバルな位置を築く準備ができたのだとお考えください……」

男は、ふむ、と頷く。

「……青森凌駕を狙う理由は？」

「犬養軌跡が気にかかるデュエリストだから、ではいけませんか？」

「阿呆め。犬養のなにがしガツコンなのは、その『彼女』のほうだろ。犬養は青森凌駕を利用したいだけだ。方向は見えないが」

「カードの公式製造部に、……いるのですよ、『青森天馬』が」

「テンマ………！　そうか、青森凌駕は」

「青森天馬の息子。犬養軌跡はおそらく、組合の力に対抗するため、デュエルマスターズの中枢に働きかけるルートを手に入れようとしているのです」

おお……、と唸る男。

報告を続ける女は、この冷える季節にふさわしい、黒一色の外套に身を包んでいた。



若い女が着飾らずに、漆黒に体を委ねるといっても、まあ少しおかしな気もするが。

ただ、彼女が『デュエリスト：ソーサラー』加納鈴蘭であるとするならば、誰もそれを不自然に思わず、受け流すのもある種の道理。

「気をつけなければならんな……。たださえエピソードシリーズの開発段階にかかっているのだから」

「エピソードシリーズ……？」

「数種類進んだ、未来のカードたちをこう呼んでいる。いいか加納、これは組合の問題だぜ。絶対に他なんてあたるんじゃないぞ」

仰せのままに致します、と恭しく微笑む鈴蘭。

「……じゃ、このクリーチャーを召喚。

《アルタイル・セブ・クロウラー》！」

「「……………!?」」

この時、驚愕の表情を示したのはふたり。

田所と対峙する夢坂三香。

そして、デュエルマスターズ中枢をわずかに把握する

加

納鈴蘭。

「た、田所……なぜ、あなたがエピソードシリーズを、」  
「細かい話はナシで。ターン続行っすよ。呪文超動、《再誕の社》！」

アルタイル・セブ・クロウラーは、能力「スペース・チャージ」を持つエイリアン。

マナゾーンに闇のカードが置かれた時、相手のアンタップされているクリーチャーを1体破壊できる！

「俺が《再誕の社》でマナゾーンに置くのは、墓地の《超次元ガド・ホール》と《超次元ミカド・ホール》。どちらも闇。

この瞬間、スペース・チャージ発動！相手の《時空の喧嘩屋キル》を2体破壊　　！！」

三香のバトルゾーンが爆破される。

渦に飲み込まれる。田所の戦術に食い尽くされる。

……なんだこれは、と目を見張るのは、またふたり。

夢坂三香は未知の能力に。

加納鈴蘭はあるべきでないカードに。

「わ……わたしのターンです！」

三香のターン。

加納鈴蘭はさらに動揺することになる。

「わたしのカード、《超次元ガロウズ・ホール》を超動します！このカードであたの《アルタイル・セブ・クロウラー》をバウンズし、わたしの超次元ゾーンから《時空の賢者ランブル》を、もう一度バトルゾーンへ！」

「ゆ、夢坂姉妹が……！？　どうして、あなたまでなぜエピソード

シリーズのカードを持っているの……!!」

「え？ あ、えーと……白い髪の毛で、ヘッドホンかけた人にもらったんです、けど……なにかマズいですか……？」

白い髪の毛で、

ヘッドホンをかけている。

鈴蘭は一瞬で、この会場に犬養軌跡が現れたのだという結論にいきついた。

「そ……そんな。ここに来ていた……？」

「だから、デュエマ中つすよ今。余計な話はエンリョしてくれろ方向で頼むっすわ。」

俺のターン！ 8マナタップ。闇クリチャー《復活の祈禱師ザビ・ミラ》を召喚!!」

鈴蘭は頭を抱えたい衝動と戦った。

アルタイル・セブ・クロウラー、

ガロウズ・ホール、

ザビ・ミラ、いずれもエピソードシリーズ……!

手元にあるはずのない、数世代先のカード群!

( いや、まだいい。あのサイキック・クリチャーが登場してないなら、まだいい……! )

「いくつすよ、能力発動! 《復活の祈禱師ザビ・ミラ》を召喚した時、バトルゾーンにある自分のクリチャーを好きな数破壊する。

俺は《時空の不滅ギャラクシー》と《魔光王機デ・パウラ伯》の2体を破壊。そして、この破壊したクリチャーの数だけ、コスト6以下のサイキック・クリチャーをバトルゾーンに!

《時空の霊魔シュヴァル》、そして《時空の鬼若コーシロウ》を

バトルゾーンへ出す！ さらに《撃滅の覚醒者キング・オブ・ギャラクシー》覚醒！」

「い、1ターンでバトルゾーンに、クリーチャーが3体現れた……！」

「アタックなしでターン終了。このタイミングで、シュヴァルの覚醒条件達成つす。《霊魔の覚醒者シューヴェルト》覚醒」

圧巻のバトルゾーン。

《復活の祈祷師ザビ・ミラ》《撃滅の覚醒者キング・オブ・ギャラクシー》《霊魔の覚醒者シューヴェルト》《時空の鬼若コーシロウ》。

対する三香には《時空の賢者ランブル》。

序盤に《スペース・クロウラー》で固定したデッキボトムはまだ継続しているので、次のターンに覚醒することができる。

しかし、と これを観戦する鈴蘭は思った。

例え覚醒したとしても、この戦況をひっくり返すカードは存在しない。

例え、

「わたしのターン……！！ デッキボトムを宣言します。《大神秘ハンニャ》！」

正解によって覚醒条件達成、《恐気の覚醒者ランブル・レクター》覚醒です！」

例え、この後にクリーチャーを召喚し、

「マナをチャージし、《スペース・クロウラー》召喚！ デッキの上からカードを1枚、選んで手札に加えます」

「じゃ、《シューヴェルト》の能力で俺のシールド1枚追加しまっす」

さらに超強力な重量級呪文を撃てたとしても、

「いま手札に加えた《ロスト・ソウル》を起動、手札をすべて捨ててください」

「はいよつと。じゃ、《シユーヴェルト》の能力で、そっちのシールドを1枚ブレイク。トリガーは？」

「レスポンスはありません」

「ふーん。じゃ、終わり？ 攻撃は？」

「……攻撃は無しです。ターンを終了します……」

もう、田所に手札は関係ない。

ターンの開始時に「奴」が覚醒する限り、もう田所に手札がなくなるという関係のない世界になってしまった。

「じゃ、俺のターンっす。

ターントップで《コーシロウ》の覚醒条件達成、《戦鬼の覚醒者ダンジューロウ》覚醒！

ドロー。チャージスキップからの《戦鬼の覚醒者ダンジューロウ》で攻撃！ アタックトリガー能力発動、マナゾーンにある《魔刻の斬将オルゼキア》をバトルゾーンに出して、能力で自爆っす！

この能力で、そっちの《恐気の覚醒者ランブル・レクター》と《スペース・クロウラー》を破壊！ さらにダブル・ブレイクが通る！

「、くううっ……！」

「……決める、っすかね…… 《シユーヴェルト》で残りのシールドをすべてブレイク！」

4枚だった三香のシールドは、たったの2体の攻撃で、ゼロ。

「シールドトリガー、《ナチュラル・トラップ》！ 対象は……」  
「対象は、どっち選んでも同じっすよ」  
「……………《キング・オブ・ギャラクシー》を除去します」  
「っすね。サイキック・クリーチャーなら、《ナチュラル・トラップ》撃つてもマナを増やさず除去できる。……………結果を知っても、ちゃんとしたプレイングができてるあたり、若干見直したっすね。  
じゃ、《復活の祈祷師ザビ・ミラ》でダイレクトアタックっす！  
……………約束どおり、何も言わず帰ってくれ」

「見事ね、田所」  
「……………さて、凌駕さんはもう終わったんすかね」  
「聞きなさい、田所。あなたには教えてもらいたいことがあるんだから……………」

田所を見下ろすクロイモノが、艶やかさのかけらもない笑顔で彼を嘲笑う。

t o b e c o n t i n u e d .

キャラクターまとめ&デッキまとめ(前書き)

今回はキャラクターと、それらの扱うデッキをまとめてみました。  
ひゃー、意外といたもんですね登場人物。

## キャラクターまとめ&デッキまとめ

今回はメインデュエリストと、その使用デッキの紹介です。

東日本代表戦が終わった時点でのレシピを掲載していますので、本編の内容とは少し違います。

(ただし、青森凌駕や月小路あゆな等、代表戦終了後に登場したデッキはそのまま扱います)

彼らだからこそ回せるのであって、強いとか思ったら駄目ですよ。名前だけの奴もちょこっと。

### K県代表

青森凌駕 Ryouga Aomori

帽子の少年。物語の主人公という立ち位置だが、主人公というよりも中心人物である。

「サイバー」系カードを使うことに長けており、メインカラーは当然、水。

大将だったので『デュエリスト：サンダー』の名を頂戴した。

< 凌駕激流連鎖デッキ >

【クリーチャー】

《クウリヤン》

《クウリヤン》

《封魔ゴーゴンシャック》

《封魔ゴーゴンシャック》

《封魔ゴーゴンシャック》

《封魔ゴーゴンシャック》



《パルピィ・ゴビー》  
《パルピィ・ゴビー》  
《パルピィ・ゴビー》  
《パルピィ・ゴビー》  
《アクア・サーファー》  
《アクア・サーファー》  
《斬隠オロチ》  
《斬隠オロチ》  
《ガイアクラツシュ・クロウラー》  
《サイバー・G・ホーガン》  
《サイバー・G・ホーガン》  
《サイバー・G・ホーガン》  
《サイバー・G・ホーガン》  
《闘竜死爵デス・メンドーサ》  
《魔龍バベルギヌス》  
《魔龍バベルギヌス》  
《魔龍バベルギヌス》  
《魔龍バベルギヌス》  
《魔刻の斬将オルゼキア》  
《ワインレッド・ドラグーン》  
《火焰タイガーグレンオー》  
《火焰タイガーグレンオー》  
《青銅の鎧》  
《青銅の鎧》  
《青銅の鎧》  
《ベニジシ・スパイダー》  
《ベニジシ・スパイダー》  
《緑神龍バグナボーン》  
《鎧亜の咆哮キリユール・シルヴェス》

《鎧亜の咆哮キリユール・ジルヴェス》  
《鎧亜の咆哮キリユール・ジルヴェス》

【呪文】

《トリプル・ブレイン》  
《トリプル・ブレイン》

柳太一 Taichi Yanagi

凌駕のチームメイトにしてチームリーダー。柔和な性格だがデュエマになると一変、空回りしやすい自信のなさを露呈する。

東日本代表戦では使い慣れていない<4色ナイトデッキ>を使って敗北を喫している。

鈴木水子 Mizuko Suzuki

凌駕のチームメイト。弱気で内気という、内向精神の塊のような少女。

<カナ式ナズナグマデッキ>を用いて、代表戦で勝ち星を飾る。友好関係には『デュエリスト：フルリセット』こと田中華奈海が絡んでいる。

田所強 Tsuyoshi Tadokoro

凌駕と入れ替わりになったチームメイト。黒縁メガネをかけた、赤味がかつた髪をしたラフな少年。

ある一点をゼロ（またはそれに近い状態）に陥らせる<フルリセット>戦法を筆頭とし、<4色シユヴァルコントロール>などを使う。「未来のカード」とされるエピソードシリーズのカードをなぜか所有する一人。

トーナメントには参加しないものの、実力はK県代表の中で最も高

い。

< 田所フルリセットデッキ >

【クリーチャー】

《魔光王機デ・バウラ伯》

《五連の精霊オファニス》

《アクア・サーファー》

《アルタイル・セブ・クロウラー》

《魔刻の斬将オルゼキア》

《壊滅の撃墜王エスコバルド》

《復活の祈祷師ザビ・ミラ》

《悪魔神王バルカディアス》

《悪魔神王バルカディアス》

【呪文】

《超次元ドラヴィタ・ホール》

《超次元ドラヴィタ・ホール》

《超次元ドラヴィタ・ホール》

《超次元ドラヴィタ・ホール》

《エマーゼンシー・タイフーン》

《エマーゼンシー・タイフーン》

《エマーゼンシー・タイフーン》

《エマーゼンシー・タイフーン》

《トリプル・ブレイン》

《トリプル・ブレイン》

《トリプル・ブレイン》

《超次元ミカド・ホール》

《超次元ミカド・ホール》

《超次元バイス・ホール》

《ガンヴィート・ブラスター》

《ロスト・ソウル》

- 《ロスト・ソウル》
- 《フェアリー・ライフ》
- 《フェアリー・ライフ》
- 《フェアリー・ライフ》
- 《フェアリー・ライフ》
- 《再誕の社》
- 《再誕の社》
- 《再誕の社》
- 《母なる紋章》
- 《母なる星域》
- 《リーフストーム・トラップ》
- 《リーフストーム・トラップ》
- 《超次元ガード・ホール》
- 《超次元ガード・ホール》
- 《超次元ガード・ホール》
- 【超次元ゾーン】
- 《時空の不滅ギャラクシー》
- 《時空の雷龍チャクラ》
- 《時空の精圧ドラヴィタ》
- 《時空の凶兵ブラック・ガンヴィート》
- 《時空の封殺ディアス》
- 《時空の鬼若コーシロウ》
- 《時空の霊魔シュヴァル》
- 《時空の支配者ディアボロス》

楽絵紫音 Shion Rakue

ふわふわ茶髪の少女。K県の個人戦代表。凌駕の知り合いで、不思議な絆で繋がれている。

デュエマの腕前は驚異的なまでに高く、ロマノフ系列などドラゴン・

ゾンビを多用する。不慣れなく超次元デッキを使用したが、本来は<B・ロマノフ>が彼女の主流。

東日本個人代表戦の決勝で、組合の加納鈴蘭に手も足も出さず敗北。

## D 県代表

坂姫虎聖 Torahiji Sakaki

グレーヘアの少年。片眼鏡に紳士衣装で、どこからどう見ても執事である。しかしそういった仕事はしていない。

クリーチャーメインの<4色コントロール>を扱う。決勝で青森凌駕に敗れて以来、デッキを大幅改造したとか。

『デュエリスト：ブレイン』。

帆積吉良秋 Kirakaki Hozumi

がたいのいい男。キャップ着用で、デュエマ中は声大きい。

《戦極竜ヴァルキリアス・ムサシ》を切り札として、巨大なサムライ獣をコスト踏み倒しして攻め込む<青赤緑ヴァルキリアス・ムサシ>を使う。

威勢がいいが腕前はまいち。

月小路あゆな Ayuna Tsukinokoji

黄色に染めた髪の毛が目立つ少女。《悪魔神バロム》をこよなく愛しているが、実際に使用するのには《悪魔神ドルバロム》。

東日本代表戦では、K県を勝たせるためのハンデとしてわざわざ《悪魔神バロム》を使った。しかしそれでも勝ってしまう。

組合の一員。メイン戦術はもちろんくターボドルバロム。>

<月小路流ターボドルバロム>

【クリーチャー】

《ヤミノカムスター》

《解体人形ジエニー》

《解体人形ジエニー》

《威牙忍ヤミノザンジ》

《威牙忍ヤミノザンジ》

《凶刻の刃狼ガル・ヴォルフ》

《凶刻の刃狼ガル・ヴォルフ》

《魔城の黒鬼オルガイザ》

《威牙の幻ハンゾウ》

《魔刻の斬将オルゼキア》

《殲滅の英雄ハンニバル》

《悪魔神ドルバロム》

《悪魔神ドルバロム》

《腐敗無頼トリプルマウス》

《腐敗無頼トリプルマウス》

《腐敗無頼トリプルマウス》

【呪文】

《シークレット・クロックタワー》

《シークレット・クロックタワー》

《シークレット・クロックタワー》

《エナジー・ライト》

《エナジー・ライト》

《エナジー・ライト》

《トリプル・ブレイン》

《超次元リバイヴ・ホール》

《超次元リバイヴ・ホール》

《超次元ミカド・ホール》  
《超次元ミカド・ホール》  
《超次元ロマノフ・ホール》  
《ガンヴィート・ツイスト》  
《デーモン・ハンド》  
《デーモン・ハンド》  
《フェアリー・ライフ》  
《フェアリー・ライフ》  
《フェアリー・ライフ》  
《フェアリー・ライフ》  
《フェアリー・ライフ》  
《母なる紋章》  
《母なる紋章》  
《母なる星域》  
《超次元フェアリー・ホール》  
《超次元フェアリー・ホール》  
《超次元フェアリー・ホール》  
【超次元ゾーン】  
《時空の賢者ランブル》  
《時空の封殺ディアス》  
《時空の霊魔シュヴァル》

## 組合

九尾左近 Sakon Kyubi

狐を思わせる、細目細身の少年。人なつこく、とっつきやすい性格をしているが、諸々すべて演技である可能性が高い。

<墓地進急速攻>に《死神の魔龍虫ビヤハ》を投入したデッキを愛用していたが、《魔光蟲ヴィルジニア卿》が殿堂入りしてからはど

うなっただのか？

高月聖夜 Seiya Takatsuki

眼鏡をかけた少年。坂姫虎聖に先立つ、眼鏡キャラの元祖である。と思いきや、その坂姫虎聖よりも先に田所強がいたりする。

《聖霊王エルフェウス》や《無限の精霊リーサ》、《無敵城 シルヴァー・グロリー》によるタップキルを戦術とする。

加納鈴蘭 Suzuran Kano

黒く長い髪の毛と、黒く全身を覆う服に身を包んだ女性。T県個人代表。

デュエマは冷静沈着なプレイングだと思われがちだが、余裕が大きすぎるため冷静に見えるだけであって、頭の中では思考がフルに回転している内弁慶。

5色デッキをメインに戦術を組み立てる。東日本個人代表戦では<5色バルカディアス>を使って紫音を潰した。

『デュエリスト：ソーサラー』。

<鈴蘭5色コントロール改>

【クリーチャー】

《光牙忍ハヤブサマル》

《不滅の精霊パーフェクト・ギャラクシー》

《聖霊王アルファディオス》

《威牙の幻ハンゾウ》

《魔刻の斬将オルゼキア》

《深塊封魔ゲルネウス》

《護聖霊騎ヴァルチャー》

《護聖霊騎ヴァルチャー》



《龍仙ロマネスク》

《戦攻竜騎ドルボラン》

《悪魔神王バルカディアス》

【呪文】

《リフレクティング・レイ》

《超次元ドラヴィタ・ホール》

《超次元ドラヴィタ・ホール》

《超次元ドラヴィタ・ホール》

《エナジー・ライト》

《エナジー・ライト》

《トリプル・ブレイン》

《トリプル・ブレイン》

《超次元ミカド・ホール》

《超次元バイス・ホール》

《超次元バイス・ホール》

《ロスト・ソウル》

《ロスト・ソウル》

《フェアリー・ライフ》

《フェアリー・ライフ》

《フェアリー・ライフ》

《フェアリー・ライフ》

《フェアリー・ミラクル》

《フェアリー・ミラクル》

《フェアリー・ミラクル》

《フェアリー・ミラクル》

《母なる紋章》

《母なる星域》

《魂と記憶の盾》

《執拗なる鎧亜の牢獄》

《執拗なる鎧亜の牢獄》

《超次元ガード・ホール》

《超次元ガード・ホール》

《超次元ガード・ホール》

【クロスギア】

《ノーブル・エンフォーサー》

【超次元ゾーン】

《時空の不滅ギャラクシー》

《時空の不滅ギャラクシー》

《時空の精圧ドラヴィタ》

《時空の戦猫シンカイヤヌス》

《時空の凶兵ブラック・ガンヴィート》

《時空の封殺ディアス》

《時空の喧嘩屋キル》

《時空の支配者ディアボロス》

竜條連次 Renji Ryujō

髪の逆立った少年。

全国大会優勝経験者だが、何者かに世界大会出場を阻まれたとか。ドラゴンを連続投下するく連ドラ>がメインな戦術。組合のメンバーだったが、後に脱退した。

月小路あゆな Ayuna Tsukinokoji

D県代表を参照。

岬点晴 Tensei Misaki

組合のデュエリスト。デッキタイプを読ませない。

『デュエリスト：ズー』。

アルベール・ディフ Albert Dighs  
フランスに生まれ、日本のデュエマ環境で育った組合のデュエリス  
ト。

『デュエリスト：シナー』。

## F 県代表

夢坂一美 Kazumi Yumesaka

夢坂四姉妹長女。暑苦しい。速攻デッキをメインに勝ちあがった少女。F 県個人代表。  
滾るハートで<赤青ヤヌス速攻>を使う。

<夢坂ブルーレッドヤヌスデッキ>

【クリーチャー】

《凶戦士ブレイズ・クロ》

《凶戦士ブレイズ・クロ》

《凶戦士ブレイズ・クロ》

《凶戦士ブレイズ・クロ》

《ブルース・ガー》

《ブルース・ガー》

《ブルース・ガー》

《ブルース・ガー》

《斬込隊長マサト》

《斬込隊長マサト》

《斬込隊長マサト》

《斬込隊長マサト》  
《ライラ・ラッタ》  
《ライラ・ラッタ》  
《ライラ・ラッタ》  
《ライラ・ラッタ》  
《火ノ鳥カゲキリ》  
《火ノ鳥カゲキリ》  
《機神装甲ヴァルタイソン》  
《機神装甲ヴァルタイソン》  
《機神装甲ヴァルタイソン》  
《隻眼の粉碎脚ポン吉》  
《隻眼の粉碎脚ポン吉》  
《襲撃者エグゼドライブ》  
《襲撃者エグゼドライブ》  
《襲撃者エグゼドライブ》  
《エメラル》  
《アクア・ジエスタールーペ》  
《アクア・ジエスタールーペ》  
《アクア・ジエスタールーペ》  
《アクア・ジエスタールーペ》  
《アクア・サーファー》  
《アクア・サーファー》  
《アクア・サーファー》  
《アクア・サーファー》  
【呪文】  
《超次元エクストラ・ホール》  
《超次元エクストラ・ホール》  
《超次元エクストラ・ホール》  
《超次元キル・ホール》  
《超次元キル・ホール》  
《超次元キル・ホール》  
《超次元キル・ホール》

【超次元ゾーン】

- 《時空の英雄アンタッチャブル》
- 《時空の踊り子マティーニ》
- 《時空の踊り子マティーニ》
- 《時空の戦猫シンカイヤヌス》
- 《時空の戦猫シンカイヤヌス》
- 《時空の戦猫シンカイヤヌス》
- 《時空の喧嘩屋キル》
- 《時空の喧嘩屋キル》

夢坂二葉 Futaha Yumesaka

夢坂四姉妹の次女。明朗で余裕たつぷりの馬鹿。F県団体戦代表リーダー。

まさかのく星龍マーシャル+アルメリックで地雷勝利を狙って勝ち上がったタイプだが、東日本代表戦ではメタをにかけて負け。

夢坂三香 Mika Yumesaka

夢坂四姉妹の三女。口数が少なくおどおどしがちだが、実は強い心を持ち、反面姉に甘えたがりの作者的に書きづらい奴。F県団体戦代表。

構築甘めのく超次元ドルゲーズで勝利を狙ったら勝てた。

<夢坂式ドルゲーズ>

【クリーチャー】

- 《光牙忍ハヤブサマル》
- 《パクリオ》
- 《スペース・クロウラー》
- 《スペース・クロウラー》

《斬隠蒼頭龍バイケン》

《解体人形ジエニー》

《龍神へヴィ》

《魔刻の斬将オルゼキア》

《魔刻の斬将オルゼキア》

《青銅の鎧》

《青銅の鎧》

《青銅の鎧》

《大神秘ハンニャ》

《剛撃戦攻ドルゲーザ》

《剛撃戦攻ドルゲーザ》

《剛撃戦攻ドルゲーザ》

《剛撃戦攻ドルゲーザ》

【呪文】

《エナジー・ライト》

《エナジー・ライト》

《エナジー・ライト》

《エナジー・ライト》

《超次元ガロウズ・ホール》

《超次元リバイヴ・ホール》

《超次元ミカド・ホール》

《超次元ミカド・ホール》

《ロスト・ソウル》

《ロスト・ソウル》

《超次元ロマノフ・ホール》

《超次元ロマノフ・ホール》

《フェアリー・ライフ》

《フェアリー・ライフ》

《フェアリー・ライフ》

《フェアリー・ライフ》

《鼓動する石版》

《時空の庭園》

《超次元フェアリー・ホール》

《超次元フェアリー・ホール》

《超次元フェアリー・ホール》

《ナチュラル・トラップ》

《ナチュラル・トラップ》

【超次元ゾーン】

《時空の踊り子マティーニ》

《時空の賢者ランブル》

《時空の凶兵ブラック・ガンヴィート》

《時空の封殺ディアス》

《時空の邪眼ロマノフ》

《時空の喧嘩屋キル》

《時空の喧嘩屋キル》

《時空の支配者ディアボロス》

夢坂四保 Shihō Yumesaka

夢坂四姉妹の末女。本気で口数が少なく、無表情がベース。F県団体戦代表。

カード知識がまるでない初心者。残りの二人が勝ってたから、ついていく形で団体戦メンバーに残ることができた。

その他

田中華奈海 Kanami Tanaka

鈴井水子と電話していた少女。どこかの病院に容れられており、看護師の監視の目が厳しくなかなか遊べない。

『デュエリスト：フルリセット』。

アシュリー・ベアトリクス Ashley Beatrix  
ヨーロッパ大会で王者に輝いた北欧の女性。ハンデス連打による相手の機能不全を狙う。殿堂発表が怖い。

『デュエリスト：アムネジア』。

犬養軌跡 Kiseki Inukai

白髪の少年。ヘッドホンを首にぶらさげているが、音楽に興味はない。

一通りの構築を楽しみ終えたので、次は他人のデッキをパクって独自の回転を見つけてやろうと思っている。  
回せないデッキはない。メインデッキが存在しない。

以上です。

好きなデッキはありましたでしょうか？

長々とお付き合いありがとうございました。



## 閑話エエ（前書き）

今回はデュエルはお休みです。

この文章は実在するカードゲーム「デュエル・マスターズ」を主軸に置いた物語です。

なお、この物語はフィクションもいいとこの作り話に過ぎません。それゆえ、実在する団体や地名、氏名年齢住所電番、公式大会などとは一切関係どころか縁もゆかりもございません。

## 閑話ⅠⅠ

デュエル・マスターズDS<sup>デュアル・ソウル</sup>

エピソードシリーズとは、いずれ世に輩出される「新たなカード群」の俗称である。

かつては「サイキック・シヨック」や「エボリューション・サーガ」など多様にその名を変え、世に語り継がれた。そして登場したカードたちはプレイヤーの手に渡り、大会でその技量を披露する。それらカード群はいずれも、確かな実験や考察を重ねた上で「開発」される代物だ。

開発。  
研究。

この過程の後に、さらに時間を置いて「新たなカード群」は輩出される。

だから その輩出の門を迎える前に、限られたプレイヤーの手に元にあるなどという事態は、本来あつてはならない。

「 まあ、そりゃそつつすよね」

田所が吐いたのは生返事。

加納鈴蘭の神経の隙間を縫うような、ギリギリの発言だ。

《アルタイル・セブ・クロウラー》、《復活の祈禱師ザビ・ミラ》。2枚ものエピソードシリーズのカードを使用しておきながら、我関せずという態度を取ったのである。

「なら、何故それらはあなたの手元にあるのか、ちゃんと説明できるかしら」

「『あの子と同じ事情つすよ』、鈴蘭さん。たまんねえつすね、まさか俺が下手人で、末世出のカードを世に出した張本人だなんて悲しいこと考えてるわけじゃ、ないつすよね？」

「あら、そうじゃないと思ったの、ぼうや？ まさかあなたまで、こんな辺鄙な場所に犬養軌跡がこのこと現れ、見ず知らずの少女と少年に見ず知らずのカードをギフトした……なんて、言いたいのか？」

田所は、今度は返答しない。

それを見て、鈴蘭は小さくため息をつく。

「……仕方ないわね。ええ、そうしましょう。犬養軌跡がココに現れ、未発表のカードを誰とも知らない少年少女に渡した。そんな、笑い転げるお話を信じるわ。ええ、お腹が痛くなりそうよ」

「俺はともかく、あの夢坂ってコは嘘なんかつかねえつすよ、多分。ついたって意味ないし」

夢坂三香が、まさか犬養軌跡と知り合いなどという偶然はないだろう。

ただでさえ犬養軌跡は神出鬼没。加えて、夢坂姉妹などという名前は聞いたこともない。

……等々。どうでもいい思考と会話に没頭したせいか、

「……何やってんだ？ 田所」

青森凌駕に見つかった。

いや、あれだけ堂々とデュエマを繰り広げていたら、見つからないほづがおかしい。

帽子の下から覗く目はきよとんとしている。対戦相手を務めていた月小路あゆなは、申し訳なさそうな顔で鈴蘭のもとへ。

「あんたを迎えに来たんすよ……凌駕さん。さっさと行きましょ  
う」

「いやでもよ、田所、なんかこいつら俺に用があるみたいなんだけど」

「無視っちゃえばいいじゃねっすか。俺らとそいつらと、どっちが大事なんだって話すわ、凌駕さん？」

むー。と凌駕は少し考える。

……傍らで、鈴蘭は黙っている。

誰にも感じ取られないような、妙な気配を知覚している。

鈴蘭は、この香りを知っていた。

（ 暇人だわ ）

『その誰か』への悪態を心の中で唱える。

瞬間、それに応答するかのように、『その誰か』は出現れた……。

「やあ、こんにちは」



僕の名前は岬点晴<sup>ミサキてんせい</sup>。そうだなあ、『デュエリスト：ズー』だとか言われてるけど、大したことはないよ。よろしく、青森凌駕くん、田所くん……だったかな」

「俺に何の用？ 悪いけど、仲間が呼んでるみたいなんだ。帰るぜ、田所」

凌駕は岬の話避ける。

田所もそれは同意のようで、なんというか『話を聞いただけプラスにはならない』と確信した顔で去ろうとする。

……凌駕は、『デュエリスト：ズー』の名前に覚えがあった。

ズー（動物園）。その名の示すものは、意外な中身。

対戦相手にデツキタイプを読ませず、ミスリードから隙を作り、そこに腕を捻じ込んで勝利を決り取るプレイヤー。

こういう、頭が働く奴と会話をしてもイイことはないのだ。勘がそう言っていた。

「まあ、すぐ終わるから聞いていきなよ」

岬は言葉のみでふたりを制止する。

「犬養軌跡の居場所をあげるからさ」

岬は言葉のみで、凌駕の神経に稲妻を走らせた。

……犬養軌跡。

凌駕の何かに触れる、キーワード。

「……………本当か？」

凌駕は岬を見る。

睨むでもなく、敵意を向けるでもなく、単純に、見た。

「本当だよ。実はもう、組合は彼の居場所を特定しているんだ。ただ、そう、紙の上の話がうまくかみ合わないだけなんだ。紙面は誰もが無表情になれる。難しい話だよな」

「……話って何だよ。俺は」

「まあ、落ち着いてくれ。僕は知っているんだよ、凌駕くん。君は犬養軌跡を追っているね。必死になるのも分かるよ。」

「ちょっと話は変わるけど。えっと確か 楽絵さんだったかな？ 楽絵紫音という女の子は、それを知っているね。うん、本心を友人に打ち明けるのは大切なことだ」

「……話が見えない。」

「凌駕はせかすでも苛立つでもない。無表情だ。」

「本当に、そう。すぐに地団太を踏んで、相手の胸倉を掴みあげそうなくらい『無表情』だ。」

「ただし、それが本当ではないのなら 君は友人を騙していることになる。それは分かっているのかい？ 僕の目には、そうは思えないけどな」

「何のことだ？ ユーモアのセンスねえな、ナイトショーでも」  
「眺めてろ、ってかい？ それは楽しい相談だけど、僕は忙しいんだ、悪いね。」

「僕が言いたいのは、君は本心じゃない部分を彼女に教えているんだ、凌駕くん。僕は知っている。」

「君が、犬養軌跡の目的を知っているってことをね」

「空気が軋んだ。」

「君の父、青森天馬は優秀な開発部員だ。しかし何故かな、大人の事情で彼はポストを降格された。」

おそらくそこが、『組合』の考えと相反するからなんだろうね。

一応聞くけど、『組合』の意図を君は知っているかい？」

「……知ってるぜ、それくらい……！ おまえらが、」

「ああ、大丈夫、分かっているよ。言わずとも。」

降格された彼は、カード開発部の中でも最下段の席に置かれることになった。以前までは積極的な参加を示していたのに、現在はただの人みたいな扱いだ。当然だね、あの世界では位と発言力は等価だから。

そこで、青森天馬は いや、青森天馬『容疑者』は賭けに出た。君という子息にね、青森凌駕くん」

現在のカード開発部の内装を知っているかい？

もちろん、開発を担当するのは大人なんだけど、原案やデザインに関しては少年少女などの子供まで取り入れている。数年前からの試みだね。

彼らは『子供の意見』として参考にされるために導入された、真正銘のスタッフだ。カードゲームの優秀さを買われた子達だよ。

君と同じくね、青森凌駕くん。



君もそこにスタッフとして在籍していたね。数少ない初期メンバーだ。他には、九尾左近や、高月聖夜つて名前もあつたかな？ もちろん、君の古い親友である楽絵紫音の名前もあった。

実際のカードプレイヤーの年齢とスタッフの年齢を合わせることで、ユーザー目線で開発を研究しようという試み。これは思いのほか、いい効果を生んだ。

多人数試合という概念が登場したのもこの頃からさ。子供はなにかとチームプレイが好きだからね。なんだろう、児童雑誌の影響かな？ まあ、余計な話は置いておこうか。

以上のように、デュエル・マスターズは人気を博していった。

そのうち、開発部スタッフも徐々に入れ替わり、開発指向も少しずつ変動していった。まあよくある話さ。

そしてそれは起こった。ある日の『大人の会議』の時さ。カード開発部、ジュニアスタッフ代表だったある少女が、ついあることを口にしてしまったんだ。

「いまデュエルマスターズの人気は最高潮に達しています。これを機に、さらなるデュエマの経済的指向を伸ばすべきではないでしょうか」

誰とは言わないよ。誰しもが、少なからず胸に抱いていた野心だからね。

要するに、カードをもつと金儲けのために使うべきだ、っていう意見が出されたんだ。それも真面目な会議場での話だ。

そして、その意見は『考慮に値する』とされた。

これに反発したのが君の父、青森天馬さ。彼はカードに格別、熱い精神を注いでいた。そのカードを、金儲けを最優先として扱われるんだからたまったものじゃない。

当然、カードも商品なのだから金儲けを主とするのは当たり前だけれど彼は何かを感じたんだろうね。これは『やりすぎる』って。

開発部はこれを却下。青森天馬を開発部の隅に追いやって、しば

らくは以前と同様のやり方でカードデザインを進行させた。

でも少しずつ路線を変えていく。

あれだよ、『資産ゲー』という言葉を知っているかい？ デュエル・マスターズをそれに近づけよう、というのが近年の開発部の意向なのさ。

すべては、君の父が消えてからだ。

この頃から、さらにデュエマ人口を増やすためのある政策が打たれた。

デュエマ界で、強さの象徴となるべきシンボルを設けようとしたのさ。

アイドルグループ、なんて言えば、違った印象を与えそうだけど、感じとしてはそれに似てる。強さの象徴だよ、例えば『あのチームに所属するやつは強い』みたいなね。象徴を作るってことは、共通の目標を作るってことなのさ。

……こうして、僕たち『組合』は誕生した。

僕らは、金儲けのためのイメージシンボルなのさ。

「……どうかな、田所くんはここまで認識していなかったんじゃないかな」

「……………」

田所は正直、面喰らって動けない。

「『組合』は限定会員制のチームだね。それも、公式開発部と組合が定めた称号を獲得していないと、新規のメンバーは入れない仕組みになってる。二つ名システムというのはこのために存在するんだ。これを持たずに所属しているのは初期メンバーだけだよ。」

『組合』の認知度は年々増している。雑誌やインターネットなど、肥沃な情報媒体を手に入れた現代社会の権化だね。

そしてすべてのデュエマプレイヤーは、『組合』というひとつの位を目指す。実際、『組合』に在籍できることで得られるバックアップは相当なものだ。例えば、新カード『エピソードシリーズ』の内容を逸早く入手できたりね。公式開発部とつながっているんだから、当然可能だ。この『組合』に所属することで得られるメリットを求めて、成績を残そうと奮闘するプレイヤーもいるほどだよ。」

分かるかな、と岬は繋げる。

「正義と悪、この二極化した区分で君たちに境界を引くとするなら、『組合』は正義で、それに逆らう君たちは悪になる。」

「岬。その新カードの情報どころか、現物を握った者がふたりもいるわ。ひとりはどこかへ行ってしまったようだけれど……もうひとり、そう、いま目の前に」

鈴蘭の言葉に、へえ？と岬は凌駕、田所を見る。

細い瞼の隙間から覗く黒い鏡。

眼球だけの生き物とは、もしかこんなカタチをしているのではないだろうか。

「……まあ僕は凌駕くんのデュエルを観戦させてもらっていたから、君が持っているわけではないのは分かる。ということは、田所くんなのかな？」

「……………俺がどうかしたんすか」

「君の持っている、エピソードシリーズのカード、見せてもらえるかな」

田所は無言で示す。

渡す意思はないのかい、と目の前の眼球が問いかけるも、田所は答えない。

「困ったね。新しい商品を世に出る前に入手することができるのは、僕たち『組合』の特権なんだけれど」

「持つてるもんはしょーがねえじゃないっすか。どっかで拾ったとでも思っついてほしいっすね」

ふう、と岬はため息をつく。

まあ仕方ない、予想していた返事だ、と言いたげである。

「……まあいいか。本題に入ろう。」

凌駕くん。僕たち『組合』は、その月小路あゆな他、様々な手で君を優勝させようとしていた。まあ本当は僕たち『組合』の人間が優勝すればよかったんだけどね、シンボルの役目としては。

けどどうっか君が勝ち残ったみたいだから、路線を変えて君を優勝に導くことにした。手っ取り早く言うと、それはここで行う取引のためさ」

「取引？」

「僕は君に、犬養軌跡の居場所と、そこへ辿りつく方法をリークしよう。そこで何なりとお話でもするといいさ、本当に……そう、今すぐにやめる』とか、ね」

「っ

」

「冗談さ、と岬は笑う。

「もう言いたいことは分かっただろう。僕が差し出すのは、君の求める人物の居場所。」

そして僕が いや、『組合』が君に求めるのは……君が僕たちの仲間として、『組合』に所属することを認めることだ」

その笑顔のまま、岬は取引を提示する。

エサは投げた。

もう獲物は引き返せない。業深き渦に自ら飲み込まれる。それを確信し、神託する預言者のように。

「青森凌駕くん。僕の仲間になろう」

t o b e c o n t i n u e d .

閑話ⅠⅠ（後書き）

話ばかりですみません。

次回からちゃんと日本一決定戦に話が進みます -  
-

「VS」日本代表決定戦「1」（前書き）

もう前書きはそろそろ省略してもいいよね。

## 「VS」日本代表決定戦「1」

デュエル・マスターズDS デュアル・ソウル

日付は進んで秋。

春の暮れに幕を開け、夏を跨いだデュエル・マスターズ世界王者選手権大会は、日本予選も残すところ今季のみとなった。これまでに経るは県予選、東西予選。そして、最終的に東西からそれぞれ選出された県どうしが火花を散らす大舞台。

それが、三日後に控えた日本大会決勝である。

「ハヤブサマル ってことでよかったかな。あ、今の攻撃でブロックだね」

「そうですねー。わたしは東日本決定戦落ちです。ってか、なんでわざわざ《冥府の覇者ガジラビュート》をブロックしたんですか？

岬先輩」

「そりゃまあ、後で《シユヴァル》なんて呼ばれたら厄介だろう？」

昼間のカードショップに堂々と2時間ほど居座る、岬点晴と月小路あゆなの2人。普段は子供たちの声で潤う店内は、今日だけどういった事情なのか、閑古鳥が鳴いていた。

「《超次元リバイヴ・ホール》超動。これの効果で、墓地に行った《ハヤブサマル》を回収する。ほら、カラ撃ちじゃあないぶん得だ



る？」

「セコい使い方ですね」

「賢い奴が回すハサミみたいなものだ。僕は思うな」

通算16試合目。勝利数計算すら飽きてくる2人。

月小路あゆなは以前と同じように、ドルバロムデッキを回転させ続ける。一方、レクリエーション気分デユエマの相手を引き受けた岬点晴は、様々なデッキを使い分けて月小路のテストプレイに付き合っていた。ちなみにどれも構築の甘い二流デッキ。

「じゃありバイヴ・ホールから《時空の剣士アクア・カトラス》だ。ついでに《ガイアル・ゼロ》でシールドを殴ろう。おっと《英知と追撃の宝剣》と《エナジー・ライト》だね、じゃあ超次元ゾーンから《タイタンの大地ジオ・ザ・マン》と《時空の喧嘩屋キル》を呼ばせてもらおうか。ターン終了だ」

「じゃ、わたしのターンです。《死神の蘇生者シュタイナー》を召喚。その能力で墓地からクリーチャーを1体復活させます。じゃあ《蒼狼の始祖アマテラス》を選択。

アマテラスの能力で、デッキから《母なる星域》をプレイ。効果でアマテラスをマナゾーンに置き、マナゾーンにある進化クリーチャーをバトルゾーンに出します。進化せよシュタイナー、行けっ《悪魔神ドルバロム》！」

「あれ。これはヒドいな。バトルゾーンだけでなくマナゾーンまで壊滅してしまった。そっちにはパワー13000のT・ブレイカーが残るわけか」

「はい、わたしの勝ちですね岬先輩」

「うーん、そうだなあ。やっぱりマナ加速なしのコントロールはこの時勢、通用しないのかもね。やれやれ、月小路さんも強くなつたねえ」

「ちよっとキラ相手に回しまくってましたから！ 岬さんも本気で

やりましょうよっ」

「キラって誰だい？ ……うーん本気かあ。言っちゃ悪いけど、僕は本気を出す必要がないかなあ。カードゲームは勝つためのものじゃない、楽しむためのものだからね」

「うわあ。それ、岬先輩が言っちゃうとすごく嘘っぽい」

ゲームを決着させるよりも、決着がついたらしき瞬間を見極めた段階で切り上げるようになっていた。

「じゃ、次はこのデッキで行こうかな。勝負しよう、月小路さん」  
「了解です。 ……あ、そうだ岬先輩。結局、彼らは何をしようとしてたんですか？」  
「彼ら？」

岬はカードの束を軽やかにシャッフルしながら答える。月小路はシールドを並べていた。

「ほら、青森凌駕と田所強の2人です。夏の大会で会ったじゃないですか」

「会ったね。確か東日本代表決定戦だったかな」

「あの後、彼ら何を始めようとしてたんですか？ わたし気になっちゃって」

「そうだな。僕には予想はつかないけれど」

『青森凌駕くん。僕の仲間になるっ』

『だが断る。急いでなんかいないからな、俺は。お前らに決勝で勝

てば、どうせあいつは勝手に出てくるんだろ?』

岬点晴の誘いを1秒で蹴る青森凌駕。

あの夏の会場で交わされた最後の会話と、その顛末である。

『確かに、君が日本一になれたなら、あの犬養軌跡とともにワールド・プレイヤーになれるね。世界大会へのエントリーは、日本一の経験がある人間のみその権利を持つ。そこへ辿り着くまっとうな方法は、勝ち続けることだ。君の理屈は正しい』

『ちょうどエピソードシリーズも解禁の時期だろ。これからデュエマの環境は混沌するぜ。お前らの得意なアドバンテージが無くなるのは、ちょうど、今なんだよ』

カードデザインに直接携わっている「組合」は、次世代のカードプールを知ることができる。開発中のカードを知ることができ、それを使ったデッキを誰よりも先に研究してしまえる。なので、発売と同時にそのデッキを作成し、誰よりも早く研究を終えた状態になれるのだ。

……しかしそれは、カードプールがある程度安定を迎えた頃に通じるカンニング。古いカードから新しいカードに移り変わる際、その真っ只中にある変換の時期だけは、「組合」も予想できない何かが起こることが多いのだ。

基本的に、エキスパンションの初弾は120種類で構成される。その中へ多種多様なカードを詰め込むため、予想外なカードの活用方法などがまれに登場してしまうことがありえるのである。

『その可能性はあるね。ただ、本当にあるのかは疑問だけれど』

『問題はそこじゃねえだろ? おまえら「組合」が、何かの拍子に首かかれて負けちまうんじゃないかって、俺は心配してやってんだよ。長髪さん』

『さてね。「組合」の人間は時間的にも情報的にもアドバンテージを得ているのは事実だ。後は単純な、腕の見せ合いになるんじゃないかな？ せいせい頑張ってくれ、凌駕くん』

「……………って感じに話が終わっちゃって、僕はすぐ帰ったからなあ。正直、印象深い会話なんてなかったね」

「つまりどういうことですか？ あ、《ランブル・レクター》で攻撃してもいいですか？」

「いいよ、シールドで受けよう。ああ、つまりね、僕は彼らが何かをしようとしてるだなんて、思っちゃいないってことだ。……………シールドトリガー、《靈騎秘宝ヒヤックメー》召喚。手札から《斬隠蒼頭龍バイケン》を2体と《無頼聖者サンフィスト》、《翔竜提督ザークピッチ》を1体ずつ。バイケンの能力で、後続の連中をすべてバウンスだ」

「うひゃー、カウンターヒヤックメー怖いです。……………って、どうしてそう思うんですか？」

「彼らは何かをしようなんで、ありえないよ。どうせ何もできないだろうからね。それより、これは僕の勝ちでいいかな？」

「そうですね、トリガーも無いですし、わたしシノビ持ってないですし。ありがとうございます。うーんブロッカーが足りないのかな……………」

「なに言ってるんだい。ブロッカーなんて空気だろ？」

何ができるなんて、思っではないない。

気にかけることがあるとするならただひとつ。

田所のみならず、門外不出のエピソードシリーズの存在を青森凌

駕までもが知っていたこと。

日本一決定戦まで、あと3日。

………が一瞬で過ぎて、日本一決定戦当日。ある第三土曜日。

「りょーろーうがー！！」

開催地はT県。これまでとは比較にならない舞台が用意されていた。

Tグラウンドホテル。景観と接待は一流と評され、またたく間に人気の的となった高級宿泊施設。今回の決戦はそのホテルの一角、スパー・ホールを借り切って行われる。

「おっす。久しぶりだなー柳！ ちょっとは特訓したのかよ」

何日も会っていない友人同士のように、笑顔で言葉を交わす柳太

一、青森凌駕。

田所、鈴井はすでに集合場所に腰掛けていた。

「凌駕さん、どもっす」

「お、田所。髪伸ばした？」

「………ほかに何か言うことないんすか、1月くらいぶりなんすけど。会っの」

わりーな、と笑う凌駕。

鈴井は柳と親しげに会話している。……夏の東日本代表決定戦の後、夏休みを利用して、鈴井、柳、田所の三人はデュエル・マスターズの練習を強化した。その成果が試される場が、今日という日であり、ここスーパー・ホール 日本代表決定戦という舞台なのである。

「鈴井さん、あれからデツキは？ いじった？」

「うん。攻め方とか……けっこう、教えてもらったとおり」

「なら大丈夫だね！ いよいよ今日が『本番』だから、いざという時に失敗しないようにしないと」

「うん……！」

その会話が耳に届き、怪訝そうに目をやる凌駕。

「なあ、田所」

「なんすか帽子先輩」

「おい何だそれ。……なんつーかよう、あの2人さ、何かあったのか？」

「さあ。わりと休みの間、秘密特訓してたっばいすよ。上級者の譜面とか手本にしたり、俺もいろいろ手伝わされたっす」

懐かしいような、あまり思い出したくないような顔で田所は夏休みを振り返る。2人の熱心さには手を焼いたものの、熱意は確かに持っていたのだと。

「へー。しばらく見ない間に、みんないろいろやってんだな。お前はどうよ、田所？」

「あ、俺には俺の師匠がちゃんといるんで。正直、あの2人に混じ

って特訓とかマジ勘弁っす」

「おいコラおまえチームメイトだろが。1年後輩なんだっけ？」

「そっすけど。なにも夏休みまで引っ張って、あの人らについてく必要ないじゃないっすか。ぶっちゃけレベル低いつすし。そうだ凌駕さん、『本番』の前に1回フリーしないっすか？」

「お、いーねえ。けど、あんま時間かけらんねーからな？」

「いつすよ。どうせ《アルファディオス》で制圧したらすぐっすよ？」

「はっ、かわいくねーな。……おい、みんなー」

凌駕が仲間を呼ぶ。なんだなんだと耳を傾ける4人。

「いいか？ 何回も聞いて耳が痛えだろーけど、今日が正真正銘『

本番』だぜ。気合たりてるかつ！」

「もちろん！」

元気のいい返事が、柳だけから返ってきた。

鈴井は蚊の鳴くような声を出してぎゅっと拳を握る。たぶんこれが気合の入れ方なんだろう。彼女流の。

田所は「そういうノリちょっとついてけないっすね」と言わんばかりだ。

「おーけー。じゃ、ミスるなよ」

「……………?」

会場を訪れているのは、主に4種類の人間だった。  
青森凌駕の属する東日本代表、K県代表チーム。

その相手となる、いまだ詳細不明の西日本代表チーム。  
それらの試合を観戦しに来た見物客。

そして、それら以外の項目を目的に掲げる、第4勢力。  
会場の隅で、目立たないようにこの場所を見守る人物 岬点晴  
は、まさにK県代表にとっての宿敵となる、西日本代表チームに分  
類される。

「……………ここまでは普通。普通の大会の風景……………だが」

岬点晴は実力者として、過去に幾度と「こつこつ舞台」を経験し  
ている。その研磨された神経ゆえか、強者弱者の区別はいうに及ば  
ず、会場全体の空気を掴むことにも長けていた。

彼は、言いようのない違和感を感じていた。

何かが翳っている。表現ができないけれど確かに違う。

（なんだろう。なにか、 なにか違っていている気がする。もしかし  
て……………）

……………青森凌駕、この感覚の正体はキミなのか？

滅多に開かれることのない、彼の瞳の深淵が、いま真っ直ぐに凌  
駕を捉えていた。

t o b e c o n t i n u e d .



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0165n/>

---

デュエル・マスターズDS

2011年8月14日08時30分発行